

令和5年度
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業
研究報告書 最終年次



令和6年3月
奈良県教育委員会
事業拠点校 奈良県立国際高等学校

令和5年度 WWLコンソーシアム構築支援事業 研究報告書 目次

はじめに

教育長挨拶	1
学校長挨拶	2

1 事業概要

1.1 構想計画書	3
1.2 実施計画書	4
1.3 事業完了報告書	9

2 管理機関の取組

2.1 ALネットワーク運営委員会	25
2.2 ALネットワーク担当者会議	26
2.3 高校生国際会議実行委員会	27
2.4 ALネットワーク運営指導委員会	28

3 拠点校の取組

3.1 拠点校の取組概要	29
3.2 カリキュラム開発	
3.2.1 概要	32
3.2.2 グローバル探究I	
a 全体計画	33
b 地域探究の成果と課題	34
c 3ゼミへの再編成について	36
d スタディツアーへの取り組み	37
e 情報年間計画	38
3.2.3 グローバル探究II	
a 全体計画	40
b 6つのゼミの説明	41
c ゼミの取り組み	42
d たてにつながる交流会	53
e スタディツアー行程	54
f スタディツアーの成果と課題	55
3.2.4 グローバル探究III	
a 全体計画	62
b 6つのゼミ研究テーマ一覧	63
c ゼミの取組の成果と課題	64
d 高校生国際会議	74
e 論文作成	87
3.2.5 グローバル探究の評価	88
3.2.6 世界の言語I	
a 全体計画(シラバス)	90
b 3学期の課題研究と振り返り	91
c 手話講座	92
d 韓国・韓国語特別講座	92
3.2.7 世界の言語II	
a 全体計画	93
b 言語ごとの学び合い授業	94
3.2.8 世界の言語III	94

3.2.9	Immersion Science	96
3.2.10	英語	
	a 概要	97
	b EAP I	98
	c EAP II	101
	d ガーレイノルズ名誉校長の授業	103
3.3	授業外の学び	
3.3.1	国際教養大学イングリッシュビレッジ	104
3.3.2	立命館アジア太平洋大学 (APU)異文化理解研修	107
3.3.3	地域とのかかわり	
	a 登美ヶ丘わいわいフェスタ2023	109
	b 中学校での韓国文化体験	110
	c 登美ヶ丘南公民館英語サロン	111
	d 秋風のコンサート	112
	e with kitchen の取り組み(生徒報告)	113
3.3.4	図書館の取り組み	
	a ビブリオバトル	114
	b 多言語、特設コーナーなど	115
3.3.5	GCCの取り組み	116
3.3.6	生徒会の取り組み	117
3.4	成果の発表	
3.4.1	プレゼン甲子園	119
3.4.2	高校生フォーラム	120
3.4.3	英語弁論大会など	122
3.4.4	韓国語スピーチコンテスト	125
3.4.5	中国語スピーチコンテスト	126
3.4.6	スペイン語スピーチコンテスト、レシテーションコンテスト	128
3.4.7	フランス語の成果	129
3.4.8	校内での防災啓発講座	130
3.4.9	WWL成果報告会	132
3.5	国際交流	
3.5.1	長期留学	
	a 長期留学生リスト・生徒の現況感想	134
	b 留学体験発表会	135
3.5.2	留学生の受け入れ	136
3.5.3	オンライン国際交流	
	a 概要	138
	b ニュージーランド Lytton高校	140
	c ドイツの高校との交流	141
	d 日本メキシコ学院 ひまわり日本語学校	144
	e 台湾 国立嘉義高級中学校	145
	f フランス サン・テレーズ高校	147
	g 世宗国際高等学校	151
	h 今後の計画	152
3.5.4	国際理解講座	
	a ドイツ文化講座	153
	b 第2回文化講座	164
3.5.5	対面国際交流	
	a 日本メキシコ学院高校生来校	155
	b タイ中高校生来校	156

令和5年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究報告書に寄せて

奈良県教育委員会 教育長 吉田 育弘

令和3年度から採択されました文部科学省指定事業のWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業も事業最終年度を迎え、3年間の事業が完了しつつあります。奈良県立国際高等学校を拠点校とし、県立奈良高等学校、県立畝傍高等学校、県立青翔高等学校、県立法隆寺国際高等学校、県立高取国際高等学校、奈良女子大学附属中等教育学校及び奈良学園登美ヶ丘高等学校を事業連携校として、多様な課題の解決に向けて行動を起こすことができるイノベティブなグローバル人材の育成を目指し、3年間取組を進めてきました。事業協働機関の皆様をはじめ、本事業に御支援、御協力をいただいております皆様方に、心から御礼申し上げます。

本事業では、AL（アドバンスト・ラーニング）ネットワークの形成のもと、カリキュラム開発事業を中心に、その取組を県全体に広げていくことを目指して取り組んできました。拠点校である県立国際高等学校においては、開校以来、「グローバル探究」「世界の言語」のカリキュラム開発、推進を中心に取り組み、連携校においても、各校の特色を生かしながら探究活動を進めてきました。また、学校間で共有、連携することで探究の質を高め、奈良県あるいは世界の諸課題を建設的に解決していく力を生徒が身に付けられるよう、教員も学校の枠を越えて取り組んできました。事業協働機関には、生徒の探究活動がより豊かな発想で深いものになるよう、多様な視点とヒントを提供していただきました。各校と協働機関が大きな輪となって、生徒の学びをより高度な深いものにできることが、このネットワークの大きな利点であり、3年間で県内外、国内外をつなぐ学びのネットワークが構築されたことは大きな成果です。

事業の取組の一つとして、今年度も高校生国際会議を開催することができ、今回は対面での発表、ディスカッションを行うことができました。高校生の視点での新たな価値の提唱が、高校生自らの手で、この奈良から世界に向けて発信されたことを誇りに思います。

本事業は今年度で終了となりますが、次年度以降、3年間の事業成果をさらに県内各校に広く波及させるとともに、本事業のコンセプトを引き継ぎながら各校においてさらに深化した取組が継続して行われるよう支援してまいります。本県の歴史と文化の強みを生かし、世界で活躍できるグローバル人材の育成を引き続き行ってまいりますので、今後も皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

持続可能な社会に向けて

奈良県立国際高等学校長 中尾 雪路

変化がますます激しくなるこれからの時代を生きる子どもたちには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を最大限に発揮し、自ら人生を創出することが求められます。

このような時代の要請を受け、奈良県教育委員会が平成30年10月に県立高等学校適正化実施計画を策定し、「新たな価値を創造する場」として、県立国際高等学校が令和2年4月に開校いたしました。県立国際高等学校は、「多様な人々と積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」ことをMissionとしています。

このMissionを実現するため、奈良県立国際高等学校では、生徒たちが6つの力を身に付けることを学校の大きな目標としています。6つの力とは、主に知に関する分野の「探究力」「創造力」、心に関する分野の「協働力」「寛容さ」、行動の部分にあたる「挑戦力」「キャリアデザイン力」です。

Missionや6つの力と親和性が高いことから、開校準備段階から、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業を想定した学校づくりを行ってまいりました。令和3年度に、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校として認定をいただき、これまで3年間、校内のカリキュラム開発や県内外の連携校や関係機関とともに行う高校生国際会議などの取り組みを進めてまいりました。

メインテーマは、「最古の国際都市奈良から発信～持続可能な社会に向けて～」としています。

奈良はかつて、シルクロードの終着点として、古来の文化と渡来の文化が交流・融合を果たし、他に類を見ない国際性を誇り発展を遂げてきました。しかしながら、現代においては、グローバル化やAI・IoTの進展により、人、物、資本、情報等の国境を越えた移動が容易になった一方で、地球規模の課題も浮き彫りになっています。

このような状況下、まずは、足もとの奈良県を見つめ直し、1300年以上の歴史と文化の強みを再認識しながら、異なる価値観や歴史・文化・宗教等の視点を取り入れ、新たな視点から課題を探ることが必要です。

そして、次に、かつてのシルクロードのように、奈良県との縁が深い東アジアと交流を図り、類似性や相違点を踏まえた東アジアとしての課題を見出し、それらの課題に関して、多様な人々との協働を行いながら、様々な角度から考察し、新たな価値を提唱していく必要があります。

奈良県から東アジア、そして世界へと視野を広げ、グローバルな視点で地域の未来のために本気で取り組んでいくことができる人材を育成していくことこそが、長期的に見て、奈良県の、日本の、世界の持続可能な未来を創造すると考えています。

奈良県に学ぶ高校生がこの事業を機につながり、持続可能な社会の担い手として協働することができるようなコンソーシアムの構築に、今後も取り組んでまいりたいと考えています。連携校や関係機関のみなさまにおかれましては、引き続きご支援、ご指導を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

【別紙様式4-1】 期間	ふりがな	ならけんきょういくいいんかい	都道府県番号
令和3年度	管理機関	奈良県教育委員会	29
～	ふりがな	ならけんりつこくさいこうとうがっこう	奈良県
令和5年度	事業拠点校	奈良県立国際高等学校	

令和5年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 構想計画書（概要）

構想名（30字程度以内）

最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～

構想概要（400字以内）*テーマ設定したグローバルな社会課題について必ず記載すること

拠点校である県立国際高等学校でSDGs等の地球規模の課題解決に向けて探究的な活動を行う先進的なカリキュラムの研究・開発を行う。また、奈良県教育委員会が中心となり、拠点校、県内の国公私立高等学校、海外の高等学校や国内外の大学・企業・国際機関等が協働して、奈良の地から東アジア、そして世界へと視野を広げたイノベティブなグローバル人材を育成するためのAL(アドバンスラーニング)ネットワークを構築する。
様々な事業連携機関や留学生等の多様な背景や考え方、価値観を持つ人々との協働を通して、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて、新たな価値を提唱していく。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名	
管理機関		奈良県教育委員会						吉田 育弘	
事業拠点校		奈良県立国際高等学校 (公立)						中尾 雪路	
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	対象:	国際科	117	182	183	482	482		
	対象外:					0	0		
事業共同実施校	①	()						0	
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	対象:					0	0		
	対象外:					0	0		
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)	①	国連世界観光機関(UN Tourism)駐日事務所							
	②	公立大学法人国際教養大学							
	③	株式会社アイエスエイ							
	④	学校法人河合塾							
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	奈良県立奈良高等学校 (公立)						前田 景子	
	②	奈良県立畝傍高等学校 (公立)						大石 健一	
	③	奈良県立青翔高等学校 (公立)						河合 知子	
	④	奈良県立法隆寺国際高等学校 (公立)						上田 精也	
	⑤	奈良県立高取国際高等学校 (公立)						石澤 竜義	
	⑥	国立大学法人奈良女子大学附属中等教育学校 (国立)						吉田 隆	
	⑦	奈良学園登美ヶ丘高等学校 (私立)						安井 孝至	
	⑧	Aquinas College (Australia) (私立)						Peter Hurley	
	⑨	Gymnasium Ernestinum Rinteln (Germany) (私立)						Reinhold Lüthen	

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 奈良県奈良市登大路町30番地
管理機関名 奈良県教育委員会
代表者名 教育次長 春田 晋司

1 事業の実施期間

令和5年4月1日(契約締結日)～令和6年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 奈良県立国際高等学校
学校長名 中尾 雪路

3 構想名

最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～

4 構想の概要

拠点校である県立国際高等学校でSDGs等の地球規模の課題解決に向けて探究的な活動を行う先進的なカリキュラムの研究・開発を行う。また、奈良県教育委員会が中心となり、拠点校、県内の国公立高等学校、海外の高等学校や国内外の大学・企業・国際機関等が協働して、奈良の地から東アジア、そして世界へと視野を広げたイノベーティブなグローバル人材を育成するためのAL(アドバンスラーニング)ネットワークを構築する。

様々な事業連携機関や留学生等の多様な背景や考え方、価値観を持つ人々との協働を通して、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて、新たな価値を提唱していく。

5 令和5年度の構想計画(本事業における教育課程の特例の活用:有)

(1) ALネットワークの形成

① 運営委員会の開催

ネットワーク運営委員会を組織し、年2回の会議をオンラインで開催
第1回 令和5年度のALネットワークの運営方針と予定を決定(6月)
第2回 令和5年度の研究総括(2月)

② 事務局会議(ALネットワーク担当者会議)の開催

奈良県教育委員会事務局高校の特色づくり推進課内に事務局を設置し、拠点校や関係機関との情報共有及び高校生国際会議開催のためのALネットワーク担当者会議を月1回オンラインまたは対面で開催

③ 海外大学・国内トップ大学進学、海外留学を促進する取組の実施

- ・海外留学説明会の開催(4月～5月)
- ・海外大学・国内トップ大学進学セミナーの開催(7月、12月)
- ・留学キャラバン隊の実施(8月)

- ・中国清華大学でのワークショップ開催（8月） ※引率旅費県費負担
- ・国際教養大学教授を招聘し出前講座を開催（秋頃） ※県費負担
- ・韓国延世大学とのオンライン交流（1月頃）
- ④ カリキュラム・アドバイザーの配置
契約日以降に配置したカリキュラム・アドバイザーが月2日程度勤務し、以下の業務にあたる。
 - ・カリキュラム研究開発計画に関する指導（5月）
 - ・カリキュラム内容についての指導・助言（通年）
 - ・教員向けワークショップの運営指導（8月）
 - ・3年間の研究総括と事業終了後の研究開発計画の指導助言（3月）
- ⑤ 高校生国際会議の開催
国際会議は、令和5年8月にオンライン及び対面のハイブリッド型で実施を予定
 - ・共催となる国連世界観光機関駐日事務所との協議及び情報発信依頼（4月～）
 - ・ALネットワーク担当者会議及び高校生による高校生国際会議実行委員会を開催（月2回程度）し、拠点校及び連携校の高校生が国際会議を運営する。
 - ・令和4年度に開催した高校生国際会議と同様に、世界的課題解決をメインテーマとする基調講演を行い、その後、参加者が6つのテーマに分かれた分科会を開催する。分科会後に、それぞれの分科会で議論された内容を共有し、高校生の目線での課題解決に向けた提言を行い、世界に発信する。
- ⑥ 県内大学等が開催するサマースクール等への参加
 - ・連携校の生徒が海外の大学生等とともに学ぶ機会を創出できるよう関係機関と調整
- ⑦ 探究プラットフォームフォーラムの開催
 - ・連携校で「探究プラットフォーム」（ALネットワーク担当者会議）を開催（6月）
 - ・教員向けワークショップを開催（10月）
 - ・各校の探究活動の成果を総合的な探究の時間部会と協働で発表・共有し、課題点等を協議するフォーラムを開催（2月）
- ⑧ 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画
 - ・アドバンストプレイスメントシステムの構築にむけて、県内外の大学側と検討・調整（6月～）
 - ・大阪公立大学・同志社女子大学との教育連携協定締結により、高校生が各大学等で会に開催される特別講義へ参加し、それらの大学へ入学した際にそれぞれの大学での単位認定される単位先取りシステムにつなげる。

(2) 研究開発・実践

- ① 拠点校でWWL推進委員会を開催（5月、9月、1月）
委員長：校長
委員：教頭 ESD部長 教務部長 キャリア支援部長 学年主任
- ② 学校設定科目「グローバル探究」の開発・実践
身近にある問題から探究のプロセスを繰り返す中で、自分自身の課題を設定し、フィールドワークやシンガポールでのスタディツアーなどで探究を深めながら、最終学年では、高校生国際会議の開催、日本語と英語での論文作成を目指す。
ア「グローバル探究Ⅰ」（1年次3単位 必修） ※情報Ⅰ（2単位）を代替
 - ・情報Ⅰのテキストを用いた学習（通年 1単位）
 - ・ボルネオ島・旭山動物園をつないだオンライン授業（6月）
 - ・大阪公立大学「データサイエンス講座」（2月）
 - ・6つのゼミによる探究活動・フィールドワーク（2学期以降）
 - ・各分野の専門家によるワークショップの開催（2学期以降）
 - ・校内発表会（1月）

イ「グローバル探究Ⅱ」（２年次３単位 必修）

- ・ 6つのゼミによる探究活動・フィールドワーク（通年）
- ・ シンガポールスタディツアー（１０月）※昨年度は国内で実施
- ・ 外国人講師（６名）の英語によるグローバル課題研究の指導（２月～）
- ・ 海外の高校生・大学生との英語による課題研究オンライン交流（１１月以降）
- ・ ガー・レイノルズ名誉校長によるプレゼンテーション講座（１０月）

ウ「グローバル探究Ⅲ」（３年次３単位 必修）

- ・ 6つのゼミによる探究活動・フィールドワーク（通年）
- ・ 外国人講師（６名）の英語によるグローバル課題研究の指導（５月～）
- ・ 高校生国際会議の運営及び課題研究発表（７月）
- ・ 課題研究についての日本語及び英語での論文作成（９月～）

エ 教員向けワークショップの実施

③ 学校設定科目「世界の言語」の開発・実践

複数の言語を学ぶことで、言語間の共通点や相違点に気付き、言語そのものへの理解が深まるだけでなく、世界の多様性への意識を育むことができる。このため、５言語すべてを学ぶカリキュラムを奈良教育大学吉村雅仁教授の指導で開発・実践する。研究成果については JACTFL（日本外国語教育推進機構）や EDILIC（Éducation et Diversité Linguistique et Culturelle）で共同発表。

ア 世界の言語Ⅰ（１年次２単位 必修）

各言語の特性を理解するために、中国語、韓国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語の５言語すべてについて、聞き、話す言語活動を中心に行う。

イ 世界の言語Ⅱ（２年次２単位 必修）

１年で履修した第２外国語の中から１つの言語を選択し、聞く、話す、読む、書く言語活動を行う。

ウ 世界の言語Ⅲ（３年次２単位 選択）

２年で履修した第２外国語を継続して選択し、基礎的な文法及び語彙を学びながら日常的なテーマでコミュニケーションができる力を養成する。

④ 課題研究を効果的に進めるための取組

ア ホールスクールアプローチの構築

- ・ ユネスコスクールキャンディデイト校（予定）としての ESD の推進

イ カリキュラム・マップの作成

- ・ 全教職員による「グローバル探究」を中心に据えた教科横断的な学びの推進

ウ 英語によるコミュニケーション力向上のための取組

- ・ 総合英語Ⅰでのネイティブ教員によるプレゼンテーション指導（通年）
- ・ ネイティブ教員及びガー・レイノルズ名誉校長による「サマーセミナー」の実施（８月）
- ・ 専門科目「ディベート・ディスカッションⅠ・Ⅱ」における指導（２年次２単位、３年次２単位）
- ・ 専門科目「エッセイライティング」における論文指導（３年次２単位）
- ・ 国際教養大学イングリッシュビレッジの開催（３月）

エ 外国人講師、ネイティブ教員の配置

- ・ ６人の外国人講師を配置し、「グローバル探究Ⅱ」及び「グローバル探究Ⅲ」の６つの研究分野で英語によるグローバル課題研究をコーディネートする。（５月～２月）
- ・ ５カ国語のネイティブ教員を配置し、「世界の言語Ⅰ」で月１回、「世界の言語Ⅱ」及び「世界の言語Ⅲ」のすべての授業で日本人講師とともにティームティーチングを行う。（県費負担）

オ 校外機関との連携

- ・地域、企業及びNPOとの連携を推進する。
- カ 国際教養大学及び旭山動物園での探究活動ワークショップ、立命館アジア太平洋大学での異文化理解研修開催（最大30名 旅費補助一人50000円）
- ⑤ 国際交流を進めるための取組
 - 海外の連携校拡大を推進（通年）
 - 連携協定締結事務のため、渡航（11月、1月の2回）
 - ア 「世界の言語」言語圏にある学校との交流
 - ・フランス サン・テレーズ高等学校（姉妹校：フランス語）
 - ・メキシコ 日本メキシコ学院 ひまわり日本語学校（スペイン語）
 - ・台湾 台湾嘉義高級中学（中国語）
 - ・韓国 K-POP 高校（韓国語）
 - ・ドイツ ドイツ FSG Gymnasium ドイツ Volkshochschule Humburg（ドイツ語）
 - イ 英語圏にある学校との交流
 - ・ニュージーランド NZ Lytton High School
- ⑥ 留学生と一緒に英語等での授業等を履修する体制を整備
 - ・留学生の受け入れ（通年） 令和4年度受け入れ実績：5名（タイ・カンボジア・インドネシア・マレーシア・スウェーデン）
 - ・学校設定科目「サイエンスイマージョン」理数的な側面の課題について英語で探究。

（3）事業の成果検証・評価

- ① カリキュラムの成果検証

事業拠点校で、1年次、2年次、3年次の4月に、学校法人河合塾のアセスメントテスト「学びみらいPASS」を実施し、リテラシー・コンピテンシーを客観的に把握することで、研究の成果や課題を確認するとともに、生徒自らが客観的に伸びを認識する機会とする。アセスメントテスト受験後は、河合塾主催で教員及び生徒向けの講習会を実施し、カリキュラムの成果について分析を行う。
- ② 運営指導委員会による評価

WWL コンソーシアム構築支援事業運営指導委員会を開催し（2月）、専門的な見地から指導・助言、評価を受ける。

（4）成果の公表・普及

- ① 奈良県教育委員会事務局高校の特色づくり推進課のWebページにおいて事業の取組を広く公開する。
- ② 事業拠点校のWebページ（日本語・英語）において、拠点校における取組を広く公開する。
- ③ 探究プラットフォームフォーラムを外部へ公開する。
- ④ 事業拠点校で、研究授業・研究協議を実施する。
- ⑤ 事業成果発表会（2月）

<添付資料> ・令和5年度教育課程表

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
(1)AL ネットワークの形成 ①運営委員会の開催 ②事務局会議（ALネットワーク担当者会議）の開催 ③海外大学進学等の促進	高校の特色づくり推進課 等	川崎崇（管理機関）

④カリキュラム・アドバイザーの配置 ⑤高校生国際会議の開催 ⑥県内大学サマースクール等への参加 ⑦探究プラットフォームフォーラムの開催 ⑧大学教育の先取り履修に向けた計画		
(2)研究開発・実践 ①WWL 推進委員会の開催 ②「グローバル探究」の開発・実践 ③「世界の言語」の開発・実践 ④課題研究を効果的に進めるための取組 ⑤国際交流を進めるための取組	県立国際高校 等	中尾雪路 (拠点校)
(3) 事業の成果検証・評価 ①カリキュラムの成果検証 ②運営指導委員会による評価	県立国際高校 高校の特色づくり推進課	① 中尾雪路 (拠点校) ② 川崎崇 (管理機関)
(4) 成果の公表・普及 ①県教育委員会 Web ページ ②拠点校 Web ページ ③探究プラットフォームフォーラムの成果を公開 ④拠点校の公開授業 ⑤事業成果発表会	県立国際高校 高校の特色づくり推進課	① 川崎崇 (管理機関) ② 中尾雪路 (拠点校) ③ 川崎崇 (管理機関) ④ 中尾雪路 (拠点校) ⑤ 川崎崇 (管理機関)
(5) 報告書の作成	高校の特色づくり推進課	川崎崇 (管理機関)

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間 (契約日 ~ 令和6年3月31日)												
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	
(1)AL ネットワークの形成													▶
(2)研究開発・実践													▶
(3) 事業の成果検証・評価				○			○			○			
(4) 成果の公表・普及													▶
(5) 報告書の作成													○

8 再委託先の有無 無

9 所要経費
別添のとおり

【担当者】

担当課	奈良県教育委員会事務局 高校の特色づくり推進課	TEL	0742-27-9853
氏名	川崎 崇	FAX	0742-23-4312
職名	指導主事	E-mail	kawasaki-takashi@office.pref.nara.lg.jp

(別紙様式3)

令和6年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 奈良県奈良市登大路町30番地
管理機関名 奈良県教育委員会
代表者名 教育次長 山内 祐司

令和5年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
令和5年4月1日（契約締結日）～ 令和6年3月31日
- 2 事業拠点校名
学校名 奈良県立国際高等学校
学校長名 中尾 雪路
- 3 構想名
最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～

4 構想の概要
 拠点校である県立国際高等学校でSDGs等の地球規模の課題解決に向けて探究的な活動を行う先進的なカリキュラムの研究・開発を行う。また、奈良県教育委員会が中心となり、拠点校、県内の国公立高等学校、海外の高等学校や国内外の大学・企業・国際機関等が協働して、奈良の地から東アジア、そして世界へと視野を広げたイノベーティブなグローバル人材を育成するためのAL（アドバンスラーニング）ネットワークを構築する。
 様々な事業連携機関や留学生等の多様な背景や考え方、価値観を持つ人々との協働を通して、既存の仕組みを客観的に見つめ直し、最古の国際都市である奈良から持続可能な社会に向けて、新たな価値を提唱していく。

5 教育課程の特例の活用の有無
有

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和5年4月1日～令和6年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 運営委員会の開催			第1回								第2回	
運営指導委員会の開催											運営指導委員会	

② AL ネットワーク担当者会議の開催	第1回		第2回	(以降、Google Workspace for Education のClassroom を活用し、随時、情報共有)								
③ 海外留学を促進する取組の実施		留学セミナー・留学キャラバン隊告知		留学セミナー・留学キャラバン隊					次年度セミナー等の打ち合わせ			国費高校生留学促進事業募集開始
④ カリキュラムアドバイザーの配置	雇用開始	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	年間20日勤務
⑤ 高校生国際会議の開催					高校生国際会議							
生徒運営委員会の開催		第1回	第2回	第3回	第4～6回	第7回						
⑥ 探究プラットフォームフォーラムの開催				授業公開				学習指導研究会	成果報告会		学習研究発表会	
⑦ 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画	(拠点校を中心に連携大学を新規開拓(関係大学担当者と協議等))											
									大阪公立大学招待授業		同志社女子大学招待授業	

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a 拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況について

カリキュラムアドバイザーを早期に雇用し、拠点校において教員及び生徒の指導を担当するとともに、連携校へも派遣を促した。同時に、外部講師の謝金及び旅費を確保し、連携校からの派遣依頼も呼びかけた。

拠点校での公開授業や成果報告会では、探究活動の進め方や支援の方法、評価のあり方等について、拠点校での取組を具体的に説明し、参加していただいた先生方同士で積極的に議論や共有をし、各校での実践に生かせるヒントを持ち帰ってもらえるようにした。

国の他事業を実施している連携校に対しては、その事業の下で取り組んでいる探究等も積極的に共有してもらえるよう依頼した。

b 関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況について

AL ネットワーク運営委員会は、拠点校、連携校及び協働機関の代表者によって構成されているが、より円滑に事業を運営するために、拠点校及び連携校からAL ネットワーク担当者を選出していただき、AL ネットワーク担当者会議を開催した。実際に生徒を指導する立場にある教員がこの会議に参加することで、拠点校及び他の連携校で行われている取組について情報共有し、それぞれの学校での取組促進につなげた。

また、連携校同士がスムーズに情報共有を行えるよう、Google Workspace for Education を活用して「AL ネットワーク担当者 Classroom」を作成し、適宜、高校生国際会議生徒運営委員会の進捗状況等の情報共有を行った。

c 構想内容の水準を維持するため、管理機関の長、拠点高等学校の校長が果たした役割について

管理機関の長は、AL ネットワーク運営委員会を運営し、事業の進捗を管理した。また、事業推進のための人的支援及び財政的支援を確保した。

拠点校校長は、拠点校教員を指導し、校内体制の整備に努めた。校内のESD部を中心に事業に組織的に取り組む体制を構築した。本県における取組の構想水準を維持するために、連携校及び協働機関と密に連絡を取り、必要な場合には拠点校で打ち合わせする機会を設け、また、協働機関を訪問し、進捗状況などを報告するとともに、助言を求めた。さらに、AL

ネットワーク拡大のため、国内の高等学校・大学を訪問し、新規連携協定の開拓に奔走した。海外の高等学校や教育機関とも積極的に連絡を取り、海外の事業連携校のネットワークも広がりがつつある。

d 運営指導委員会の開催実績や事業の実施状況の検証について

拠点校、連携校、協働機関の代表者による第1回運営委員会は6月に開催し、第2回運営委員会は2月に開催予定である。外部委員から構成する運営指導委員会は、2月に開催予定であり、事前に本年度の取組内容や3年間の事業成果、課題等をまとめた資料を配布し、当日はその資料を基に、拠点校、管理機関からの報告の後、運営指導委員から指導助言をいただく予定である。今年度は、高校生国際会議にも運営指導委員が参加され、生徒の取組を直接見ていただき、多様な御意見、御感想をいただいた。

e 拠点校の卒業生の進路と成長の過程を追跡把握する仕組みの構築について

拠点校である国際高等学校は、昨年度初めての卒業生を輩出した。入学当初から海外への留学及び進学希望をもつ生徒や探究活動に高い興味関心を示す生徒が多いことから、今後、奈良県教育委員会としても、国際高等学校の卒業生の進路を追跡調査し、その動向やそれぞれの活躍について、学校と連携を図りながら、調査していきたい。

f アジア架け橋プロジェクトの留学生の支援体制について

本年度、奈良県にはアジア高校生架け橋プロジェクトを利用して、2名の留学生が来日している（A F S全体では10名来日している）。管理機関においては、受け入れ校と連絡を取り、留学生の状況を把握している。それぞれの受け入れ校では、留学生担当の教員を配置し、県教育委員会及びA F S関係者と連絡を取り合いながら、留学生の日本での生活をサポートしている。

【財政的支援】

a 管理機関が自己負担額として計画段階よりさらに計上した経費について

高校生国際会議の開催にあたり、対面、オンライン両方での実施が可能になり、多くの参加者が見込まれたため、よりよい環境で充実した会議にする上で、機材使用料等に計画時より多くの経費を要したため、県の負担額として執行した。

b 管理機関による人的又は財政的な支援や教職員育成の研修やセミナーについて

県内の高等学校を対象とした探究に係る学習指導研究会及び学習研究発表会を実施し、各校における取組の普及を行っている。

また、拠点校において、県内の全ての公立小学校、中学校・義務教育学校及び高等学校の教員を対象に公開授業等を実施し、指導助言を行い、取組の充実を図っている。

c 国の委託が終了した後に継続的に事業を実施するための計画

「世界の言語」ネイティブ教員の人件費及び旅費は、WWLコンソーシアム構築支援事業終了後も継続して予算化する予定である。

高校生国際会議についても、事業終了後も継続実施できるように、会場費、機材使用料、消耗品費、生徒旅費等を県で予算化する予定である。また、国際会議に向けて、英語でのディスカッション力を養成するため、外国人講師を招き、継続的にワークショップ等を行えるよう予算化して実施する予定である。

【ALネットワークの形成】

a ALネットワーク運営組織の実績について

管理機関、拠点校、連携校及び協働機関が同じ方向に向かい事業の目標を達成できるよう、第1回ALネットワーク運営委員会を6月に開催し、事業運営の方向性について確認した。拠点校及び連携校から学校長が出席し、協働機関からは各機関の代表が出席した。連携校学

校長からは同事業への協力を約束し、協働機関からは、それぞれが得意とする分野での連携や協力を確認した。

b ALネットワーク運営組織による新たな協働事業の開発や有効な事業実施について
それぞれの取組について協働機関にも情報提供をし、一緒に取り組んでいただけることや協力していただけないか、話し合いを重ねて協働できる可能性を探った。

2月には第2回ALネットワーク運営委員会を開催し、本年度および3年間の事業内容を振り返り、運営指導委員会からの指導助言も参考にして、事業終了後の次年度以降の継続した取組の可能性について協議した。

c プログラム修了生の国内外の大学進学や海外留学促進について

協働機関である株式会社アイエスエイからは、海外留学に向けた情報提供や希望をもつ生徒のカウンセリングを継続的にしていただいている。また、海外留学への目が県内生徒に広がるように、県教委主催で留学キャラバン隊も実施している。国際高校を令和5年3月に卒業した1期生は161名のうち海外大学に7名が合格し、5名が進学した。また、教育連携協定を結んでいただいている大阪公立大学や同志社女子大学に関しては、高校生が大学への授業参加や大学教員の国際高等学校への出前授業などが実現している。県教育委員会としては、これらの連携を高大連携や単位先取り制度の構築へとつなげていきたい。

d カリキュラムを開発する人材の配置状況について

カリキュラムアドバイザーは、年間20日のペースで国際高等学校に勤務していただき、生徒および教員に対して、探究活動の指導、助言をしていただいた。また、「個人探究週間」や異学年が学び合う「たてにつながる探究交流会」を提案いただくなど、カリキュラム開発を推進いただいた。

カリキュラムアドバイザーが学校に勤務することで、「グローバル探究」授業担当者（国際高等学校では全教員が担当者である）は、授業について相談しやすい環境にあり、任意の相談を随時受けて、助言をいただくなど、拠点校の探究活動の大きな支えとなった。

e 高校生国際会議等の実施について

第2回高校生国際会議を8月10日に開催した。対面、オンライン合わせて県内4校、県外2校、海外から4校、合わせて約300名の生徒が参加し、6つのテーマに分かれてSDGs等の地球規模の課題について議論を交わし、意見をまとめ、全体に向けて提言を行った。

高校生国際会議では、ALネットワーク校から集った生徒約50名による高校生運営委員会が企画・運営を行った。高校生運営委員会では、学校の枠を越えて生徒同士が積極的に意見を交わし、回を重ねるごとに共通理解を深めていった。

f 事業成果の社会普及や成果報告会などの実施について

本事業における事業成果は、拠点校のホームページで公開する。県内の各広報メディアにも掲載し、各報道機関にも報道資料として提供し広く県民にも周知する予定である。

g 取組の計画、効果的かつ円滑な運営のための情報収集・提供について

6月に開催した第1回ALネットワーク運営委員会では、年間の事業内容や方向性を共有し、同じ目的に向かって取り組めるようにした。また、Google Classroomを活用し、情報共有や必要な周知などを年間を通して行い、担当教員同士が常に連携できるようにした。

また、拠点校、連携校の生徒同士でも必要に応じて連絡ができるように、生徒用のClassroomも設け、異なる学校の生徒同士、生徒と教員が密にコミュニケーションをとれるようにした。

h 関係機関との協定文書等について

「公立大学法人国際教養大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の教育連携に関する協定」

「大阪府立大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の教育連携に関する協定」
 「同志社女子大学及び奈良県立国際高等学校の教育連携に関する協定」

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和5年4月1日～令和6年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①推進委員会の実施		第1回			第2回					第3回		
②学校設定科目「グローバル探究」の開発・実践			職員研修	公開授業	日本教育学会発表				成果発表会			公開授業
グローバル探究Ⅰ		探究交流会 フィールドワーク		探究交流会					成果発表会			探究交流会
グローバル探究Ⅱ		探究交流会	ゼミ活動開始	探究交流会			中間報告会 スタディツアー		成果発表会			探究交流会
グローバル探究Ⅲ		探究交流会		探究交流会	高校生国際会議	論文作成開始			論文完成			
校外発表会参加					全国プレゼン甲子園 長崎東平和会議 名古屋国際VRカンファレンス				高校生フォーラム			奈良TIME発表会
③学校設定科目「世界の言語」の開発・実践						JACTFL 論文発表		公開授業	成果発表会			
世界の言語Ⅰ	オリエンテーション 言語①	言語① 言語②	言語②			言語③	言語③ 言語④	言語④ 言語⑤	言語⑤ 言語選択講演会	振り返り 手話講座 課題研究	手話講座	課題研究
世界の言語Ⅱ	各言語	各言語	各言語			各言語	各言語	各言語	各言語	振り返り 課題研究	課題研究	課題研究
世界の言語Ⅲ	各言語	各言語	各言語			各言語	各言語	各言語	各言語			
校外スピーチコンテスト							中国語	フランス語 韓国語 英語スピーチ	英語ディベート 留学生日本語	フランス語		(スペイン語)
④課題研究を効果的に進めるための取組		畿央大学出張講義 カリキュラムアドバイザー講演会	プレゼンテーション講義	畿央大学出張講義	Asian Youth Forum			異文化理解研修 (APU)	大阪公立大学研修	イングリッシュビレッジ (AIU)	同志社女子大学訪問講座	国際教養大学出張講座
⑤国際交流	中国語		オンライン				オンライン		オンライン		来校	
	韓国語		オンライン	オンライン			オンライン		オンライン	オンライン	オンライン	

	スペイン語			来校				オンライン	オンライン1			オンライン	
	ドイツ語						非同期		オンライン1				
	フランス語			オンライン			非同期 オンライン1	来校		非同期 オンライン			
	英語		オンライン1	オンライン3			オンライン2	オンライン2	オンライン1	非同期	非同期	非同期	非同期
	その他							タイ来校					

(2) 実績の説明

a 設定したテーマについて

本事業では、「最古の国際都市奈良から発信～持続可能な社会に向けて～」を大テーマとし、その中に以下の6つのカテゴリーを設定した。拠点校における学校設定科目「グローバル探究」では、学年全体を6つのゼミに分けて探究活動を行っており、今年度実施した高校生国際会議においても、これら6つのテーマに基づき、国内外の高校生と議論を行った。

- 1 みんなでつくる笑顔のコミュニティ（防災、まちづくり、福祉、医療、経済、教育）
- 2 いのちの輝きを未来に伝える（生物多様性、保全、共生、環境問題）
- 3 蒼い地球を未来につなぐ（気候変動、地球温暖化、エネルギー）
- 4 先人の知恵を未来へ届ける（伝統文化継承、世界遺産、地域遺産）
- 5 グローバルが生み出す力（国際理解、国際協力、多文化共生）
- 6 みんなちがうからみんなで支え合う（平和、人権、インクルーシブ、多様性）

b イノベティブなグローバル人材育成に資する体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発を、国内外の大学、企業、国際機関等との協働により行ったことについて

本事業では、イノベティブなグローバル人材に必要な資質能力を「探究力」「創造力」「協働力」「寛容さ」「行動力」「キャリアデザイン力」という6つの力に定めている。

6つの力の検証は、学校法人河合塾と連携して作業を進めてきた。全学年で4月に河合塾学びみらいPASSの実施を実施し、6月には、河合塾山口氏を講師として教員研修を行い、生徒向け、保護者向けにもそれぞれ講演会を実施していただいている。

「キャリアデザイン力」を高めるため、大阪公立大学吉田教授を講師に招き、2年生を対象に講演会を実施した。連携協定を締結している大阪公立大学には、様々な面でカリキュラム研究開発に協力をいただいている。12月には、大学のゼミに国際高校の生徒が訪問し、課題研究について、大学生の前で発表する機会を得た。

「世界の言語」のカリキュラム開発には、奈良教育大学吉村教授の全面的な支援を受けている。「世界の言語I」プログラムの実施前後には、1年生向けに講演をいただいている。

立命館アジア太平洋大学異文化理解研修も本年度3回目を迎え、現地の留学生と異文化理解研修を行った。協定を締結している同志社女子大学にも2月に生徒が出向き、授業を受けた。同じく協定を締結している国際教養大学の出張講義やイングリッシュビレッジ(大学開催)も実施することができた。

「グローバル探究II」の一環として2年生全生徒を対象に10月にアジアスタディツアーを実施するため、株式会社JTBと共同して、現在プログラムを作成している。

c 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行う「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況。また、その実施にあたって外国人講師等を活用した実績について

拠点校には、学校設定教科「国際教養」を新たに設定した。教科設置の目的は、「異なる言語・文化、世界の歴史や自然科学について幅広く学ぶことで、国際人として必要な教養を身に付けるとともに、様々な探究活動等を通して、強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自立した態度を養う。」こととしており、この学校設定教科「国際教養」に複数の教科を融合した内容について英語で探究活動を行う学校設定科目「グローバル探究」

や英語以外の外国語やその文化について幅広く学ぶ「世界の言語」を設定し、両科目において、外国人講師を活用している。

ア グローバル探究

(7) グローバル探究Ⅰ（1年次3単位）※情報Ⅰ（2単位）を代替

年度前半は、ワークショップやフィールドワークをとおしてESDの感覚を身につけた。年度後半は、探究のプロセスを学習し、地域の魅力及び課題について情報収集を行い、発表しあった。

(4) グローバル探究Ⅱ（2年次3単位）

世界の様々な問題に係る情報収集や3年生との探究交流会などを行い、ゼミ担当教員と面談をしながら6つのテーマを基に、探究テーマを決定した。ゼミ内報告会などを経て、10月にはスタディツアーで現地で探究を深めた。

(5) グローバル探究Ⅲ（3年次3単位）

探究のテーマを深め、8月に実施した高校生国際会議において発表・協議し、宣言文により、行動方針を共有した。それぞれのテーマに基づき論文を作成し、他者と意見交換するなど探究を深めた。

(参考) 「グローバル探究Ⅰ」スケジュール

【対象】1年生
【時間】木曜6、7限 その他週1時間
<p>【目的】</p> <p>年間目標：「自ら問いを立て、それを明らかにする力を養う」</p> <p>1学期：身近な問題から解決すべき社会問題を見つけ、関心を持つ</p> <p>2学期：文献調査等の正しい方法を学び、自己の関心を見つめ直す</p> <p>3学期：自己の関心と社会問題を結びつけ、今後の探究に繋げる</p>
<p>【計画】</p> <p>1学期：身近な問題から解決すべき社会課題を見つけるために、まずは地域(奈良県)が抱える問題について考え、実際の状況を確認・検討・考察を行う。その中で、今後の探究活動に必要な手法としてフィールドワークのやり方やテーマの探し方を学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> *フィールドワーク①<5月>…グループごとに立てた問いについての地域調査 *フィールドワーク②<5月>…奈良教育大学の教授によるレクチャー *フィールドワークを受けての報告書作成・グループ発表<5・6月> *たてにつながる探究交流会で上級生の発表を聞く<5月> *個人が関心を持つ社会課題(県内・県外問わず)をマッピング法で確認、テーマの選定・調査とポスター製作<6月> <p>夏休み：6月に仮で選定したテーマに関する著作(書籍)を一冊読み、作者と自身の考えの違いを整理する。</p> <p>2学期：探究を進めるために、論文の読み方や批判的考察の手法を学ぶ。1学期と2学期の活動を通して、自身がどのゼミに所属したいか見つめ直し、自分自身が解決に取り組みたい社会課題について考察を深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> *夏休みに読んだ本に関するブックトーク<9月> *自身の進路と関心のあるテーマを引きつける<10月> *文献の探し方と批判的考察の手法を学ぶ<10・11月> …CiniiやGoogle Scholarを利用した論文の探索の方法を学ぶ *ゼミ分けに関する志望理由書の作成と面談<11・12月> *WWL 報告会で上級生の発表を聞く<12月>

冬休み：3学期以降取り組みたいと考える社会課題に関する著作を読んで関心を深める。
 3学期：ゼミごとに分かれての活動を開始させる。今後、探究活動で取り組みたいテーマを本格的に決定して探究活動をスタートさせる。その際、1・2学期に学んだ手法を活用する。

- *冬休みに読んだ著作(書籍・論文)の内容を整理する<1月>
- *社会課題を解決するため、どのような手法を用いるべきか検討を進める<1月>
- *調査のスタート<2月>

(参考) 「グローバル探究Ⅱ」スケジュール

【対象】 2年生
【時間】 木曜6、7限 他にクラス毎で週1時間
【目的】 1学期 <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミのテーマに関する世界のさまざまな問題に目を向ける ・ゼミのテーマに関する幅広い情報の収集 ・探究テーマを見つける ・持続可能な社会をつくる生き方と自分の将来をつなげる 2学期・3学期 <ul style="list-style-type: none"> ・探究テーマにそって持続可能性を阻害する問題について、その原因を探りながら、より良い未来をつくる方法を考え、高校生にできることから実践する。 ・自分たちの学びを他者に伝えるとともに、仲間の活動から学びを得る。
【計画】 1学期 <ul style="list-style-type: none"> ・たてにつながる探究交流会（5月・7月） 各ゼミの3年生の発表を聞く。 発表に関するテーマでディスカッションをする。 ・探究テーマの決定 ゼミ担当教員と面談をしながら、探究テーマを決定する。 探究活動をスタート 夏休み 2学期 <ul style="list-style-type: none"> ・中間報告会（10月） ・スタディツアー（10月） 探究を深める問いをもって参加する。 冬休み 3学期 <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミごとに活動を実施 ・たてにつながる探究交流会（3月） ファシリテーターとしてディスカッションを行う。

(参考) 「グローバル探究Ⅲ」スケジュール

【対象】 3年生
【時間】 火曜7限、金曜6、7限
<p>【目的】</p> <p>1学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究のテーマを深めつつ、高校生国際会議に向けた準備を進める。 ・論文作成に関わる、書き方や形式を身につける。 <p>夏休み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生国際会議で、宣言文を作成し、未来へつながる行動指針を共有する。 <p>2学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文を完成させ、他者と共有することにより、探究のさらなる深化を図る。
<p>【計画】</p> <p>1学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生国際会議に向けて、探究の成果を発表する。 ・論文の手引きを配布し、論文の形式や注意事項について確認する。 ・たてにつながる探究交流会（5月、7月） 各ゼミの代表生徒を選出し、発表を行う。 1・2年生と発表に関するテーマでディスカッションを行う。 <p>夏休み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生国際会議で、発表者だけでなく参加者すべてを巻き込んだディスカッションを行い、未来につながる行動指針を作成する。 <p>2学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・要旨とともに論文を完成させ、推敲をおこなう。 ・エッセイ・ライティングの授業を活用して、英語の論文を作成する。

イ 世界の言語

(7) 世界の言語Ⅰ（1年次2単位 必修）

全員が中国語、韓国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語の5言語を8時間ずつ学ぶカリキュラムを全国で初めて開発し、言語そのものの習得だけでなく、異文化、多様性の理解につなげることを大きな目的としている。各言語の最終2時間には、各言語のネイティブ教員が授業に入り、身の周りのことを表現するやり取りや異文化理解の講義を実施している。

3学期には、手話や課題研究、次年度実施するアジアスタディツアー（韓国）に向けて、学びを深めた。

(4) 世界の言語Ⅱ（2年次2単位 必修）

1年で履修した言語の中から1つの言語を選択し、聞く、話す、読む、書くの言語活動を行う。全ての授業で、日本人教員とネイティブ教員のティームティーチングを実施している。学年末には、課題研究として、各言語での学びについて、他言語を学んだ生徒に伝える成果報告会を実施した。授業の中では、各言語圏の高校生とのオンライン交流を必ず取り入れることで、異文化理解、コミュニケーション意欲の向上につなげることができた。

(5) 世界の言語Ⅲ（3年次2単位 選択）

2年で履修した言語について、聞く、話す、読む、書くの言語活動を発展的に行う。全校生徒の約半数が選択している。進路先として、各言語を継続的に学べる大学を選択したものも多く、

スムーズな大学での学びにつながるよう今後も高大連携を進めていきたい。

(参考) 「世界の言語Ⅰ」年間スケジュール

	1組	2組A	2組B	3組A	3組B
4/19	オリエンテーション (奈良教育大学吉村教授)				
4/26-6/7	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語
6/9-7/7	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語
9/13-10/6	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語
10/11-11/10	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語
11/15-12/8	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語
12/13	「言語の選択について」 (奈良教育大学吉村教授)				
1/11	手話講座				
1/13-3月	課題研究、韓国文化講座、次年度オリエンテーションなど				

各言語は8時間 (週2時間×4週間) 実施。最終2時間はネイティブ教員とのTT

d 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて実施したことについて

学校設定科目「グローバル探究」の一環として、2年生の10月にシンガポールへのスタディツアー (全員参加) を計画していたが、コロナ禍のため、行き先を国内 (北陸) に変更して10月に実施した。6つのゼミごとにフィールドワークを行い、現地の人とつながるという形で、国内ではあるが、スタディツアーの当初の目的は達成できた。

学校設定科目「世界の言語Ⅱ」では言語ごとに、その言語を話す国・地域の高校生と国際交流 (オンラインや対面、非同期) を行うことができるように、海外交流アドバイザーを中心に調整を進め、成果を上げた。

3年間の国際交流の実績は以下のとおりである。

交流言語	学校名等	非同期	オンライン	対面	連携状況
中国語	重慶女子職業高校		1		
	忠明高級中学校		1		
	嘉義高等学校	2	6	1	
韓国語	K-pop 高校		1	1	
	世宗国際高等学校		4	1(教員)	姉妹校
フランス語	サンテレーズ高校		8		姉妹校
	コリブリエットワーク			留学2	協会加盟
ドイツ語	Kaiserin Theophanu Schule Gymnasium Rodenkirchen CJD Konigswinter	4	2	1	
スペイン語	日本メキシコ学院	1	4	1	
	ひまわり日本語学校		4		
英語	Lytton high school		13		
タイ語	公立中高一貫校3校			1	
	ACCU		3(教員)		

e 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて

拠点校は、国際科単独設置校であり、1年次から3年次まで、文系・理系のクラスやコース分けのない教育課程を編成している。2年次からは、個々の進路希望等に応じて科目選択するため、卒業までに取得する単位数は、各教科で一律とはならないが、3年間の各教科における単位数は

以下の範囲の中で設定している。

教科の例	1年	2年	3年
国語	4	3～7	5
地歴・公民	2	4～5	2～9
数学	5	6～7	2～7
理科	4	2～6	2～6
外国語	6	5～7	7～11
国際教養 (教科横断)	5	5	3～10

f 学習活動が、構想目的の達成に資するよう工夫したことについて
 拠点校においては、「グローバル探究」を全教科や教科外の教育活動の中心に位置付けながら、以下のような取組を実施している。

ア カリキュラムマップの作成

「グローバル探究」を教育活動の中心として位置づけたカリキュラムマップを作成し、教科等横断的な学びが実現するように工夫をしている。

イ 「グローバル探究」におけるゼミ活動

週3時間、「グローバル探究」でゼミに分かれて探究活動を行う中で、問題解決のプロセスについて学び、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、表現力、実行力を身に付けている。

また、学年を越えた交流を大切にするため、年に数回、「たてにつながる探究交流会」を実施している。

ウ 英語によるプレゼンテーション・ライティング指導

「総合英語」では、ネイティブ教員による単独での授業を実施し、ライティングやプレゼンテーションの指導を行い、生徒の英語によるアウトプットの能力を向上させている。プレゼンテーションの世界的な第一人者であるガー・レイノルズ教授が、拠点校の名誉校長であるため、1年生対象に英語による効果的なプレゼンテーション方法についての講義（6月）も実施した。

エ 専門教科英語「ディベート・ディスカッション」

地球規模の課題について英語でディベートやディスカッションができる力を付けるため、「ディベート・ディスカッション」を全員必修とし、ネイティブ教員による授業を実施している。（2年次2単位、3年次2単位全員履修）

オ 専門教科英語「エッセイ・ライティング」

1クラスを二つに分けた少人数習熟度別でネイティブ教員または日本人教員とALTのチームティーチングで授業を実施している、1学期には英語での論文の書き方を学び、2学期には「グローバル探究」で作成した日本語の論文を英語に翻訳する指導を行った。（3年次2単位全員履修）

カ 探究力を測る

全学年4月に、学校法人河合塾のアセスメントテスト「学びみらいPASS」を実施し、リテラシー・コンピテンシーを客観的に把握することで、研究の成果や課題を確認するとともに、生徒自らが客観的に伸びを認識する機会としている。アセスメントテスト受験後は、河合塾主催で教員向けの研修と生徒向けの講習会も実施した。

キ 個人探究週間の実施

学習指導要領の改訂にともない、全校で中間考査、期末考査を撤廃し、これまでの考査期間を

「個人探究週間」としている。午前中は、異学年交流や探究や進路に関するワークショップを企画し、午後は、生徒がそれぞれの探究テーマについて深掘りできる時間としている。

g 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取組を実施（または計画）したことについて

拠点校より近畿圏の大学を訪問し、拠点校の教育活動について説明を行った上で、高大連携の協力を依頼している。連携校である大阪公立大学、同志社女子大学、国際教養大学とは、出張講義や大学での授業参加などの取り組みを進めている。また、複数の大学と、現在先取り履修に向けた協議を進めている。

h より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境整備について

ア 国際教養大学によるイングリッシュビレッジ

イングリッシュビレッジとは、2泊3日の英語だけで行われるプログラムで、国際教養大学の日本人学生2名、留学生1名が指導を行う。このことについては、すでに令和元年11月15日に締結した「公立大学法人国際教養大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の連携協力に関する協定書」の第2条第3項に明記している。本年度は1月に実施した。

イ 国際教養大学による出前講座

本年度は、3月に国際教養大学より講師を派遣し、高校生向けの出前講座を開催した。

i 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる人材を受け入れ、日本人高校生と留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制整備について

本年度は、アジア架け橋プロジェクトより1名（ミャンマー）、コリブリ留学生2名（フランス）、AFS 留学生2名（イタリア、ホンジュラス）、YFU 留学生4名（ドイツ、アメリカ）の合計9名を受け入れた。

拠点校にはESD 部内に留学生担当を置き、受け入れの事務全般にあたるほか、各留学生のメンタル面でのサポート、日本語指導のため、学習指導員を配置している。

留学生はすべての授業で日本人高校生と一緒に学び、3年で開講している学校設定科目「イマージョン理数」では、英語を用いて留学生と共に日本人高校生が理数系の探究を行っている。

j その他特筆すべき点について

「グローバル探究」のゼミ活動の中では、地域の自治会や公民館、地域のボランティアの方々などに様々な協力を得ている。各探究の内容は地球規模の課題ではあるが、課題を自分ごととして捉え、地域の人々とともにアクションを起こしていくことができるようにしていきたい。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a イノベティブなグローバル人材の育成状況について

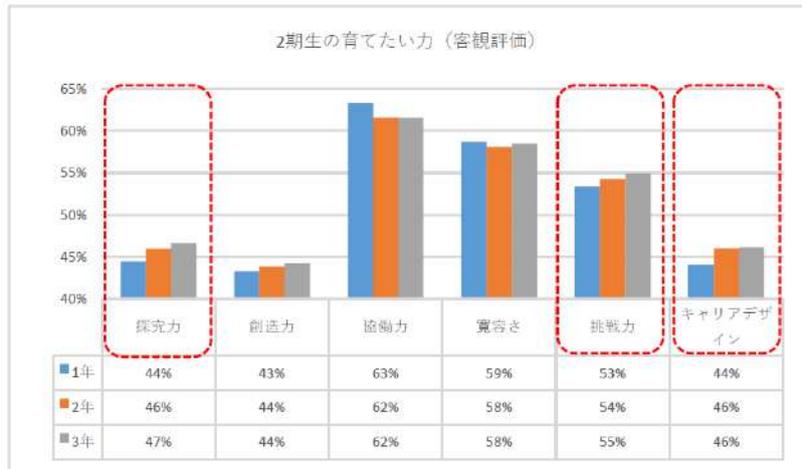
本事業では、イノベティブなグローバル人材に必要な資質能力を「探究力」「創造力」「協働能力」「寛容さ」「行動力」「キャリアデザイン力」という6つの力に定めている。

拠点校では、キャリアパスポートで、6つの力のルーブリックを示し、生徒が年度・学期の始まりや終わりに目標設定し、自己を振り返る時間を設定している。また、「グローバル探究」の時間には、6つの力をベースとしたセルフチェックシートにより自己評価を行うとともに、効果測定のための客観評価として、河合塾の「まなびみらいPASS」を全校生徒に実施し、ジェネリックスキルと育てたい6つの力の関係性を整理し、グローバル探究の効果を多面的に評価している。

	リテラシー 総合	コンピテンシー								
		対人			対自己			対課題		
		親和力	協働能力	統率力	感情制御力	自身創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
探究力	●							●	●	
創造力	●									●
協働能力		●	●	●						
寛容さ		●				●				
挑戦力						●	●			
キャリアデザイン力	●				●	●	●	●	●	●

ジェネリックスキルと育てたい6つの力の紐づけに従って各スキルの合成変数から6つの力の到達度を算出し、2期生（21年度～23年度）の変化を見たところ、「探究力」「挑戦力」「キャリアデザイン力」において成長が見られた。

また、グローバル探究の時間に実施している生徒のセルフチェックシート（生徒による自己評価）では、育てたい力全てにおいて成長実感を得ることができていることがわかった。

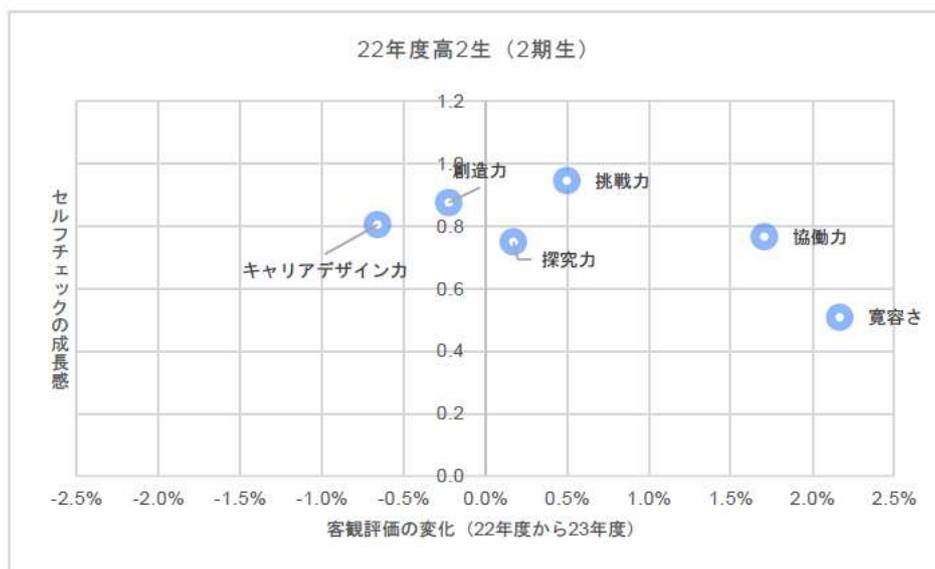


セルフチェックシートの昨年の伸長結果（22年4月から22年12月にかけて）と、「まなびみらいPASS」の22年度から23年度にかけての伸長結果を紐づけ、自己評価と客観評価にどのような違いが見られるのか分析したところ、「寛容さ」「協働力」が自己評価も客観評価も噛み合っているのが確実に身につけている力であると考えられる。

自己評価の成長感と客観評価の変化

2年

	セルフチェックの成長感 (4月→12月)	MMP客観評価 (22年度高2)	MMP客観評価 (23年度高3)	客観評価の変化
探究力	0.75	46.3%	46.5%	0.2%
創造力	0.88	44.3%	44.1%	-0.2%
協働力	0.77	60.1%	61.8%	1.7%
寛容さ	0.51	56.9%	59.1%	2.2%
挑戦力	0.95	55.0%	55.5%	0.5%
キャリアデザイン力	0.80	46.5%	45.8%	-0.7%



b ALネットワークが果たした役割について

ALネットワークの形成により、これまで奈良県に存在しなかった、事業拠点校、連携校及び連携関係機関の協力関係が生まれ、新たな学びの創造へとつながりができた。とくに、8月に開催した高校生国際会議に向けて、年度当初から公立・私立の枠を越えて生徒同士が交流し、議論し、協働した。また、教員同士もつながり、教員が新しい視点や考え方で生徒に向き合う機会にもなった。ALネットワークが果たした役割の一つだといえる。

また、今年度から大阪教育大学を拠点とする地域アドバンス・ラーニング・ネットワークもスタートしたことで、他府県のALネットワークともがつながることができた。互いに取組内容を共有したり、イベントや発表会の周知を行い、成果報告会には他府県からの参加もあった。学びのネットワークがさらに広がっていることを実感できた。

次年度以降は、これまで築いたネットワークを基に、県内の各校に取組の成果を波及させていくことが大きな目標である。

c 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況について

ア 短期的目標（1～3年）

(7) カリキュラムの開発

現在開校4年目であり、昨年度までで、「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」及び「世界の言語Ⅰ～Ⅲ」のすべてが開講され、そのカリキュラムでの初めての卒業生が巣立った。生徒の進路状況を見ても、3年間の学びを生かした進路選択が顕著であり、特色ある学びの成果が見られた。一巡したことで、カリキュラムに対する教員の共通理解も進んだ。今年度以降は、カリキュラム開発の成果を検討し、より発展させていく。

(4) ALネットワークにおけるステークホルダーの拡大

海外連携校10校、大学7大学、関係機関10機関という事業開始当初の目標値は概ね達成できた。海外のネットワークについても、海外交流コーディネーターを中心に、連携先を開拓している。「世界の言語」の授業での交流や、高校生国際会議への参加など、様々な場面でネットワークを生かした取組を行っている。国内では、ALネットワーク同士が地域ネットワークでさらにつながり、学びがさらに広がってきている。

(ウ) AP（アドバンス・プレースメント）システムの検討

システムの前提となる高大連携を現在構築しているところである。関係校とAPシステムの構築に向けて協議を進めている。

(エ) 高校生国際会議の開催

第2回の高校生国際会議を開催することができた。国内の連携校、海外の連携校、さらにその他の学校からの参加など、多くの参加があった。テーマに基づいて英語で発表し、意見交換するという目的は達成できた。現在は、ディスカッションの深化に焦点をあてて、次年度以降の開催について検討している。

イ 中期的目標（3～5年）

(7) ALネットワークの本格稼働

事業実施3年間で拡大した各ネットワークステークホルダーとの協働が事業実施後も持続可能なものとなるよう、県教育委員会を中心に計画を進めていく。

(4) APシステムの構築

システムの前提となる高大連携を現在構築しているところである。

(ウ) 拠点校、連携校における国内外トップ大学進学や海外留学の促進

拠点校では、昨年度初めて卒業生を輩出し、今年度は2期生が卒業する。「グローバル探究」や「世界の言語」といった特色あるカリキュラムで学んだことを大学での学びにつなげていくために進路先を選択している生徒も多くいる。国公立大学や私立大学の総合型選抜での合格も多く、特色ある高度な学びの成果が出ているほか、探究したことを生き生きと自分の言葉で語るプレゼンテーション力やコミュニケーション力が育まれていることが実感できる。今後、カリキュラム開発の成果やこれまでの取組と生徒の進学状況との関連を分析し、海外留学の促進に向けて見直しを図る。

ウ 長期的目標（10年）

(7) 近府県のALネットワークとの連携

連携協定締結校である名古屋国際高等学校とは、WWL 成果発表会や高校生国際会議への参加など交流を進めている。地域アドバンスト・ラーニング・ネットワークにより、関西地域のAL ネットワークとの連携が実現し、初年度である今年度は、情報交換や情報共有、各ネットワークで開催されるイベント等を互いに周知し、他府県の取組も知ることができるようになった。今後は、協働でフォーラムの開催なども検討していく予定である。

9 次年度以降の課題及び改善点

(1) 管理機関の課題及び改善点

a 連携校との協働について

拠点校と連携校が互いに取組を共有したり、一つの取組を協働したりする機会を豊富に提供することが管理機関として必要であった。対面で困難であっても、オンラインで定期的に生徒同士が取組を発表したり、探究内容についてディスカッションする機会があれば、生徒同士の刺激にもなり、探究の深化につながるのではないかと考えている。また、教員同士の情報交換やコミュニケーションの機会も確保することが、事業の円滑な進行につながると考える。

b 事業成果の全県への波及について

3年間で拠点校が開発したカリキュラムや取組を、連携校だけでなく、県内全校に周知する機会がさらに必要である。年間で2回ほどは、公開授業や報告会を行ってきたが、どの学校においても、探究活動の進め方や教員の指導・支援のあり方、評価の方法などについて、試行錯誤しながら行っているのが実情である。拠点校の取組を具体的に他校にも知ってもらうため、情報共有・情報交換のためのプラットフォームを設けるなどして、拠点校のみではなく、どの学校でも取り組める体制を整えることが必要である。

c 事業終了後の継続した取組について

3年間で取り組んだことを事業終了後にどのように継続、発展させていくかが大きな課題である。拠点校のみの取組にならないよう、また拠点校においても一過性の取組にならないよう、県全体の取組として継続、波及させていく必要がある。県で可能な範囲での予算措置をとるとともに、持続可能な取組内容を考え、検討していく。高校生国際会議については、次年度以降、発表主体からディスカッション主体へと発展させ、たとえ小規模であってもこれまで以上に内容を深め、国内外の高校生が活発に英語で議論できるようなレベルの高いものにしていくことを検討している。一年間の取組の中で最も大きな成果発表の場であるため、次年度以降も継続して開催できるよう、開催にかかる費用については県での予算措置をとる方向で進めている。

開校以来計4年をかけて取り組んできた拠点校の強い思いを、県全体の力にしていくことが管理機関としての責務であると考えている。

(2) 研究開発にかかる課題や改善点

a カリキュラム開発について

事業開始から3年間カリキュラム開発を行った学校設定科目「グローバル探究」「世界の言語」について、全学年のカリキュラムの実践を一通り終えることができた。これを機会にこの3年間の成果と課題を検証し、教員も生徒も「たてにつながる」ことを意識して、今後もカリキュラムの継続、発展にホールスクールで取り組んでいきたい。

b カリキュラムの深化について

次年度以降は、この3年間で開発した2つのカリキュラムを深化させる時期であると捉えている。

「世界の言語」では、これまで世界各国に姉妹校、連携校を開拓することができた。オンラインでの交流を進めてきたが、今後は、留学生や学校訪問の受け入れや、生徒の海外連携校へ

の派遣など、対面での交流を進めていきたい。また、「世界の言語Ⅰ」では、5つの言語の共通点や差異などを比較することから、言語そのものに対する意識を高めることができるよう、カリキュラムの更なる深化に取り組んでいきたい。

「グローバル探究」では、3年間実現できなかったアジアスタディツアーを次年度はじめて実施することができる。海外でのフィールドワークをとおして、視野をひろげ、さらに探究を深めることができるよう、あらたなカリキュラムづくりに取り組んでいきたい。また、高校生国際会議についても、単なる課題研究のプレゼンテーションにとどまらず、海外連携校から来日してもらい、持続可能な社会に向けて、国を超えた本当の意味でのディスカッションが可能となるような取組を進めたい。

c 高大連携のシステムづくりについて

高大連携のシステムづくりについては、拠点校の協定校を中心に、出前授業や大学訪問などの

取組を進めることができたが、アドバンストプレイスメントの実現までには至っていない。次年度には、奈良教育大学における夏期特別講座が実施される。引き続き、大学とも協議を進め、単位認定に向けて取組を進めていきたい。

d 教員のワークライフバランスについて

関連事業を進めるにあたり、主担当教員にかかる負担はかなり大きい。ESD部を校内の分掌のひとつに位置づけ、事業を行ってきたが、事業終了後も、より組織的な体制を構築し、学校全体で取組を進めることを心がけていきたい。

e 海外大学進学について

海外大学進学を目指す生徒にとって、費用面での負担が大きく、進学をあきらめざるを得ない生徒もいる。奨学金が獲得できるよう、高校入学当初から、カウンセリングによるプランニングや英語力の強化などに取り組んでいきたい。

【担当者】

担当課	高校の特色づくり推進課	T E L	0742-27-9851
氏 名	宮岸 悠可	F A X	0742-23-4312
職 名	指導主事	E-mail	koukou@office.pref.nara.lg.jp

2 管理機関の取組

2.1 ALネットワーク運営委員会

氏 名	所 属
和泉 宏明	国連世界観光機関
内田 浩樹	国際教養大学教授
佐田 創	株式会社アイエスエイ
山口 大輔	学校法人河合塾
中尾 雪路	奈良県立国際高等学校長（拠点校）
前田 景子	奈良県立奈良高等学校長
大石 健一	奈良県立畝傍高等学校長
河合 知子	奈良県立青翔高等学校長
上田 精也	奈良県立法隆寺国際高等学校長
石澤 竜義	奈良県立高取国際高等学校長
吉田 隆	奈良女子大学附属中等教育学校長
安井 孝至	奈良学園登美ヶ丘高等学校長
吉田 育弘	奈良県教育委員会教育長

ア 第1回

- (ア) 日時 令和5年6月14日（水）
(イ) 場所 （リモートによる開催）
(ウ) 内容 ・ALネットワーク運営委員の委嘱について
・WWLコンソーシアム構築支援事業について
・拠点校における現在の取組について
・その他

イ 第2回

- (ア) 日時 令和6年2月28日（水）
(イ) 場所 （リモートによる開催）
(ウ) 内容 ・令和5年度の取組について
・3年間の事業の成果と課題について
・運営指導委員からの指導助言について
・協力機関より3年間の取組及び今後の取組への御助言等について
・その他

2.2 ALネットワーク担当者会議

氏 名	所 属
松本 真紀	奈良県立国際高等学校教諭（拠点校）
安樂 聖菜・石橋 涼	奈良県立奈良高等学校教諭
杉本 和歌子	奈良県立畝傍高等学校教諭
小川 香	奈良県立青翔高等学校教諭
松井 真奈美・峯川 昇二	奈良県立法隆寺国際高等学校教諭
田中 崇人・松本 詳司	奈良県立高取国際高等学校教諭
藤井 正太	奈良女子大学附属中等教育学校教諭
大隅 真弓	奈良学園登美ヶ丘高等学校教諭

ア 第1回

- (ア) 日時 令和5年4月25日（火）
- (イ) 場所 （リモートによる開催）
- (ウ) 内容 ・WWLコンソーシアム構築支援事業について
・今年度の取組について
・その他

イ 第2回以降は、後述の高校生国際会議高校生運営委員会と兼ねて実施。

上記担当者会議のほか、Google Workspace for Educationを活用して「ALネットワーク担当者Classroom」を作成し、適宜、高校生国際会議生徒実行委員会の進捗状況等の情報共有を行った。

2.3 「高校生国際会議」高校生運営委員会

参加者 高校生国際会議実行委員会（高校生） 約50名
拠点校・各事業連携校ALネットワーク担当者等
内 容 令和5年度高校生国際会議に向けた運営・進行の検討等。

ア 第1回

(ア) 日時 令和5年5月27日（土）

(イ) 場所 奈良県立国際高等学校

イ 第2回

(ア) 日時 令和5年6月17日（土）

(イ) 場所 奈良県立国際高等学校

ウ 第3回

(ア) 日時 令和5年7月15日（土）

(イ) 場所 奈良県立国際高等学校

エ 第4回

(ア) 日時 令和5年8月4日（金）

(イ) 場所 奈良県立国際高等学校

オ 第5回

(ア) 日時 令和5年8月9日（水）

(イ) 場所 奈良学園大学（高校生国際会議前日準備）

カ 第6回

(ア) 日時 令和5年8月10日（木）

(イ) 場所 奈良学園大学（高校生国際会議）

キ 第7回

(ア) 日時 令和5年9月30日（土）

(イ) 場所 奈良県立国際高等学校



【「高校生国際会議」高校生運営委員会の様子】



第2回高校生国際会議は対面での開催となり、その実施に向けて、ALネットワーク校計5校の生徒が参加し、学校の枠を超えて協働した。

2.4 ALネットワーク運営指導委員会

氏 名	所 属
宮下 俊也	奈良教育大学 学長
赤沢 早人	奈良教育大学 教授
赤間 亜希	日本エコツーリズム協会 主任研究員
木村 出	JICA関西 所長

- (ア) 日時 令和6年2月26日(月)
(イ) 場所 (リモートによる開催)
(ウ) 内容 ・令和5年度の取組について
・3年間の事業の成果及び課題について
・運営指導委員による指導助言
・その他

<運営指導委員によるコメントの概要>

・今後に変化がもてる取組である。「なぜ奈良なのか」「奈良らしさ」を大切にしていきたいと考えており、最古の都市奈良から持続可能な社会の発信、国際的に活躍できる人材の育成というコンセプトは筋が通っていて非常によいと思う。

・持続可能な社会の実現のためには、若い人たちにかかっていると考える。若い人たちがいかに国や文化を越えた交流ができ、様々な課題にチャレンジしていけるかにかかっている。そのような意味でも、この事業を今後ステップアップしていくことは大切である。大学としても、事業終了後の自走のためにぜひ支援していきたい。

・今後、卒業生がどう母校に関わっていけるか、成長や活躍を後輩に伝えていけるか、先輩から後輩へつないでいくロールモデルができることを期待する。

・高校生に大きな刺激となるカリキュラムが組まれていると感じ、感銘を受けた。地球規模の課題、国際協力で携わる人材の育成に取り組むJICAの取組とWWLの取組は親和性があると感じる。近年、若者が内向き志向にある中、高校生が世界の課題に目を向ける取組を心強く感じる。

・今後、この取組を持続性をもって横に広げていってもらいたい。JICAとしては、協力隊OBのネットワークや長期留学生の受け入れがあり、高校生の学びのお手伝いができると思う。ほかにもできることが多くあるので、ぜひ連携し、支援させていただきたい。

・高校生国際会議では、生徒の活発な意見交換や探究の様子が見られ、高校生の元気な様子に感銘を受けた。この高校生の取組をどう引き上げていくか。高校生同士の横のつながりで発表するだけでなく、同じテーマをもつ大学生や大人の中で発表したり話をするところから得られる学びが大切であると考えている。日本エコツーリズム協会で開催している学生向けのシンポジウムでも、大学生と高校生をつなげる取組をしていきたいと考えている。シンポジウムの参加等で連携できることがあるので、協力していきたい。事業としては終わりであるが、引き続きぜひ取組を継続させてほしい。

3 拠点校の取組

3.1 拠点校の取組概要

拠点校である奈良県立国際高等学校は、「多様な人々と積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」ことを Mission とし、令和2年4月に開校した。

Mission（本校の使命）

- 多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する。
- 強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自律した態度を育成する。
- 国際社会で求められる自他を尊重する精神と豊かな感性を育成する。
- 健やかな心身により、国際社会で活躍するための旺盛な行動力を育成する。

Admission Policy（入学者の受け入れに関する方針）

- ・ 本校の使命や育成を目指す資質・能力を理解し、教育課程全般に前向きに取り組むことができる生徒
- ・ 中学校段階で求められる基礎的な学力を身に付けている生徒
- ・ 多様な人々とのコミュニケーションに意欲的に取り組む生徒
- ・ 国際社会の平和と発展に貢献する意欲をもつ生徒

Curriculum Policy（教育課程の編成及び実施に関する方針）

- ・ ICTの活用により個別最適な学びを目指します
- ・ 探究活動をはじめとするあらゆる教育活動で協働的な学びを推進します
- ・ 学校設定教科「国際教養」を中心においた系統的総合的な教育課程を編成します
- ・ 社会に開かれた教育課程の実現に向けて学校全体でカリキュラムマネジメントを徹底します
- ・ 「世界とつながる高校。」をテーマにグローバル教育を推進します

Graduation Policy（育成を目指す資質・能力に関する方針）

本校では、以下の6つの資質・能力の育成を目指します。

- ・ 探究力
社会の様々な課題について、探究心をもって課題を発見し、解決に導く。
- ・ 創造力
自分の考えや常識にとらわれず、創造的に考え、新たなアイデアを生み出す。
- ・ 協働力
文化や言語の違いを超えて、協力・協働しながら互いに高め合う。
- ・ 寛容さ
文化や考えの違う他者の意見や存在を、社会をよりよくしていくための重要なものとして受け入れ共に高めようとする。
- ・ 挑戦力
課題について、失敗を糧にしながら意欲的に解決に向かう。
- ・ キャリアデザイン力
希望する進路に向けて、課題を把握し、解決のために行動を起こす。

奈良県立国際高等学校 グランドデザイン

使命 MISSION



多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する。



強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自立した態度を育成する。



国際社会で求められる自他を尊重する精神と豊かな感性を育成する。



健やかな心身により、国際社会で活躍するための旺盛な行動力を育成する。

目標 GOAL 世界とつながる高校。



これからの社会に必要な新たな教育を創造する。



高度な学びのネットワークの拠点校としての役割を果たす。

育てたい力 GENERIC SKILLS



知識を活用し課題を解決する力

探究力



協力・協働して互いに高め合う力

協働力



試練を克服し前進する力

挑戦力



新たなアイデアを生み出す力

創造力



文化や考えの違いを大切にできる力

寛容さ



進路に向けて行動を起こす力

キャリアデザイン力

学び CURRICULUM 「国際≠英語。～真の国際人を目指して～」



ICT

- ・一人一台のiPodを使用
- ・個別最適化された学習
- ・反転型学習、探究学習



学校設定教科「国際教養」を設置

グローバル探究

- ・地球規模の課題について探究活動



英語

- ・少人数・習熟度別授業
- ・プレゼンテーション指導
- ・ネイティブ教員による授業

世界の言語

- ・5つの言語・文化に触れる

将来 FUTURE



世界へ

海外大学進学



日本で

国内大学進学（理系・文系）

日本で、世界でグローバルに活躍

ルーブリック

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
探究力	生活や社会について考え、改善したほうが良いと考えていることがある	地域や社会で解決したい課題を見つけ、その原因や背景を考えることができる	地域や社会のよりよい未来に向けて、改善すべき課題を見つけ、その原因を追求して、未来のあるべき姿を考えることができる	グローバルな視点から、世界的な課題の問題点やより良い未来の理想的な姿を示し、その実行可能性について検討することができる
創造力	与えられた情報を整理することができる	地域や社会の課題について情報を集め、分析・評価しながら改善すべき点を提示できる	地域や社会の課題やその解決のための内容を批判的思考で掘り下げ、解決に向けた案を提示することができる	自己の考えに固執することなく、グローバルな視点から創造的に考え、斬新なアイデアを生み出すことができる
協働力	他者と積極的にコミュニケーションをとることができる	目標達成のために、集団の中で他者を助けたり、支援したりできる	課題解決に向け、集団の中での自己の責任を果たしながら、他者と協力して行動することができる	課題解決に向け、対話を通して、自己の主張や他者の意見を調整し、集団として士気を高めることができる
寛容さ	相手の立場や考えを気づかえる	相手の立場や考えを常に想像し、共感することができる	文化や考え等の違う相手にもあたたかく接して、他者の考えを尊重し、違いを認めることができる	自分とは違う意見や考え、経験を共有し、社会をより良くしていくための重要なものと考えることができる
挑戦力	与えられた指示に従い、自分の作業をすることができる	指示を待たず、課題を自ら発見し、取り組むことができる	課題に取り組む中で、失敗しても強い意志をもって、新たな挑戦を続けることができる	高い目標や志をもち、困難なことに向き合いながら、意欲的・積極的・継続的に取り組むことができる
キャリアデザイン力	自己の適性について考えることができる	自己の適性を理解し、進路に関する情報を自ら集めることができる	希望する進路を実現するために、自己が直面している課題を把握することができる	希望する進路を実現するための課題を的確に把握し、解決のために行動を起こすことができる

3.2 カリキュラム開発

3.2.1 概要

拠点校には、学校設定教科「国際教養」を設定している。教科設置の目的は、「異なる言語・文化、世界の歴史や自然科学について幅広く学ぶことで、国際人として必要な教養を身に付けるとともに、様々な探究活動を通して、強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自立した態度を養う。」こととしており、この学校設定教科「国際教養」に複数の教科を融合した内容について探究活動を行う学校設定科目「グローバル探究」と英語以外の外国語やその文化について幅広く学ぶ「世界の言語」を設定している。

学校設定科目「グローバル探究」

身近にある問題から探究のプロセスを繰り返す中で、自分自身の課題を設定し、フィールドワークやアジアでのスタディツアーなどで探究を深めながら、最終学年では、高校生国際会議の開催、日本語と英語での論文作成を目指す。

拠点校では、この「グローバル探究」を基幹科目と位置づけ、全教員が担当し、取組を進めている。（6つのゼミを2人ずつの教員が担当）

「グローバル探究Ⅰ」（1年次3単位 必修） ※情報Ⅰ（2単位）を代替

「グローバル探究Ⅱ」（2年次3単位 必修）

「グローバル探究Ⅲ」（3年次3単位 必修）

学校設定科目「世界の言語」

複数の言語を学ぶことで、言語間の共通点や相違点に気付き、言語そのものへの理解が深まるだけでなく、世界の多様性への意識を育むことができる。このため、5言語すべてを学ぶカリキュラムを奈良教育大学吉村雅仁教授の指導で開発・実践している。

「世界の言語Ⅰ」では年に20回程度、「世界の言語Ⅱ」では、毎回、日本人教員と各言語のネイティブ教員によるチームティーチングを実施している。

「世界の言語Ⅰ」（1年次2単位 必修）

「世界の言語Ⅱ」（2年次2単位 必修）

「世界の言語Ⅲ」（3年次2単位 選択）

他教科での取組

- ・「総合英語」：ネイティブ教員による単独での授業を実施し、ライティングやプレゼンテーションの指導を行い、生徒の英語によるアウトプットの能力を向上させている。
- ・「ディベート・ディスカッション」（2年次2単位、3年次2単位全員履修）
地球規模の課題について英語でディベートやディスカッションができる力を付けるためネイティブ教員による授業を実施している。
- ・「エッセイライティング」（3年次2単位全員履修）
論文の書き方を学び、グローバル探究で作成した論文を英語にする指導を行っている。
- ・EAP（2年次2単位、3年次4単位海外進学コースのみ）
海外大学進学準備として、様々なテーマについて英語を用いて学び、議論をする。
- ・イマージョン理数（3年次2単位海外進学コースのみ）
自然の事象・現象について、英語を通して科学的に探究する。

3.2.2 グローバル探究I

a 全体計画

【対象】 1年生
【時間】 木曜日6・7限 その他週1時間
【目的】 年間目標：「自ら問いを立て、それを明らかにする力を養う」 ▼各学期目標 1 学期：身近な問題から解決すべき社会問題を見つけ、関心を持つ 2 学期：文献調査等の正しい方法を学び、自己の関心を見つめ直す 3 学期：自己の関心と社会問題を結びつけ、今後の探究に繋げる
【計画】 1 学期：身近な問題から解決すべき社会課題を見つけるために、まずは地域(奈良県)が抱える問題について考え、実際の状況を確認・検討・考察を行う。その中で、今後の探究活動に必要な手法としてフィールドワークのやり方やテーマの探し方を学ぶ。 *フィールドワーク①<5月>...グループごとに立てた問いについての地域調査 *フィールドワーク②<5月>...奈良教育大学の教授によるレクチャー *フィールドワークを受けての報告書作成・グループ発表<5・6月> *たてにつながる探究交流会で上級生の発表を聞く<5月> *個人が関心を持つ社会課題(県内・県外問わず)をマッピング法で確認、 テーマの選定・調査とポスター製作<6月> 夏休み：6月に仮で選定したテーマに関する著作(書籍)を一冊読み、作者と自身の考えの違いを整理する。 2 学期：探究を進めるために、論文の読み方や批判的考察の手法を学ぶ。1 学期と2 学期の活動を通して、自身がどのゼミに所属したいか見つめ直し、自分自身が解決に取り組みたい社会課題について考察を深める。 *夏休みに読んだ本に関するブックトーク<9月> *自身の進路と関心のあるテーマを引きつける<10月> *文献の探し方と批判的考察の手法を学ぶ<10・11月> ...CiniiやGoogle Scholarを利用した論文の探索の方法を学ぶ *ゼミ分けに関する志望理由書の作成と面談<11・12月> *WWL報告会で上級生の発表を聞く<12月> 冬休み：3 学期以降、自分自身が取り組みたいと考える社会課題(テーマ)について理由を含めて考え、それに関する新聞記事を読んで関心を深める。 3 学期：ゼミごとに分かれての活動を開始させる。今後、探究活動で取り組みたいテーマを本格的に決定して探究活動をスタートさせる。その際、1・2 学期に学んだ手法を活用する。 *冬休みの取り組みを踏まえて、自分が選定した社会課題(テーマ)の現状、解決しないと今後どのような問題が発生するか、どのような手段で解決するべきか、自らの主観だけでなく客観的なデータを用いて検討を進める<1月> *社会課題の解決について手法の検討を行う<1月・2月・3月>

3.2.2.b 地域探究の成果と課題

概要

第1学年では、年間目標として「自ら問いを立て、それを明らかにする力を養う」を掲げ、探究活動の入り口として1学期に地域探究を中心としたカリキュラムを設定した。

本年度の第1学年の生徒の中には、中学校時代に具体的な地域探究を行った経験のある者もいる。一方で「探究」に慣れていない生徒も散見された。よって、今後自ら問いを立てて、それに対して解決方法を編み出す探究活動を行っていくためには、基礎形成が大切であると考えられたため、まずは身近な地域が抱える問題の探究を行い、それを通してグローバル探究に必要な手法を学んでいくという形をとった。

地域課題に取り組むことで、自らの生活圏を含め、奈良県が抱える課題の現状を明らかにし、高校生が解決できるか、解決するためにはどのようなアプローチをすべきか生徒は気づきを得る。そしてそれを踏まえて、自らにできることは何か、社会貢献を目指す。

探究の内容についてはグループでの発表や個人報告書の作成という形で共有を図った。また、フィールドワークの事前学習でグループごとに設定したテーマを、奈良教育大学でESD教育研究に携わっておられる大西浩明特任准教授と共有することで、生徒が取り組みたい地域研究に根差した的確なアドバイスやフィールドワークの方法を講義形式で伝達いただいた。

成果

今回の地域探究では、スタート地点ではグループでの活動という形式を取ったが、最終報告書の段階では個人探究の形を採用した。調査を行いやすいように、グループで統一したテーマを掲げてフィールドワークやデータの収集は行ったが、テーマは生徒自身がグループ内で協議を重ね、最終的に自らの興味関心に必ず重なるように選定させたことから、内発的動機付けにも繋がり、個々人がより積極的に取り組むことができたと考えられる。

地元の魅力を再発見し、課題を探り、解決策を考える中で、問い立て、調査、まとめ、報告書の作成、振り返りといった探究プロセスを踏むことができた。このプロセスの中で生徒は主体的に行動し、地域の人々とつながりを持つことができた。このようなつながりは今後探究活動を行うにあたって有利に働くと考えられる。

また、大西浩明特任准教授からいただいたアドバイスをフィードバックすることで、地域調査を単なる調べ学習で終わらせるのではなく、高校生なりの視点で地域課題の解決に取り組もうとする姿勢を形成できたと考えられる。また、個人報告書を作成することで、集団で取り組んだ調査を個人の探究に落とし込みながら、自身の課題解決に繋げることができ、電子データで作成をすることで、自らの探究（考え）を可視化することができた。

発表テーマ（一部抜粋）

- ・奈良公園のバリアフリー化（特に点字ブロックの設置について）
- ・奈良市における鹿との共存（食害）
- ・奈良を訪れる外国人観光客の目的と課題
- ・奈良公園のゴミ問題
- ・奈良における世界遺産や文化財の保存
- ・新型コロナウイルスが奈良の観光にもたらした影響
- ・奈良の食文化～なぜかき氷が人気なのか
- ・奈良の伝統工芸とお土産物
- ・観光地の自販機の値段が高額になるのはなぜ
- ・鹿の保護と去勢の問題
- ・鹿の保護と管理（生息範囲や頭数の調整）

課題

探究の入り口を地域課題の解決に設定することで、取り組みやすいという一面はあった。一方でグループでの探究の段階では似たようなテーマが散見された。よって、多様なテーマや地域課題についての問いを設定するためには、事前調査の時間をより設定するべきであると考えられる。また、報告書の作成の段階では、ICTのリテラシーレベルに大きく差が見られたため、報告書の雛形を共有するだけでなく、書き方の指導もあらかじめ行った方が良かったのではないかと。

さらに、クラスを横断した発表の回数を行い、同学年内でどのような問題意識をもった第1学年生がいるか、「知る機会」を設定するべきであった。地域探究は自ら取り組むだけでなく、同じような問題意識を持つ仲間がいることを理解することで、情報共有のきっかけが生まれ、個々の探究が深まっていくと考えられるためである。

教員側については、生徒の探究活動のサポーターとして対話を通じてニーズを拾い上げ、的確なアドバイスを行うことが求められる。探究プロセスについては、地域探究を通して定着できたと考えられるが、今後、探究の内容が深化していくことを踏まえて、SDGs、ESDなど多様な観点から内容を深め、生徒と共に実践していくことが必要である。

フィールドワークの様子



作成された個人報告書の例

1. 最初のフィールドワークで得られた調査結果

奈良公園の鹿の去勢状態はどのようになっているのか、奈良公園の歩道は凹凸しているがなぜ整備されないのか、という二つのテーマをたて、愛護会へのインタビューと、実際に現場で見るという方法で疑問解消を目指した。



○奈良公園の鹿の去勢状態について

奈良の鹿愛護団体によると、奈良公園の鹿は去勢を行っていないとの事だ。奈良公園の鹿はあくまで野生動物であり、愛護会は保護とサポートのみを行っていないそうだ。もともと鹿は神からの遣いとして大切に扱われており、鹿そのものを尊重するとともに、近年、観光地化して増加し続けている観光客への安全性の考慮や、外国人観光客がどうすれば鹿への接し方や、モラルに関するルールを理解してくれるか、という3つの問題があると言う。また、事前調べでコロナ禍の影響で観光客が減ったことにより、鹿が買える鹿せんべいの量が減り餓死する鹿が増えている(記事元

<https://news.yahoo.co.jp/byline/tanakaatsuo/20180704-00088123/>)という記事を見たが愛護会の方によると鹿の主食は芝生であり、餓死する鹿は例年と変わらないとのこと、記事はデマだったことも分かった。

写真引用元(読売新聞オンライン<https://www.yomiuri.co.jp/local/nara/feature/CO064416/202030330-OYTAT50033/>)



○奈良公園の歩道の凹凸について

歩道の凹凸については、整備されないハッキリとした理由は分らなかったが、整備工事をする際、鹿が侵入する恐れがあるために整備できないのではないかと考えた。実際に歩いて分かったことは道の凹凸も気になったが、それ以上に道が狭いということだ。場所にもよるが、人通りの多い東大寺南大門前の道では観光客の数に対して道が狭く、鹿が人の間を通る際も窮屈にしていたり、人と人がぶつかりそうになっている場面にも何度か遭遇した。そのため、道を歩く際のルールや、経路などを設定した方がよいと感じた。また、歩行者が道に広がっているため、自転車の人が通れなくなっていた。道路も交通量が多く危ないため、自転車専用の道を作った方がよいと考えた。

写真引用元(pixabay <https://pixabay.com/ja/images/search/?E5%A5%88%E8%89%AF%E5%85%AC%E5%9C%92/>)

2. 奈良教育大学、大西教授の講演・フィールドワークを受けて

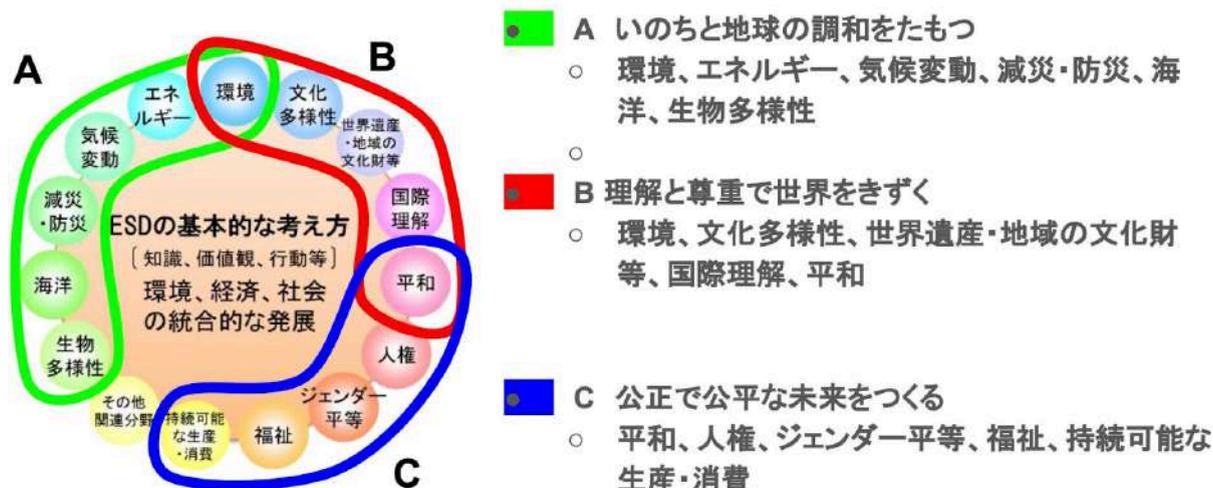
SDGsと言われると国際的な、世界規模な取り組みという考えがあったが、今回私たちに深く馴染みのある奈良を例に講演を受けて、自分の身近にもたくさん考えられる問題があるのだとはっきりと認識した。とくに、東大寺の大仏は奈良時代から令和の今まで存在し続けてきた、つまり持続性がありSDGsにも繋がる点があると説明を受けて、何で今まで気づかなかったのだらうと衝撃を受けた。また「視野をやる」という行為を自分がしっかりとできていないことも痛感した。東大寺などの奈良時代に関しては学校の歴史の授業で学んできたにも関わらず、SDGsとの関わりは思い描けていなかったもので、学んだことを生かしてあげていないのではないかと考えた。これは歴史だけに限らず、数学や理科、家庭科など他の教科にも当てはまっており、学校で学んだことと結びつけられておらず学校という場を最大限に生かしてあげていないと、この講演で感じた。

3. 2回のフィールドワークを受けて

1回目のフィールドワークのテーマの設定において鹿の去勢状態についてはそもそも奈良公園の鹿としての位置付けはどうなっているのか、鹿も観光名所として人気を集めているがどのような対応をしているのかという疑問から設定した。結果的に鹿の位置付けに関する疑問や対応についての疑問は解消できたが、「鹿の去勢状態はどうなっているのか」という疑問に対しては「していない」と根本的に否定されてしまい、テーマについて行く前に調べすぎるのも良くないが、情報不足なのもよくないと教訓を得た。次からはある程度の調査はしようと思う。もう一つの道の凹凸についてはなぜ整備されていないのか、というそもそもの理由について分らなかったため、テーマを設定する前に解決できる現実性があるかしっかりと見極めることを大切にしようと感じた。また自分たちで行ったフィールドワークと大西教授の講演・フィールドワークを比較すると、両方とも「身近なことから連想する」という部分が共通していると考えた。例えば、自分たちが行ったフィールドワークに関しては奈良公園という馴染み深い場を改めて問題を探究するという面、大西教授の講演・フィールドワークでは東大寺の大仏とSDGsを関連付けて問題解決へのヒントを見出すという面、二つとも私たちに馴染みの深い奈良公園という場所をメインにして、二回行ったフィールドワークから、「問題解決は何事も身近から」という考えを得た。根拠としては、このような機会がなければ奈良公園で調査を行わなかった、ということ、その調査から今までできなかったSDGsという問題に対して視野が広がった、新たな問題解決への道を見出すことができたということだ。「身近」をぞんざいに扱わず、「身近」から物事を考え、どんどん大きく考えていくことこそが大切であり、そのことを意識しながら調査に臨んでいこうと思う。

3.2.2.c 3ゼミへの再編成について

中学校開校のため、本年度1年生は3クラスであり、2年生以上の5クラスから減少している。そのため、従来の6ゼミの分け方では、教員数が足りなくなってしまう（これまで、各ゼミ2名の合計12名で行っていました）。そこで、今年度から以下に示す3つのゼミに分けて、各ゼミ教員2名の6名体制で行う。



なお、ゼミ分けについては以下の日程で担当で協議し、基本的な方針を決定した。

日時：2023/09/28 16:00~17:00

参加者：大阪公立大学 吉田敦彦先生（オンライン）

：奈良県立国際高等学校 ESD部 水本（部長）、松本、1学年 芳田（主任）、元根

この協議において、カリキュラムアドバイザーからのコメントを以下に記す。

- 生徒には、どんな問題を解決したいのか、どんな問題に興味があるのかについて考えさせてほしい。学問分野については、あくまでの指導上の視点である。指導の際は、学問分野に縛られず、生徒の探究に応じて、学際的な視点に立ってほしい。
- 先生方は、どのような分野を指導するのか考える時に、自身の専門分野に縛られることなく、自分ならどれを探究したいのかを考えてほしい。
- スタディツアーで訪問する世宗国際高校では、「人権」、「平和」、「文化的多様性」、「持続可能な開発教育」、「地球規模」の問題の5つのテーマに生徒を分けて、探究活動を行っている。生徒の興味関心でゼミを分けている本校のやり方とは相性が良い。

3.2.2.d スタディーツアーへの取り組み

1. スタディーツアー視察

韓国スタディーツアー視察は、2023年12月19日から21日の間に行われ、学校長、ESD部長、1年学年主任、JTB担当者が参加した。また奈良韓国教育院の担当者も同行した。

- 延世大学訪問では、キャンパスツアーが可能であり、大学生との交流の実現可能性についても話し合った。大学側からは、現在キャンパスツアーのボランティアに応募する生徒数の減少により、実施が確約できないという課題があることが共有された。研究者による講演は、大学側の担当者との確認が必要であること、大学の学長や学部長の改選に伴い、詳細な内容は3月以降に決定される予定であることが示された。また、延世大学は大学内の具体的な訪問先を早期に確定することを望んでおり、国際高校は現在のゼミの探究内容が未定であるため、後日具体的な内容を検討すると回答した。
- ロッテJTB訪問では、国際高校のグローバル探究の内容に応じた訪問先の紹介が話題になった。国際高校はロッテJTBに対して、生徒の探究活動を深めるための訪問先選定において、単なる観光地の紹介に留まらず、実践的な学習経験ができる場所の提案を望んでいることを強調した。ロッテJTBは、具体的なテーマ設定、例えば環境、貧困、人権などを具体的に伝えることを国際高校に要望し、それに基づき訪問先の提案を行うと話した。
- 国立国際教育院訪問では、日本と韓国の生徒間の交流促進についての議論が行われた。国立国際教育院は、留学生の誘致や韓国留学フェアの開催、教員の海外派遣事業、韓国語の普及活動など、多岐にわたる活動を紹介した。また、生徒が取り組む探究活動に必要な韓国の大学や研究者との情報交換をサポートする意向も示された。国立国際教育院内にある宿泊施設の利用も可能であるという情報も得た。
- 世宗国際高校訪問では、国際高校の生徒とセジョン高校の生徒がテーマに基づいて発表し、英語でディスカッションを行う計画について話し合われた。滞在中は生徒が直接交流できる時間を多く確保することを求めた。このための事前交流をオンラインで行うことについても話し合った。

2. 事前の学習について

「韓国講座」の実施

奈良韓国教育院に協力いただき、韓国の文化や特徴についての講座を4時間実施いただいた。主な目的は、来年度韓国でのスタディーツアーに向けて韓国に対する知識、理解を深め、スタディーツアーでの学びをより自発的に取り組めるようにすることであった。来年度グローバル探究の授業においてより具体的に諸課題に取り組んでいくが、今回の講義はその前段階として韓国に対する興味関心を高めることも目的とした。



実施日：①2024年1月17日3, 4限、②2024年1月24日3, 4限

講師：①クォン・ハジン（權荷秦）권하진 氏
（奈良女子大学 理学部 化学生物環境課
生物科学コース）

②ファン・インヘ（黄仁慧）황인혜 氏
（奈良女子大学 文学部）

対象：高校1年生（116名）



3.2.2.e 情報年間計画

R5年度情報Ⅰ（1年）年間計画

月	学習内容	回	主な活動
4	オリエンテーション	2	・ITC教室の使い方 ・小中学校でのパソコン授業についてのアンケート
5	情報社会における法とセキュリティ	3	・情報に関する法律 ・知的財産権 著作権 産業財産権 ・情報セキュリティ
6	情報のデジタル表現	4	Word入力練習 ・半角全角入力 ・表作成（時間割作成） デジタル情報の表現 ・2進法 ・16進法 ・2進法16進法の加減 ・2進法補数表現
夏休み			
9 10	プレゼンテーション	8	○ 理想の学校を考え学校案内を作成（グループ学習） ○ PowerPoint またはCanvaによる学校案内を作成（Window,iPadのどちらかで発表） ○ 発表・相互評価（発表のわかりやすさ、出来栄え、内容の良さで評価を行う） ・各グループで作業の分担を行うための担当者決定 ・ブレーストーミングで意見を集める ・KJ法を意見をまとめる ・発表項目のスライドを作成する ・発表者、操作担当者が協力して発表を行う ・他グループの発表を評価する
11	画像のデジタル表現	4	ペイントの基本操作 ・地図の作成 ・ポスター作製 ・Wordとの連携
冬休み			
12	プログラミング	5	Life is Techを使ったPython言語のプログラミング学習 1 Life is Techの使用方法的説明 2 print、変数使用について練習問題 3 IF条件文の練習問題 4 配列変数、For繰り返し文の練習問題 5 演習問題

R5年度情報 I (2年) 年間計画

月	学習内容	回	主な活動
4	昨年度の授業の振り返り	2	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度学習した内容を確認 ・昨年度の感想等GoogleFormでアンケート
	問題解決	3	表計算Excelの基本操作 四則演算、関数、表作成 ・VBAをを使ってのプログラムについても学習する
5			
6	情報のデジタル表現	4	最短経路を調べる 奈良市内の10の寺の見学をより短い時間で見学するコースを調べる。 Excel、GoogleMap、Chrome 目的：1 最短コースを見つけるアルゴリズム 2 単短時間の計算 3 寺の見学時に見ておきたい内容を調べる <ul style="list-style-type: none"> ・ 試行錯誤によって最短コースを調べる。 ・ 早く最短コースを見つけるための方法を調べる ・ GoogleMapで距離を調べる ・ Excelに距離、平均速度を入力しどれぐらいの時間が必要か計算する ・ 寺で見学すべき内容をChromeで調べる ・ 見学日程を作成する
	デジタルと情報表現	1	1年の復讐、n進数の計算・演習問題
夏休み			
9 10 11	デジタルと情報表現	12	動画作成の基礎 1 静止画からコマ送りの動画作成 2 動画、静止画、音声を入れた動画作成 3 フェードイン、フェードアウトなどのトランジョンを入れた動画作成 課題：高校生活の1日を取り上げて、60秒間の動画作成 1 企画を立てる 2 絵コンテを作る 3 必要な素材の撮影 4 編集を行う 5 相互評価を行う
冬休み			
12	プログラミング	5	Life is Techを使ったPython言語のプログラミング学習 1 Life is Techの使用方法的説明 2 print、変数使用について練習問題 3 IF条件文の練習問題 4 配列変数、For繰り返し文の練習問題 5 演習問題

3.2.3 グローバル探究Ⅱ

a 全体計画

【対象】 2年生
【時間】 火曜6・7限 + グローバル探究Ⅱ（情報Ⅰ）1時間
【目的】 1 学期 <ul style="list-style-type: none">● ゼミのテーマに関する世界のさまざまな問題に目を向ける● ゼミのテーマに関する幅広い情報の収集● 探究テーマを見つける● 持続可能な社会を作る生き方と自分の将来（進路）をつなげる 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 探究テーマを深める 2 学期・3 学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究テーマに沿って持続可能性を阻害する問題について、その原因を探りながら、より良い未来を作る方法を考え、高校生にできることから実践する● 自分たちの学びを他者に伝えるとともに、仲間の活動から学びを得る
【計画】 1 学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究テーマの決定<ul style="list-style-type: none">・ ゼミ担当教員と面談をしながら、探究テーマを決定する・ ファミリーにわかれて活動スタート● たてにつながる探究交流会（5月18日、7月10日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミの3年代表生徒の発表を聞く・ 3年生と発表に関するテーマでディスカッションをする● スタディツアーの行程の検討 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 自分の探究に関わる本・論文を読み、まとめる 2 学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究ゼミごとにファミリー活動● 中間報告（10月17日）<ul style="list-style-type: none">・ 6教室に分かれ、自分達の探究テーマや問題解決に向けての課題を発表（日本語）・ 12月実施のWWL全国高校生フォーラム参加者を決定● スタディツアー（10月25日～27日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミでの活動をさらに深めるフィールドワーク● ゼミ内報告会（12月）<ul style="list-style-type: none">・ 探究テーマに対する各自の取り組みをゼミ内で発表（日本語） 冬休み <ul style="list-style-type: none">● ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施 3 学期 <ul style="list-style-type: none">● たてにつながる探究交流会（3月11日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミの2年代表生徒が1年生に探究活動を発表・ 1年生と発表に関するテーマでディスカッションをする・ 2月下旬よりファシリテーションの練習（各ゼミ4名） 春休み <ul style="list-style-type: none">● ゼミによって、ミーティング、調査、研修など実施

3.2.3.b グローバル探究II 6つのゼミ

2年時より、6つのゼミを開講し、生徒自身が関心のあるテーマに近いゼミを選択する。同じテーマであっても、どの視点からそれを見つめるかによってゼミが異なる場合がある。持続可能な社会の構築を目指し、さまざまな分野で社会課題と向き合う。問題を解決するために、自分にできることは何かを問う。それぞれのゼミは、ESDの基本的な考え方の図を参考に、それぞれのゼミが独立しているのではなく、重なり合い、繋がりにあることを意識した柔らかい名前にしている。



3.2.3.c ゼミの取り組み

1 「みんなで作る笑顔のコミュニティ」ゼミ

生徒：31名

概要：地域・コミュニティに関連するそれぞれのテーマに基づいて探究を行っている。2年次では、探究テーマの設定、先行研究の分析、アンケート調査などを行い、3年次での論文作成に向けての方針を考えている。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：ゴミでゴミ箱を作る
取り組み：産業廃棄物で出る木屑を用いてゴミ箱を設置し、ポイ捨てゼロを目指したい。
テーマ：共生社会
取り組み：心のバリアフリー、共生社会を作るにはどうすればいいか考えている。
テーマ：福祉避難所～南海トラフに備えて～
取り組み：南海トラフに備えて、災害時に必要な福祉避難所について調査している。
テーマ：盲導犬
取り組み：盲導犬のマークの知名度について調査を行った。また、今後盲導犬を受け入れる施設を増やすにはどのようにすればよいかを考えている。
テーマ：異文化交流
取り組み：日本で生活している海外の方、日本に観光に来た海外の肩が過ごしやすくなるような環境づくりを目指す。
テーマ：観光名所×お土産
取り組み：奈良のお土産をもっと有名にするには？たくさんのお土産を調べ、マーケティングについてなどを探究している。
テーマ：スポーツ
取り組み：地元のスポーツを盛り上げるために自分たちができることを探究している。
テーマ：給食の食品ロスと日々の食品ロスへの対策
取り組み：学校給食では多くの食べ残しが発生している。同時に日々の生活の中で起こりうる食品ロスについても探究している。
テーマ：まちづくり
取り組み：より多くの人が幸せに過ごせる理想のまちづくりについて模索している。
テーマ：子どもの遊び場と環境について
取り組み：子どもの遊び場と環境の昔と今について調べ、改善策を考える。全ての子どもが笑顔で遊べる機会を持っているのか確かめる。

テーマ：日常のストレスとの向き合い方

取り組み：ストレスのたまりやすい現代に生きている私たちの生活を少しでも改善し、心身の健康を保つために、どう向き合えば良いかを探究する。

テーマ：食品ロス

取り組み：ベジブロス（野菜の切屑で出汁をとったもの）のスープを作る。

生徒・教員の変容

ゼミの開講当初は、探究テーマを決定するのが難しいという生徒もいた。しかし、1期生の卒業論文を読んだり、様々な文献・先行研究に触れていくにつれて、自分にとって興味がある分野を絞りこめてきたようである。2学期のスタディツアーを終えた後は、今後の自分たちの課題が見えてきて、少しずつ行動にうつす生徒が出てきた。教員も多岐にわたる生徒のテーマについて客観的な助言ができるように、教科の枠を超えた知識を得た。調べ学習で終わらないための必要な助言について、担当教員で連携を図りながら考えることができた。

3.2.3.c

2 「先人の知恵を未来へ届ける」ゼミ 生徒： 22 名

概要：過去から現代に伝承・継承されている様々な事柄について、各自が設定したテーマに基づき探究活動を行っている。授業内では探究活動を行い、「研究動機」「先行文献の研究」「独自研究の成果」についてまとめている。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：労働の社会問題

取り組み：現代社会では、長時間労働によっていろんな被害が出ている。仕事のパフォーマンスが下がったり、十分な休息時間や睡眠時間を確保できず疲労が蓄積されたり、脳疾患や心臓病など重大な病気を引き起こすリスクも高まったりしている。過去に人の事例を比べ、現代社会に問題を提起することで、少しでもこのようなことが少なくなるように探究している。

テーマ：時間の使い方

取り組み：現代社会は、睡眠不足、長時間労働、過労死、過労自殺など、働き方の問題により死亡してしまう人がいる。そこで、自分の時間の使い方を理解したり、管理したりすれば、このようなことを防ぐことができるのではないかと考え、探究している。昔の人の働き方を比較することで、そのヒントを探し出す。

テーマ：色覚補助コンタクト

取り組み：色覚異常の人たちにとって、現代社会は住みにくい世界となっている。そこで、色覚異常の人たちにも健常者と同じような生活が送られるよう取り組みが進められているが、その普及が進んでいないことについて、調査している。例えば、色覚補助コンタクトなどが普及するにはどのようにすればよいか探究している。

テーマ：お笑い与健康

取り組み：現代社会では、精神的に病んでしまう人が多くなっているが、それは昔よりもストレスを感じやすくなっていたり、そもそもストレスを受ける頻度が多くなってきているからと考えられる。そこで、人間のストレスを少なくするために探究活動を行っている。お笑いを見せることでストレスを軽減できるのかどうか比較し、検証する。

テーマ：太らないお菓子を作る

取り組み：先進国では、肥満による問題が起こっている。昔の人はあまり太っていないイメージがあるので、今食べているお菓子の代わりに、昔のお菓子を食べたら肥満問題が解決するのではないかと考えている。1ヶ月くらい食べて比較し、体重の変化を見る調査を進めている。

テーマ：不幸な犬を減らしたい

取り組み：ペットショップの裏側では、商売のために繁殖させられる犬が存在していて、それは需要と供給が成り立つからこそ起こる問題だと思われる。また、繁殖犬として使われていたが、用が済めば処分されたり、放置されたり、命が軽視されている。そこで、私たち身の回りの人たちの意識が変われば、このような状況を変えることができるのではないかと、意識調査等をしている。

3.2.3.c

3 「グローバルが生み出す力」ゼミ 生徒： 39名

グローバルが生み出す力のゼミは毎週火曜日（2時間：6・7限目）しています。生徒は39（5人は留学中）人で、「グローバル」はどのように日本に関わっているかというトピックに沿って探究しています。日本は様々な国と繋がりがあって、どんな問題が出てくるかと研究しています。日本の高校生で何が出来るかと「ACTION PLAN」は準備して活動しています。「アクションプラン」というのはテーマの情報収集が終わったら、各グループは高校生の力で何かをすると準備して、勉強した物を実用します。基本的に指導や発表・ディスカッションは日本語ですが、研究・活動する時は英語をかなり利用しています。

1学期には、各グループ（ファミリー）で探究テーマを決定させて、3年生の発表も聞くことができました。テーマを決めるために生徒一人一人の興味と探究したい希望を考えさせて、先生達と面談しました。興味をあわせるために、同じ興味をもっている生徒とグループを組みました。グループを決める前に、ゼミ内の発表が行われました。内容としては「探究したいテーマ」、「自分の探究することだれに伝えたい・誰のためですか」、「なぜこのテーマを探究したい」、「探究キーワード」、「提案か高校生にできることは何か」と言う質問を考えさせて、スライドを作りました。一学期の最後のあたりはスタディツアーの準備をしました。東茶屋街に行く外国人の方は非常に多くて、インタビューするために各グループは質問や予定表を作ったり、英語を非常に利用しました。

2学期には、ゼミでは12グループで様々な面から「グローバル」のテーマを探究しています。スタディツアーで北陸地方に3日間滞在し、福井県と石川県と海外のつながりや観光地で有名な金沢について勉強しました。金沢の東茶屋街に行って、各グループのインタビューの準備を全部利用して、外国人の方と話し合いました。中間発表として各グループがゼミ内で発表をしました。多くの話はスタディツアーでした事とインタビューの結果です。その後、これからのアクションプランはどうやって進めますかと発表しました。お互いにアドバイスを貰って3学期になって成長できる所も考えました。

3学期には探究週間で1年生との交流を進めています。そのためにアクションプランをしっかりと決定して、WWL高校生国際会議に参加するかどうか考え始めました。交流会のグローバルゼミの4名のファシリテーターも決まりました。アクションプランによってもっと活動が必要なグループは活動も行いました。まだ苦勞しているグループもいるから、先生達は非常に苦勞しているグループを支援しています。三学期中の休みは多いため、休みの日でも出来る活動もおすすめしました。

グループ（ファミリー）テーマ

最初にこの11のテーマから生徒達は興味があるテーマを選びました。

教育・政治
差別
言語
職業・業界
食料・健康
貧困

文化
ジェンダー研究
平和・多文化共生
環境
芸術・歴史・技術

各生徒の興味あるテーマの結果でグループを作りました。

発表テーマ

総12グループに分かれています。(別グループで同じテーマをしてもかまいません。ただ発表テーマはそれぞれです。)

1. 2人：貧困 (飢餓・パーム油)
2. 3人：ジェンダー研究 (lgbtqでの差別)
3. 3人：環境・文化 (外国人と災害発生)
4. 3人：教育 (教育格差の問題)
5. 3人：多文化 (文化の比べ)
6. 2人：文化 (ダイエット文化)
7. 1人：文化 (ディズニー)
8. 2人：差別 (様々な国の差別)
9. 3人：環境 (ファストファッション)
10. 3人：食料・健康 (ベジタリアン・ベガン)
11. 3人：言語・文化 (観光客)
12. 4人：環境・文化 (未定：外国人と地震)



Why did I choose this topic?

★フェアトレードという取り組みは安い賃金で働いている人が世界にはいてそういう状況に置かれている人たちの商品を購入することで支援できると中学時代に知った。これによって、フェアトレードの重要性を感じた。その中には小さい子供たちも働いているということを改めて知って、学校も行けない、行きたくても行けない子がいる事実を知った。

なぜ

実際に外国に行った時、観光客が多く訪れるところは案内表示板が多言語対応になっていただけど、少し地元の方の街に行くと日本語対応されなくて大変だった。

(上の2つの写真はまだ一学期の研究です。各生徒は情報を得た後で決まったテーマを発表しました。「なぜ自分のテーマを選んだ?」という質問にたいして深く考えて理解した上で説明出来るようになりました。)

Love Myself

「考えるだけで-10kg!」

おいしい

ADRE SORE

Love myself → 自分自身を愛するということ

「若い女性のダイエットと健康被害」

アンケート

<p>パーム油のことを知ることができましたか?</p> <p>どちらかに○をつけてください はい (わかった) いいえ (わからなかった) ありがとうございました 🍌</p> <p>パーム油のことを知ることができましたか?</p> <p>どちらかに○をつけてください はい (わかった) いいえ (わからなかった) ありがとうございました 🍌</p> <p>パーム油のことを知ることができましたか?</p> <p>どちらかに○をつけてください はい (わかった) いいえ (わからなかった) ありがとうございました 🍌</p>	<p>パーム油のことを知ることができましたか?</p> <p>どちらかに○をつけてください はい (わかった) いいえ (わからなかった) ありがとうございました 🍌</p> <p>パーム油のことを知ることができましたか?</p> <p>どちらかに○をつけてください はい (わかった) いいえ (わからなかった) ありがとうございました 🍌</p> <p>パーム油のことを知ることができましたか?</p> <p>どちらかに○をつけてください はい (わかった) いいえ (わからなかった) ありがとうございました 🍌</p>
---	---

11	12	13	14
10	9	8	7
6	5	4	3
2	1	表紙	裏表紙

(3学期のグループ活動の例文です。上の写真は2グループです。最初の2つの写真はダイエット文化について研究しています。ダイエットについてのアンケートを受けました。最後の3枚は貧困について研究しています。幼稚園を訪ねて、実際に授業を行いました。)

3.2.3.c

4 「 みんなちがうからみんなで支え合う 」ゼミ 生徒： 36 名

概要：国内外のデータや新聞記事を読み、ドキュメンタリー映画から世界の人権侵害の現実について知り、様々な文献を読みながら人権や多様性について深く考えた。その中で、自分の生い立ちや生き方と関わりの深い課題を考え、その課題をもとに探究活動を始めた。授業内では論文を執筆し、「研究動機」「先行文献の研究」「独自研究の成果」についてまとめている。

ファミリー（チーム）での取り組み（一部）

テーマ：日常に潜むエイジズム

取り組み：肯定的、否定的の両側面からエイジズムを調べ、日常に潜むエイジズムを探究している。私たちが今できることは何かその課題について考えた。

テーマ：生き物による人の健康効果

取り組み：ストレス社会に生きる私たち人間が、生き物（主にペット）から得られる癒しや、ストレス軽減効果を検証し、社会に広めていきたいと考えている。

テーマ：動物の殺処分

取り組み：愛媛県も動物愛護センター職員が執筆した文献を調べ、動物の殺処分ゼロを目指す活動を目指している。今後はペットショップや県内の動物愛護センターへ訪問予定である。

テーマ：障がい者への偏見をなくし、みんなが働きやすい社会へ

取り組み：スタディーツアーで見学した障がい者が描いた絵画展覧会をきっかけにこのテーマを選んだ。いろいろなショッピングモールに行き、それぞれが取り組んでいる障がい者への配慮を調べたり、障がい者の講演会を聴きに行っている。

テーマ：若年層の鬱と自死

取り組み：ニュースや文献を調べ、若者の自死についてその要因や背景を考え、考察し、そこに至らないよう対策を模索している。今後はアンケートを取り、さらに探究していく。

テーマ：留学生が過ごしやすい学校づくり

取り組み：海外への留学経験者や、本校に来ている留学生から聞き取り、困っていることをリスト化する。また、留学生を受け入れる本校の生徒にアンケートを取り、日本人と外国人の積極性について分析している。今後は、留学生が過ごしやすい学校をつくるために提案や改革をしていく。

テーマ：MBTIの真実

取り組み：本来楽しむべきのMBTIに囚われすぎている人が多い。アンケートを取り、ホームページを制作していく。

テーマ：ジェンダー格差について

取り組み：男女格差といえば、男性はできて女性はできない事がよく取り上げられているがその逆について探究している。文献を読み、講演会への参加をしていく。

テーマ：女性学、フェミニズム

取り組み：今も尚起きている女性への格差や対等でない扱いを再認識し、個々の権利意識を高めることを探究している。今後は個展を開催していく。

生徒・教員の変容

年度当初から「このテーマについて探究したい」とテーマが定まっている生徒が多かった。しかし、様々な学習活動を重ねるうちにそのテーマの中で悩み、思考を少しシフトしながらそれぞれが探究テーマを決定していった。また、課題を設定し、文献を読みながら協働して探究する中で、自分たちの考えを論理的に整理し、意見の根拠や理由を明確にすることを意識できるようになってきた。

教員も生徒と対話を繰り返し、生徒とともに探究テーマについて深めて考えることができた。

3.2.3.c

5「蒼い地球を未来につなぐ」ゼミ 生徒：20名

概要：地球温暖化や水質汚染、プラスチック問題など環境に関わるテーマで各自が探究をしている。「美しい地球を保つために、高校生の自分達にできることはなにか」という考えを大切に、持続可能な社会の実現を目指している。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：環境汚染に影響を与える農薬について

取り組み：農薬などの化学物質による海洋汚染が問題となっている。そこで、化学物質が入っていない自然農薬における害虫や病気に対する効果について探究している。現在はほうれん草を、農薬を全く使わない場合と自然農薬のみを使う場合とで育てる対照実験を行っている。

テーマ：被災後の生活について

取り組み：日本ではたびたび地震が発生する。地震が起きたときの行動や、地震で被災した後の生活については日頃意識していなければ考える機会があまりないと思う。そこで、被災後の生活に便利な情報を調べてそのことについて考えを深め、他者に発信し広める手段について探究している。

テーマ：プラスチックの代替品を見つけよう

取り組み：地球温暖化が問題視される今、プラスチックの使用量を減らす動きが活発化している。例えば、飲食店ではプラスチックストローに代わりに紙ストローを使用することが多くなっている。そこで、紙以外に使いやすいプラスチックに代わるものについて、材料探しから取り組んでいる。さらには、その材料で作成した物の機能面について探究している。

テーマ：リサイクルについて

取り組み：環境問題からリサイクルの重要性についての認識は世界中に広まりつつある。そこで、リサイクルについて高校生にできることはないか考えた結果、廃油を利用したキャンドルと石けんに着目した。実際に廃油を用いてキャンドルと石けんを作り、より良い作成方法について探究している。

テーマ：Let's reuse

取り組み：日本とインドネシアの環境の違いについて興味をもったことから、日本とインドネシアの環境に対する取り組みや現状について考えを深めている。そして、環境保全の観点からリユースについて考え、高校生にできることについて探究している。

テーマ：奈良の鹿とポイ捨て

取り組み：奈良公園のゴミのポイ捨てによる鹿への被害や環境への悪影響について興味をもち、現状について調べている。そして、このことについて高校生にできることは何か探究している。

テーマ：海のゴミで物作り

取り組み：環境汚染の原因の一つと考えられているゴミ問題において、現在海で一番多いゴミはプラスチックである。そのプラスチックのゴミによる海への影響について考えを深めている。そして、高校生にできることとして、プラスチックのゴミを利用して他の使

える物を作ることに着目し探究している。

テーマ：コスメロスについて

取り組み：環境汚染の原因の一つと考えられているゴミ問題において様々な取り組みがある中、現在、使い切れずにいらなくなった化粧品を廃棄するコスメロスが世界的にも問題になっている。コスメロスについて考えるとともに、コスメロスを減らすために高校生にできることについて探究している。

生徒・教員の変容

年度当初は探究テーマの設定がなかなか進まず、もどかしさを感じている生徒も多いようであったが、SDGsに関わる現代の課題や自分の興味とのすり合わせをすることで、徐々に各自が自分のテーマを決定していった。探究活動を進めていく上で、教員は生徒の思考を深めるために、上手くサポートしていく必要がある。課題の原因は何なのか、数ある解決策の中からなぜその手法を選んだのかなど、質問をすることにより生徒の新たな発見や視点を導くことができると感じた場面が多くあった。グローバル探究IIの日々の授業を通して、生徒が主体となる授業における教員の役割を再認識することができた。

3.2.3.c

6 「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミ

生徒：32名

概要：さまざまないのちがともに生きる世界、そのバランスが崩れ、今、共存することが難しくなっている。すべてのいのちが輝き、それぞれの力を発揮できる世界を実現するために、私たちはどう生きるべきなのか。私たちヒトを含む多くのいのちがバランスを保ち、共に暮らせる社会を作るためのヒントを探る。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：ツッコむだけやて！「コンポスト」

取り組み：地球温暖化が取り沙汰される現代において、ゴミ焼却で排出される二酸化炭素も大きな問題である。日々家庭から出される「生ゴミ」をなくすことでその一助となるよう、「コンポスト」普及に取り組む。行政やボランティアの方々やタッグを組み、学校や生徒の家庭でのコンポストを広めるべく、活動を進めている。WWL全国高校生フォーラムにおいても、英語で発表を行った



テーマ：海につながる川のポイ捨てを減らそう

海洋ゴミが増え、海洋動物のいのちが脅かされている問題に取り組むため、海のない奈良県で、海につながる川ごみの減少に取り組んでいる。地域のボランティア「秋篠川の源流を愛し育てる会」の川岸清掃に参加しながら、川ごみの減少に歯止めをかける新たな取り組みを模索している



テーマ：ムクドリとヒトとの共生

取り組み：奈良市大宮駅周辺にムクドリの群れが集まり、ヒトのくらしとムクドリの暮らしに折り合いがつかない。奈良市役所に市としての取り組みの聞き取りをしたり、他府県の取り組みを調べたりするなどし、互いが折り合いをつけた共生の方法を探っている。

テーマ：愛玩動物と共に

取り組み：ペットが捨てられ殺処分されることが後をたたない。自分たちにできることはないか、譲渡会などを行なっている施設を訪問し、現状を学びながら、高校生にできることを探っている。

テーマ：食品ロス

取り組み：野菜や果物の廃棄を少しでも減らすため、家庭で捨てられる果物の皮や野菜のヘタなども食べられる方法がないか、調理をするなどして試している。みかんの皮やカボチャの種をクッキーやグラノーラバーにした。地域の食品ロスにも着目し、フードバンク奈良でのボランティアにも参加している。

テーマ：日本食を未来に伝える

<p>取り組み：特に地域の食べ物があまり若者（自分たちも含め）に食べられていないことを知り、未来に伝えるための方法を探っている。</p>
<p>テーマ：殺処分をゼロにする</p>
<p>取り組み：宇陀市にある「うだアニマルパーク」などを訪れ、動物のいのちを子どもたちに伝える取り組みなどについて学んだり、担当者からお話を伺ったりしながら、自分たちにできることを探っている。</p>
<p>テーマ：食から健康を見直そう</p>
<p>取り組み：「ヒトの健康」を意識し、食べ物からいのちを見直す活動をしている。文献調査を行い、日々の生活の中から自分たちにできる健康的な食生活を提案する計画をしている。</p>
<p>テーマ：外来種「セイタカアワダチソウ」を人の健康に活用しよう</p>
<p>取り組み：外来種である「セイタカアワダチソウ」が地域にも多く生息しており、活用されていることがほとんどない。しかし、奈良県内で昔からセイタカアワダチソウが入浴剤として使われていることを知った。その効能を学び、手作りの入浴剤ができないかを、実際にセイタカアワダチソウを乾燥させ、実験を行なっている。</p>
<p>テーマ：人のいのちを豊かに</p>
<p>取り組み：ヒトの暮らしが変わりゆく現代において、心が健康でない状態にある人も多い。彼らが少しでも健やかに生きることができないか、手助けになることができないかを自分なりに探り、提案できる方法を探っている。</p>
<p>テーマ：自然の化粧品を使おう</p>
<p>取り組み：肌にやさしい天然の化粧品を使うことが地球にも自分たちにもよいとわかったことから、昔の人がどのような植物を使い、治癒してきたかなどを、奈良県で古くから伝わる薬草などを伝承する人から話を聞く会に参加するなどしている。</p>
<p>テーマ：身近なものから化粧水を</p>
<p>取り組み：使われなくなった（廃棄予定の）植物から自分たちに身近な化粧品を作ってリサイクルできないかを研究中。</p>

生徒・教員の変容

昨年度のゼミと同様、ファミリーでテーマを見つける際に担当者と面談を行った。問いの質を高めるために、教員と生徒間で夏季や冬季の休業中も対話を重ねた。外部の活動者や企業などと連携が取れるよう、指導をした。教員以外の大人と対話ができているファミリーはそれぞれの活動にふくらみができている。

3.2.3.d たてにつながる交流会

第二学年の生徒は2年次から6つのゼミに分かれて探究を進めてきた。これまでも、1年間を通して、ゼミ、学年の中で探究の成果を発表してきた。この度は、探究の成果を他学年の生徒に共有し、意見交換を行う機会として、「たてにつながる交流会」を実施した。

日時：2024年3月11日（月）2、3時間目

場所：高校1・2年生教室+特別教室

対象生徒：高校1・2年生

使用言語：日本語

【発表について】

高校2年生については、発表するゼミの数ができるだけ均等になるように12グループに分けた。高校1年生も12グループに分かれ、それぞれの教室に入った。各教室6～7ファミリーが、自分の探究について発表した。これにより、1年生も2年生も様々なゼミの生徒の発表を聞くことができ、ゼミ内での発表よりも多彩なテーマの探究について知識を深めることができた。

【ファシリテーターについて】

会の進行を行うファシリテーターは、事前のアンケートで希望してくれた生徒を中心に、各ゼミから2組選出した。各教室に配置された2名のファシリテーターが当日の進行、意見集約等を行った。

【グループディスカッションについて】

会の最後にはグループディスカッションを行った。「高校生の私たちにできることは何か」をテーマに、発表を聞いて考えたことをグループ内で共有した。テーマについて意見交換をするのももちろんのこと、2年生が1年生の探究に関する相談を受けたり、発表では質問できなかったことを質問したりするなど、グループ内で他学年同士が交流する姿も見られた。

【今回の成果と今後の課題】

高校2年生は、上級生がメインとなった「たてにつながる交流会」に参加したことはあるものの、自らが主体となって交流会を進めるのは初めてのことであった。進行に慣れていない生徒がファシリテーターを務めたこともあって、スムーズに進行できなかった教室もあった。しかしながら、参加者はファシリテーターの発言や、発表者の発言に熱心に耳を傾け、質疑応答も活発に行われたと感じられる。

今後の課題としては、以下のようなことが考えられる。

- ファシリテーターの指導（進行方法、指示の仕方等）
- 意見交換がより活発になるような発表指導（聞き手を巻き込む工夫、問いかけ方等）

上記の課題を解決できるよう、今後の授業計画を考えたい。

3.2.3.e スタディツアー行程

日程：2023年10月25日（水）～27日（金）

【第1日目】

1日目は学年全体での行動となった。東尋坊を見学し、昼食をとった後、ゆのくにの森で各自が希望した体験活動を行った。

【第2日目】

2日目はゼミ別での活動を行った。ゼミで決めた行き先でそれぞれの探究を深めた。

【第3日目】

3日目はクラス別での行動となった。

スタディツアーの実施に当たっては、各ゼミからゼミ長を1名選出、各クラスからスタディツアー委員を2名選出し、企画・立案にあたった。スタディツアー委員会ではゼミ長、スタディツアー委員が旅行会社との打ち合わせを行い、行き先の決定や最終調整に大きく関わった。

日程	行程		宿泊先
10月25日(水)	学校(格技室横)——SA休憩——東尋坊(昼食)——ゆのくにの森(体験学習)——ホテル 8:00 12:00 13:45 15:00 17:00 17:20		葉渡莉
10月26日(木)	①みんなでつくる笑顔のコミュニティ	ホテル——21世紀美術館——金沢市内研修——ホテル 9:00 10:15 11:15 11:15 16:10 17:30	清風荘
	②いのちの輝きを未来に伝える	ホテル——フィッシング体験——金沢市内研修——ホテル 8:30 9:15 11:15 12:30 16:10 17:30	
	③着い地球を未来につなぐ	ホテル——千里浜ドライブウェイ——金沢市内研修——ホテル 8:30 10:00 11:00 12:00 16:10 17:30	
	④先人の知恵を未来へ届ける	ホテル——のとじま水族館——世界一長いベンチ・道の駅——金沢市内研修——ホテル 7:45 10:30 12:00 12:50 13:50 15:30 17:00 18:30	
	⑤グローバルが生み出す力	ホテル——ひがし茶屋町——金沢市内研修——ホテル 8:30 9:45 16:40 18:00	
	⑥みんながうからみんなを支えあう	ホテル——のとじま水族館——道の駅のと千里浜——金沢市内研修——ホテル 7:45 10:30 12:00 13:00 13:30 15:00 17:00 18:30	
10月27日(金)	1組	ホテル——SA——野外民族博物館リトルワールド——SA——学校 8:30 11:45 15:00 18:00	
	2組	ホテル——SA——養老天命反転地——伊勢おかげ横丁——SA——学校 8:00 10:40 12:00 14:30 15:30 18:30	
	3組	ホテル——ひつじのショーンファームガーデン——SA——伊勢おかげ横丁——SA——学校 8:00 10:00 12:00 14:30 16:00 19:00	
	4組	ホテル——SA——犬山城——大須商店街——SA——学校 8:00 11:15 13:15 14:15 16:15 18:30	
	5組	ホテル——SA——大須商店街——伊勢おかげ横丁——SA——学校 7:45 10:45 12:30 14:15 15:45 18:30	

スタディツアー行程表

3.2.3.f

1 「みんなで作る笑顔のコミュニティー」スタディツアーの成果と課題生徒：32名

概要：だれもが笑顔になることのできるコミュニティーを築く。多くの人が集まり持続可能なコミュニティーを形成している公共施設や観光地で、自分の探究をより深めるために必要なインタビューやアンケートを実施し、今後自分たちはどう関わっていけるのかを考える。

訪問先：金沢21世紀美術館

目的：金沢21世紀美術館は金沢市内で人気のあるスポットのひとつであり、「まちに活き、市民とつくる、参画交流型の美術館」をコンセプトにしている。館内の見学を通して地域に開かれた公共施設におけるコミュニティーを発見する。

活動内容：金沢21世紀美術館の見学

成果（生徒感想）：「障害者と福祉」について探究している。見学を通して館内の様々なところでバリアフリーの工夫を発見した。今後はバリアフリーがどれだけあるかではなくどんなバリアフリーがあるのか、それは利用者にとって使いよいものなのかを探究していきたい。

訪問先：金沢市内

目的：持続可能な町作りのために何が必要か、観光場所から探る。観光客にインタビューを行い、自らの探究に必要なデータを収集する。

活動内容：近江町市場やひがし茶屋街などの金沢市内の観光地の散策。幅広い観光客を対象にアンケートやインタビューを行う。

成果（生徒感想）：「観光名所とお土産」について探究しており、スタディツアーでお土産さんにどんなお土産がよく売れるのかインタビューを行った。インタビューの結果をもとにして奈良のお土産にも応用できるヒントを得ることができた。



3.2.3.f

2「先人の知恵を未来へ届ける」スタディツアーの成果と課題 生徒：22名

概要：

昔からの景色、遺産を訪れることで、先人の知恵に触れる。それぞれの場所で、詳しい人から話を聞くことで、どのように保全されてきているのかを知り、今後自分たちはどう関わっていけるのかを考える。多くの人から話を聞き、自分達の研究に生かせるようにする。

第2日目

訪問先：のとじま水族館

目的：海の生き物について知り、海洋プラスチック問題などについて考え、人間の遺産にも正負のものがあることを感じる。

活動内容：のとじま水族館の見学

成果：生物の多様性を知り、海の生き物を守ることの大切さを再確認した。水族館が海洋生物の保護を担っていることを認識し、持続可能な生物の保護をどのようにすれば良いか考える機会となった。また、海洋生物が海洋プラスチックごみによって被害を受けていることや、年間800万トンが海へ流れ出ているごみの現状から、ごみの処理方法について考えることができた。

訪問先：世界一長いベンチ

目的：持続可能な町作りのために何が必要か、観光場所から探る。

活動内容：

- ・世界一長いベンチについて現地に行く
- ・隣接する道の駅の人たちについてインタビューする

成果（生徒感想）：

世界一と銘打つことで、話題性はあるけれど、持続可能な視点にはつながっていないように感じた。持続可能性という視点を採り入れるにはどのようにすれば良いか考える良いきっかけだった。

道の駅には沢山の人が出て、かなり賑わっていたけど、世界一長いベンチには人があまりいなかった。インタビューをすると、美味しいご飯など、昔からある特産品などを求めている人が多いことが分かった。

3.2.3.f

3 「グローバルが生み出す力」ゼミ スタディツアーの成果と課題

10月25日から27日まで、北陸地方でスタディツアーを行いました。ゼミ単位で活動できるのは、2日目の26日のみであったため、その短期間でどのように成果を得られるかを留意しながら、各ファミリーで訪れるべき場所やインタビュー、英語でどのように質問するか等を考えました。金沢という場所に関しては、外国の方が多く訪れる場所であり、美術・建築・文化・言語等に関連することから、各ファミリーが「グローバル」規模で探求に取り組むことができました。

2日目 10月26日 (ホテル→21世紀美術館→ひがし茶屋街→ホテル)

始めに訪れたのは、21世紀美術館です。美術や建築を探究しているファミリーがいることや全体での希望が多かったため、訪問を決定いたしました。現代に蔓延る問題に対し、アートを用いてそれに対峙し、我々の問題意識の醸成を図るかのようなものでした。建築的な観点からは、美術館が円形かつガラス張りになっており、典型的なものとは異なって、街に開かれた開放的な造りになっていることから、多くの人に受け入れられやすいものになっていました。

次に訪れた場所は、ひがし茶屋街です。金沢市内で最も外国の方が観光に訪れる場所だと事前に調査し、訪問を決定いたしました。ひがし茶屋街は、付近に大通りや市場があるとは思えない静けさを感じられる観光地です。京都と同様に海外から多くの観光客が訪れ、日本の伝統的な文化に触れています。ここでは、建築を探究しているファミリーであったり、グローバルな問題について探求しているファミリーが、主にインタビューを行い、探求を深めていきました。本ゼミでは、それに際しての英語指導も行っていたことから、大半のファミリーがインタビューを実施することができました。ひがし茶屋街では成果を得られなかったファミリーについては、近江町市場に加え、金沢駅まで範囲を広げ、探求活動を行いました。しかし、実際に行ったインタビュー内容が不十分であったり、予測していた回答とは大きく異なっていたりなど、エラーがあったファミリーについては、その後改めて探求の軌道修正を行い、奈良公園や各ファミリーの希望場所に任意で訪れ、外国の方、及び関係者へインタビューを行い、再調査をしていました。探求が大きく進んだファミリーから、一歩後退したファミリーまで、様々でしたが、どのような結果であれ、生徒らが主体的に考え、実行に移したこととその結果を基に探求活動を軌道修正したり、アクションを起こしたりしていたりなど、スタディツアーで行動に移すことの重要性に気づき、主体的に動くことを身につけてくれました。



(写真左) 21世紀美術館前でのグローバルゼミの集合写真

(写真中央) 美術館からひがし茶屋街へ向かう生徒

(写真右) 外国人観光客とインタビューをする生徒

3.2.3.f

4 「みんなちがうからみんなで支え合う」ゼミ 生徒：35名

概要：人権課題からSDGsに関連した問題にも視野を広げ、自身の探究テーマを別な視点で捉え直し、視野を広げることを目的とする。各訪問先を訪問する際は、こちらが用意した問いについてバス車内で考え、訪問後考えた答えを共有しながら考えを深めた。

第1日目 ①

訪問先：東尋坊

目的：「日本に自殺が多い原因」について考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、東尋坊の自然を見学する。

成果：「自殺の名所」などと言われることもある東尋坊だが、そもそも日本に自殺が多い根本的な原因を探ることが大切であることを確認し、それぞれ考えを深めていた。とりわけ日本の文化では、完璧を求めすぎることや、困ったときに自分に責任を感じるが多いことなど、このような根本的な原因を変えていかない限り、生きにくい社会が変わることはないことを考えていた。

第1日目 ②

訪問先：ゆのくにの森

目的：「社会を変える力として、芸術にはどのような可能性があるか？」を考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、伝統工芸を体験する。

成果：日本では「芸術は趣味・娯楽」という風潮がある中、社会変革の力として芸術を捉え直すということを考えていた。社会のしくみや政策として、芸術のもつ力を積極的に考えなければならないことを考えた。

第2日目 ①

訪問先：のとじま水族館

目的：「能登の里山里海の豊かさを知り、未来へつなげていくためには？」を考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、みて・ふれて・体験する。

成果：さまざまな生物展示を見ることで命の大切さや、施設・展示に対するバリアフリーなどの工夫を学ぶことができた。

第2日目 ②

訪問先：道の駅のと千里浜・なぎさドライブウェイ

目的：「日本で唯一海岸を車で走れるのはなぜ？」を考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、体験する。

成果：千里浜なぎさドライブウェイは深刻な海岸浸食により砂浜が減少していくという危機に直面し、観光道路としての存続が危ぶまれている。一時は数十メートルもの砂浜が消失することもあったが、石川県や自治体において「千里浜再生プロジェクト」を発足し、日本で唯一の砂浜環境を守り再生するために、近郊の海岸の砂を移植するなどの対策を行っていることがわかった。

第2日目 ③

訪問先：金沢市内

目的：「自らの探究テーマについての問いについて」を考える。

活動内容：問いの答えを考えながら、散策、インタビュー等をする。

成果：異なるバックグラウンドや視点を持つ観光客層の声を集め、各施設等に観光客を引き寄せるヒントを手に入れ、次のステップに進むための素材を得ることができた。今後は自らの探究テーマに落とし込み、自分達に何ができるか、考えるきっかけを得ることができた。

3.2.3.f

5「蒼い地球を未来につなぐ」ゼミ 生徒：20名

概要：環境に関わるテーマで探究を進める生徒が多いため、海や植物など自然を体感できる場所を訪れることで環境問題について考える機会をもつことを目的とした。実際に、海や浜辺の様子を見学し、庭園を見学することで植物の様子を見ることで、環境について考える機会を得ることができた。

第2日目

訪問先：千里浜なぎさドライブウェイ・兼六園

目的：ゼミの生徒たちが、海を含む自然環境を観察し、研究を行うことで学びを深める。

活動内容：生徒たちは、日本で唯一のドライブウェイができる千里浜なぎさビーチを訪れた。そこでは、生徒たちは周辺地域を観察する時間を楽しんでおり、その光景に感動していた。特筆すべきは、別の学校の中学生在がボランティア活動やビーチの清掃に取り組んでいる様子を見たことで、生徒たちに社会貢献の重要性を強く印象付けることができたことである。その後、生徒たちは兼六園へと移動し、自然の美しさを再度観察した。最後に、自己の研究を行う時間があり、生徒たちはより深い学びと理解を得ることができた。



成果：【生徒の振り返り】きれいな海をこのまま守らなければならないと感じた。砂浜の幅が減少していることや海洋汚染が進行していることを知った。観光地の海（ドライブウェイ）でもゴミが目立ちたが、ボランティアの方々がゴミを拾っている姿も見られた。兼六園では自然が非常に保護されており、農薬の使用と自然農法の違いについても研究を行っていることを学んだ。金沢市内での活動中に、自分たちの研究活動につながるような行動を取りながら、観光地や地域の様々な場所を訪れることができた。日常生活では経験できない自然に触れることで、研究への意欲が高まった。さらに、研究に役立つ情報を得たり、インタビューを行うことができて良かった。海を訪れてビーチやその周辺の生物を見て、海洋問題について考えるきっかけとなった。地域の人々の努力によって海が清潔に保たれていることを知り、海を清潔に保つことの重要性を再認識した。

3.2.3.f

6 「いのちの輝きを未来へ伝える」スタディツアーの成果と課題 生徒：29名

概要：それぞれの探究にヒントをもらう旅。さまざまな場面・環境・立場でいのちと向き合う、また、保全に情熱を傾ける人々に出会い、今後の探究活動が豊かなものになることを目的とする。人生の先輩として生き方を学ぶ。

訪問先：福井市鮎川地区

目的：鮎川地区は有数の漁場であり、様々な種類の魚が泳いでいる。

活動内容：釣り体験

成果（生徒感想）：日本海の豊かさを感じることができた。普段は生き物を身近に感じることはないが、日々食べている魚も生きて海に泳いでいるという当たり前のことを改めて実感した。また、このように生きているもののために環境を壊さないことは人の義務のように感じた。

訪問先：金沢市内

目的：生物が生きていく環境のために何が必要か、観光場所から探る。市役所や観光地の方にインタビューし、自らの探究に必要なデータを収集する。

活動内容：近江町市場やひがし茶屋街などの金沢市内の観光地の散策。市役所や専門学校、観光案内所を対象にアンケートやインタビューを行う。

成果（生徒感想）：奈良と同じく観光地となっている地区でゴミや環境の問題について、どのように取り組んでいるかを聞くことができた。また、企業や専門学校などの取り組みを自分の探究にも生かしていきたい。



3.2.4 グローバル探究Ⅲ

a 全体計画

【対象】 3年生
【時間】 月曜7限、金曜6・7限
【目的】 1学期 <ul style="list-style-type: none">● 探究のテーマを深めつつ、高校生国際会議に向けた準備を進める。● 論文作成に関わる、書き方や形式を身につける。 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議にて、宣言文を作成し未来へつながる行動指針を共有する。● 各自論文の作成を進める。 2学期 <ul style="list-style-type: none">● 論文を完成させ、他者と共有することにより探究のさらなる深化を図る。
【計画】 1学期 <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議に向けて、探究の成果を発表する。● 論文のてびきを配布し、論文の形式や注意事項について確認する。● たてにつながる探究交流会（7月10日）<ul style="list-style-type: none">・ 各ゼミの代表生徒を選出し、発表を行う・ 2年生と発表に関するテーマでディスカッションをする 夏休み <ul style="list-style-type: none">● 高校生国際会議で、発表者だけでなく参加者全てを巻き込んだディスカッションを行い、未来につながる行動指針を作成する。 2学期 <ul style="list-style-type: none">● 要旨とともに論文を完成させ、推敲を行う。● 論文の交流を通じて、他者の視点をふまえてさらに探究を深化させる。

3.2.4.b グローバル探究III 研究テーマ一覧

3年生では、2年次より継続してゼミでの活動を行った。各ゼミで実際に生徒が設定したテーマの一部抜粋を以下に示す。

1-みんなで作る笑顔のコミュニティ

- 地震の防災 ～高校生にできることは何か～
- たくさんの人が見やすい配色にするには？
- コロナ禍の消費者行動について
- なぜ日本は他の国と比べて臓器提供者が少ないのか
- トラックドライバーの負担軽減に向けて
- イベント・ボランティアによる地域活動の活性化と地域コミュニティの広がり

2-先人の知恵を未来へ届ける

- 大和野菜を未来に残すには
- 食べ物の価値を未来に繋げる
- 現代の風潮と伝統を掛け合わせた着物とはなにか
- 世界遺産をどのように守っていくか
- 伝統文化の継承に必要なこと

3-グローバルが生み出す力

- 日本の貧困
- のこりものには福がある（フードロスの削減）
- 医療通訳は実現可能か
- 主体性を育むテストについて
- グローバル化とコミュニケーションの関係性

4-みんなちがうから、みんなで支え合う

- 多くの学生に暮らしやすい学校生活を
- 日本で同性婚を認めてもらうにはどうすれば良いのか？
- 薬を飲むことは幸せにつながるのかー精神病から学べることー
- グレーゾーンの人が生きやすい世の中にするためには？
- 『LGBTQ』って何だろう～タイの寛容性から～
- こころの病と社会のつながり

5-蒼い地球を未来につなぐ

- 大和川水質改善プロジェクト
- ペーパーレス化を促進する
- データで考える地球温暖化
- タバコと海洋汚染
- チョークの粉を再利用

6-いのちの輝きを未来に伝える

- 高校生の化粧品に対する意識の改革
- 野生動物の命を無駄にしない方法について
- ハンドソープの使用からできる環境保全
- 一次マイクロプラスチックの排出を抑えるために
- 海洋生物をプラスチックゴミから守るために
- ヨシストローの社会実装化

3.2.4.c ゼミの取組の成果と課題

1 「みんなで作る笑顔のコミュニティ」ゼミ

生徒： 31名

概要：防災・教育・医療・福祉・経済などの視点から、だれもが安心して毎日を送ることのできるまちづくりについて探究を進めた。

- ・ イベント・ボランティアによる地域活動の活性化と地域コミュニティの広がり
- ・ アニメ聖地巡礼マップの存在に意味はあるのか？
- ・ プラスチック削減・ゴミの分別について
- ・ みんなが快適に過ごすことができる環境づくり
- ・ 子どもたちに倫理観を身につけさせる新しい取組の提案
- ・ なぜ日本は他の国と比べて臓器提供者が少ないのか
- ・ 地震の防災 ～高校生にできることは何か～
- ・ ネットいじめによる高校生の被害と対策
- ・ 私たちの子供の未来を救う為に
- ・ たくさんの人が見やすい配色にするには？
- ・ 人と人との繋がりが深いまちづくり
- ・ コロナ禍の消費者行動について
- ・ 奈良県の商店街を発展させるには、どうすればいいのか
- ・トラックドライバーの負担軽減に向けて
- ・なぜ日本の臓器提供率は低下しているのか
- ・プラスチックと世の中の関わり

以上は、本ゼミにおいて生徒が取り組んだテーマの一部である。

いずれの探究活動も、生徒自身の関心に基づいてテーマ設定を行った。

WWL高校生国際会議では、1つのファミリーが代表として発表を行い、2つのファミリーがポスターセッションを行った。

最終的な論文作成の段階において、論文の書き方や探究のまとめ方に苦勞する生徒が多かった。

生徒・教員の変容

防災、医療、福祉、経済、教育などさまざまな分野で解決しなければならない問題がある中で、個々の生徒が一番興味のある問題をテーマに探究を進めた。課題解決が困難な問題に対しても、自分事としてとらえ、「高校生である自分にできること」を精一杯考え、実現に向けて努力した。

生徒同士や教員が議論することで、自分の見方・考え方の偏りに気付き、視野を広げることができた。また、スケジュール管理や分担決めなど、協働する方法を学び、責任と自覚を持って探究活動を進めることができたと考えられる。

3.2.4.c2 「先人の知恵を未来に伝える」ゼミ

生徒： 29名

概要：各自設定したテーマについて2年次より行った探究を3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、最終的に論文の作成を行った。本ゼミでは先人より伝わる事柄について、その価値を理解し継承するためにできることを探究した。生徒の探究テーマは多岐にわたる。

- ・ 伝統工芸品を後世に残すためにできること
- ・ 伝統文化の継承に必要なこと
- ・ 食べ物の価値を未来に繋げる
- ・ 世界遺産の保全
- ・ 日本の伝統食の継承
- ・ 現代における祭りと年中行事の必要性
- ・ 大和野菜を未来へ残すためにできること
- ・ 現代の風潮と伝統を掛け合わせた着物
- ・ 薬が進歩し続ける理由とそれに伴う影響
- ・ 先人から伝わる事柄で生じる影響

以上は、本ゼミにおいて生徒が取り組んだテーマの一部である。

いずれにおいても、過去人類が生み出したものに価値を見出し、現在を生きる私たちにとってどのような価値があり、活用することができるのか、そしてどのようにすれば未来に繋いでいくことができるのかについて生徒は探究を深めた。

3年生では論文を執筆し、自身の探究成果についてまとめた。内容の精選や書き方・まとめ方に苦慮している姿が見られたが、全員が提出することができた。

WWL高校生国際会議では1名の生徒が代表として発表を行った。また1つのファミリーがポスターセッションを行った。

生徒・教員の変容

2年次よりテーマを継続して探究することで、より深く考察する力が身についた。ゼミ内外での発表を定期的に行うことにより、探究内容の要点を絞って他者に伝えるために組み立てる力や個人の思考の中で留まらない多角的な視点を獲得することができた。また他者の探究内容に質問を行うことで批判的に物事を見る力が身についた。本ゼミで扱うテーマは多岐に渡り、高校生という立場でできることを考察し実践していくことは困難な部分が多くあったが、生徒自身が興味関心を抱く内容を探究テーマとして選び、粘り強く探究活動を行うことができた。

生徒、教員ともに特定の分野に限定されることなく身近な問題に対して意識を向け、自分事として捉え直すことができた。今何をすべきなのかを生徒自ら計画立てて考え、ファミリー間でもやるべきことを自主的に共有、実践する力が身についた。

3.2.4.c3 「グローバルが生み出す力」ゼミ

・グローバル探究（「グローバルが生み出す力」）は、週に合計3時間、月曜日と金曜日にありました。クラスの生徒は前年度のグローバル探究と同じであり、学生たちは選んだテーマに基づいてグループで研究を継続することができました。グローバル探究では、グローバル社会に関連する様々なテーマを持つ7つのグループがあります。1学期では、生徒たちは探究週間中にグローバル探究の交流会に参加しました。1年・2年生の後輩に現時点までの探究の成果を共有することが出来ました。2学期には、生徒たちは研究を締めくくり、最終論文を卒業プロジェクトとして執筆しました。

・最終論文は、仮説、研究方法、結果、および研究のレビューを記載した少なくとも3つの段落から構成されています。特に執筆プロセスには2か月かかり、論文は編集と確認が行われました。最終的に、これらのエッセイは将来の後輩のために一冊の本にまとめられます。

令和5年度の流れ：

一学期	2学期	3学期
5/18 探究交流 (1～3年生)	9月～10月 論文に向けて探究活動	(授業なし)
8月10日 高校生国際会議	10月～論文作成・完成	

高校生国際会議8月10日

・第2回目の高校生国際会議が、2023年8月に奈良学園大学のキャンパスで開催されました。イベントの準備は7月末から8月初めまで行われました。このイベントでは、3年生が主要な役割を果たしました。フードロス削減を目指す1つのグループ、「のこり物には福がある」は、イベントでプレゼンテーションを行い、他の2つのグループはイベントの休憩時間にポスターセッションで研究を展示しました。また、3年生はいくつかのグループで進行役を務め、また司会者としてイベントを進行しました。

卒業論文

・異なるテーマに基づいて7つのグループから成る学生たちは、食品ロスから人権までさまざまなテーマに関する論文を、2学期から執筆しました。データ収集のために、各グループは調査やイベント、現地調査を行いました。たとえば、食品ロスチームは地元のベーカリーに行き、食品ロスに関する質問をしました。人権チームはジェンダーに関する研究を行い、LGBTQウィーク（意識週間）を設け、昼食時に音楽を流しながらジェンダーの多様性について話し合いました。意識を高めるために、学校を虹色の旗やポスターで飾りました。日本の貧困を研究するチームは、貧困に関するデータを求めて子供食堂を訪れました。しかし、キッチンを訪れたところ、学生たちは先入観とは逆に、子供たちのキッチンは単に食事を得るだけでなく、同年代の子供たちとつながるために設立され、運営されていることを理解しました。これにより、学生たちは物理的な貧困（食物やお金の不足など）だけでなく、働く親やスマートフォンの普及により学生たちがお互いに交流できない心理的貧困にも焦点を当てていくようになりました。

タイトル	テーマ
のこり物には福がある	フードロス
日本の貧困	貧困問題
より良い学校の生活のために	文化
それぞれの個性が輝く学校	人権・LGBTQ
グローバル化とコミュニケーションの関係性	言語
医療通訳は現実可能か	医療
主体性を育むテストについて	教育



3.2.4.c4 「みんなちがうからみんなで支え合う」ゼミ

生徒：33名

概要：各自設定したテーマについて3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、独自研究を通じて最終的に論文の執筆を行った。各生徒の探究テーマは以下の通りである。

・多くの学生に暮らしやすい学校生活を日本で同性婚を認めてもらうにはどうすれば良いのか？ ・校則はなぜ私たちがなりたいたい姿になることを制限するのだろうか？ ・ロシア人の人権問題 ・黒人差別の現状について ・どうしていじめが起きてしまうのか ・いじめを減らす方法は何か ・薬を飲むことは幸せにつながるのか ・なぜ日本の自殺者数が多いのか ・安楽死について ・障がいの有無で分けられることのない社会はどうしたら作れるのか？ ・こころの病と社会のつながり ・グレーゾーンの人が生きやすい世の中にするためには？ ・家庭を持ちながら働く女性 ・女性の過ごしやすい社会にするにはどうすればいいのか ・在日コリアンへの差別はなぜ起こるのか ・『LGBTQ』って何だろう ・発達障害について考える ・黒人差別を無くす第一歩はどうやって踏み出せる？ ・日本でのLGBTQ+に対する教育不足の原因は何か、それが原因で社会に広まっている間違った認識を減らすにはどうすればいいのか？

いずれの探究活動も、生徒自身の関心を最大限に尊重して行われた。議論の分かれる人権に関する内容が多くを占めたが、各人なりのアプローチで課題解決に向けた取組を行い、最終的にその成果を形に残すことができた。

また、8月のWWL高校生国際会議では1名の生徒が代表として発表を行い、ゼミのメンバー全員を含めてディスカッションを行った。

生徒・教員の変容

本年度は、2年次に立てたテーマをもとに独自研究を進めた。生徒たちは、アンケートやインタビュー、文献調査を実施し、指導教員らのアドバイス等のやり取りを重ねながら、論文執筆を通して自らのテーマとその課題解決の道筋について理解を深めることができた。ゼミのテーマ上、生徒は多様な価値観に触れることができたと考えられるが、自分の意見を「述べる」とどまり「論じる」レベルまで成長するのは平時の授業内の取組だけでは難しい。逆に未熟なままでは個人の考えに固執した内容に進んでしまう可能性もあるため、どこまでのレベルを目指した指導をすべきか難しい面がある。

教員の立場としては、論文作成を大目的とするなら、まず教員側が論文に関して最低限の知識のコンセンサスを取る必要があると感じた。やったことは間違いなく生徒の成長に貢献するものだと考えるが、専門領域によりアプローチの仕方や成果のまとめ方も当然変わってくるため、指導の体系化や教員側の知識が一定保たれなければ取組としてのサステナビリティが非常に不安定なままに各教員の裁量だけで授業を展開するしかなくなる。その中で昨年度1期生の成果物を提示・確認しながら説明することができた点は、2期生の指導をする上では良かったし、本ゼミを2年次より1章、2章の執筆を進めながら指導していただいていたことが本年度の指導における大きなベースとなった。ただし、展開方法には改善の余地があり、最終的に何を目標としているのかがもっと明確に生徒に伝わるようにしないと全体的な意義が薄れてしまうと感じた。

3.2.4.c5 「蒼い地球を未来に繋ぐ」ゼミ

生徒：26名

概要：各自設定したテーマについて2年次より行った探究を3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、最終的に論文の作成を行った。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：マイクロプラスチックの削減

取り組み：プラスチック問題やそこから派生する健康被害について探究・分析を続けてきた。ペットボトルを切ってケースを作ったり、磁石を取り付けて黒板などに貼り付けるためのマグネットを作ったりと、プラスチックもさまざまな用途に使えることを発表した。

テーマ：チョークの再利用

取り組み：学校で発生するチョークの粉を集めて水と混ぜ、新しいチョークに再生することに挑戦した。捨てられる資源を再生した。

テーマ：ペーパーレス化の推進

取り組み：学校でのペーパーレスの推進を目標に活動をした。複数回の授業において教員の協力のもと、紙の授業プリントの配付の代わりに、タブレットでの配信をした。その後生徒及び担当教員にアンケートを実施し、その感想や課題を分析した。

テーマ：リユースボックスを活用したプラスチックゴミの削減

取り組み：学校でのプラスチックごみの削減を目指して活動をした。日々大量に処分される不要となった裏紙を、各教室に設置して使用を促すことで、生徒の意識改革を試みた。

テーマ：学校の電力消費量の分析

取り組み：学校における電力消費量の削減を目指して活動をした。過去数年の学校の電力消費量に関するデータを集約して分析することで、課題を発見し、その解決策を検討した。

テーマ：外来種

取り組み：外来種による、在来種への被害の削減を目指して活動した。外来種である鯉の調理方法を探究し、そのレシピを作成した。

テーマ：生活排水の削減

取り組み：生活排水の削減を目指して活動をした。米のとぎ汁の効果的な活用方法として、学校での窓拭きでの使用などを提案した。

テーマ：セイタカアワダチソウの活用

取り組み：外来種の植物について探究活動を進めてきた。特にセイタカアワダチソウを採集して入浴剤や食用への利用やその有効な方法について探究した。

テーマ：エアコンの消費電力の削減

取り組み：エアコンの消費電力について探究した。フィルターの清掃やルーバの角度などを調整することで設定温度を高め維持できることを示した。

テーマ：たばこのポイ捨て

取り組み：ゴミのポイ捨て防止による、自然環境の改善を目指して活動をした。バス停周辺のたばこのポイ捨てに着目し、ポスターを設置することで、状況改善を試みた。

テーマ：ごみの分別の促進

取り組み：学校におけるゴミの分別を目指して活動をした。アルミ缶の磁石に引き寄せられる特徴に着目し、スチール缶との分別が自動で行われるゴミ箱の作製に取り組んだ。

テーマ：簡易クーラーによる地球温暖化防止

取り組み：地球温暖化の原因は温室効果ガスであり、家庭電力量はその大きな原因となっていることを分析した。保冷剤と扇風機を用いて簡易クーラーを作って、エアコンの節電ができることを示した。

生徒・教員の変容

1学期では、多くのファミリーがこれまでの研究内容を具体的な実践に結びつけ、データの収集に意欲的に取り組んでいました。後半の学期に入ると、生徒たちは論文作成において、以前よりも熱心に文献を調査し、深い理解を追求する姿勢を発揮しました。

しかしながら、教員としては論文指導において課題に直面しました。生徒が自ら論文の内容にどれだけ関与し、教員がどの程度介入すべきかの判断が難しい状況が続きました。今後は、指導の体系化を進め、生徒たちがより効果的に論文作成に臨むための環境整備が必要であると考えています。

概要：さまざまないのちがともに生きる世界、そのバランスが崩れ、今、共存することが難しくなっている。すべてのいのちが輝き、それぞれの力を発揮できる世界を実現するために、私たちはどう生きるべきなのか。私たちヒトを含む多くのいのちがバランスを保ち、共に暮らせる社会を作るためのヒントを探る。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：海洋生物をプラスチックゴミから守るために

取り組み：海洋プラスチックをはじめ、海洋に流れ込むゴミにより生き物の命が脅かされている。海洋に流れ込むゴミの多くは、ポイ捨てされたゴミである。調査の結果、ポイ捨てされたゴミのうち、マスクが高い割合を占めた。そこで生分解性のマスクの利用促進を考え実験を行ったが、土壌中でも生分解性マスクの分解効率が悪いことがわかった。次に、意図せず落としてしまうマスクも多いことに着目し、マスク用クリップを考案した。実際の使用感についてもアンケートを行った。

テーマ：ヨシストローの社会実装化

取り組み：湿地帯に生えるヨシは、以前はさまざまな用途に用いるために刈り取られていた。しかし現在、ヨシは利用されなくなり放置されることが多くなった。ヨシの放置は、湿地の環境を変化させ、そのためそこに住む生物の多様性を減少させる要因となっている。このような現状をスタディーツアーで学んだことがきっかけで、ヨシをストローとして活用するアイデアを考案した。ヨシストローを実際に制作し、その有効性を確認した。また、許可を得て平城宮跡のヨシを刈り取り、そこからストローを作成した。

テーマ：ハンドソープの使用からできる環境保全

取り組み：パーム油は我々の生活に深く関わるが、その生産量はボルネオの接待雨林を切り開くことで確保されている。違法な伐採によりパーム油の増産が行われているが、RSPO認証を受けた製品は、違法な伐採が行われていない生産地から生産されたパーム油を使用していることを示している。そのため、RSPO認証製品を積極的に使用することは、ボルネオの森林を守ることに繋がる。このRSPO認証を受けたハンドソープを学校で使用する運動に取り組んだ。校長先生などの学校代表者が集まる場で、RSPO認証ハンドソープの使用を訴えた結果、学校で使用するハンドソープがRSPO認証のものに変更されることになった。またポップなども作成し、校内で広く普及させる活動にも取り組んだ。

テーマ：一時マイクロプラスチックの排出を抑えるために

取り組み：海洋に流出するプラスチックゴミが問題となっているが、その中でもマイクロプラスチックは回収が困難であり、さまざまな生物の健康被害をもたらす要因とされている。台所から出るマイクロプラスチックを減らすために、天然物由来の麻のヒモから食器洗い用たわしを作成し、その使用を広めようとした。形状や大きさなどを変化させるとともに、手編みによる作成方法を考案し、個人で作成できるように紹介動画も作った。育友会などの保護者にアンケートを取り、実際の使用感について調べた。



テーマ：クビアカツヤカミキリの防除にむけて

取り組み：昨年度に先輩が行った調査を引き継ぎ、奈良県における特定外来生物クビアカツヤカミキリの被害を調べた。秋篠川沿いの桜並木を重要監視地点とし、ラベリングをした157本の桜に対し、2回の調査を実施した。また、県で行われた講習会にも参加した。

テーマ：動物の殺処分をゼロに近づけるために私たちにできること

取り組み：殺処分は、ペットに関する最も深刻な社会問題の一つで、環境省が発表した統計資料では、2020年度の年間殺処分数は犬・猫合計で約23,764頭であった。この殺処分をゼロにするために、奈良県内にある保護施設にボランティアにいき、現状について体験を通して学んだ。校内でアンケートを取るとともに、譲渡会の活動について広報活動を行った。



テーマ：野生動物の命を無駄にしない方法について

取り組み：シカやイノシシなどの野生動物によって、農産物に損害が生じている。このような被害(獣害)を減らすために野生動物は駆除され、主に埋めたり焼却されたりして処理されている。そこでジビエの利用をもっと促進することに注目した。この目的を達成するために、「いこま未来LAB」という生駒市が主催する実践型ワークショップイベントに参加した。このイベントで、生駒市のさまざまな方のサポートを受け、ジビエの試食会や勉強会を開催したり、地域のイベントでジビエの広報活動を行うなどして、ジビエの認知度を上げる活動をした。また宇陀市や十津川村で獣害対策に取り組んでいる企業や個人にインタビューを行い、様々な視点で獣害対策に取り組んだ。



テーマ：制服リユースの提案と継続

取り組み：ゴミ削減を考える中で、ファストファッションに関する問題に注目し、探究を進めた。その中で、自分たちが卒業した中学校における制服リサイクルの状況を聞き込みをした。聞き込みで得た情報をもとに、本校の制服リサイクルに着目し、卒業生の制服を再利用することで、捨てられる制服の無駄をなくすことを考えた。実際に卒業生の連絡を取り、回収した制服を留学生に貸与することで、制服リユースの取り組みの端緒を開いた。

テーマ：高校生の化粧品に対する意識改革

取り組み：人間に対して危険が生じる可能性のある化学物質を、人間に適用する前にまず動物に対して実験し、その安全性を確認している。この動物実験によって多数の動物の命が失われていることを問題とし、動物実験で失われる命を少なくするような活動をしている。その中でも、自分たちに馴染みのある化粧品について注目した。動物実験をしていない企業を調べたり、そのうちのいくつかに連絡をとりインタビューをするなどして現状の把握をするとともに、動物実験をしていない化粧品の使用を同年代の生徒に広めようと活動した。また、地域でのイベントにも参加し、多様な世代の参加者に、自分たちが調べた動物実験の問題点についての情報を広めた。



テーマ：動物実験を減らしたい

取り組み：日常生活で使用している化粧品の多くが動物実験を経ている。この実験ではイヌ、ネコ、ネズミ、サルなどが使用され、彼らは皮膚が焼かれたり、目に薬品が注入されたりするなどの苦痛を受けている。この問題に対し、消費者が動物実験の現状を理解し、それによって苦しむ動物を減らす努力が可能であると考えた。そのため、動物実験の廃止を目指すNPO法人がおこなう署名活動を校内で展開し、在校生に対し、問題の共有を広く行った。

生徒・教員の変容

「いのちの輝きゼミ」の生徒の指導では、次の3点を心がけた。

- 机上で片づく問題はなく、自分たちがどう生きるか、何が正しいと思い行動するか、卒業後の人生にもつながる価値観を常に問いかける。
- 「なんとなくこれが問題だと思う」「こうすれば解決できると思う」ではなく、エビデンスを取ることを積極的に働きかける。
- 地域、企業、行政などと積極的につながりを持ち、活動するように促す。

生徒と教員が教員との対話を重ねることで、生徒は「問いをもつこと」「問いを立てられること」「探究したい関心に届くまで問いを重ねていく力」の重要性を繰り返し伝えてきた。2年間の活動で、主体的に動き探究を前進させようとする意思が認められた生徒もいたが、十分に問いが深まらずに、活動の深まりが認められない生徒もいた。生徒との十分な対話の時間が持てたのか、もっと生徒の関心を惹起する問いかけがなかったのかを考え、次年度以降のゼミ運営に活かしていきたい。

3.2.4.d. 高校生国際会議

【高校生運営委員会】

拠点校（本校）と連携校に高校生運営委員会のメンバーを募り、国際会議の運営も高校生が担った。拠点校（国際高校）、連携校である奈良高等学校、法隆寺国際高等学校、高取国際高等学校、奈良学園登美ヶ丘高等学校から生徒が参加し、5回の準備会を実施した。「持続可能な社会の構築」を目指す国際会議であるために、私たちはどのような姿勢で会を運営し、会を作り上げるのか、などについてもワークを行い、運営スタッフが率先してあるべき姿を共有した。「環境」「受付」「ファシリテーター」「広報」「司会」のチームが結成された。「環境」は会場の設営やポスター展示、会場転換など、会場の設営全般を担った。

「受付」は来場者の把握、ウェルカムボード・案内板等を作成し、当日は笑顔で歓迎・案内をした。「広報」はチラシやポスター、各会場で配布する実施要項を作成した。「司会」は全体の司会を担った。「ファシリテーター」は各会場においての議論がスムーズに進むことだけでなく、参加者全員が安心・安全に発言できる場づくりを目指し、何度も話し合いを重ね、練習を行った。サポート役の大学院生とも連携を密にしながら進行を進めた。

【概要】

6会場に分かれ、「持続可能な社会の構築に向けて」参加者より問題提起の発表が行われた。その後、それぞれの発表で扱われた持続可能性を阻害する要因をフロア全体で共有し、それらの問題点が起こる原因を考えた。各会場ごとにファシリテーター2名が会を進めた。持続不可能な要因を排除し、持続可能な社会を作るために必要なことは何か、高校生の自分たちにできることは何かを議論した。6つの会場から代表を選び、それぞれのディスカッションで話し合った内容を持ち寄り、宣言文作成委員会を構成し、この会の宣言文を作成した。さまざまな制服の高校生たちが集まり、議論を重ねた。

【おわりに】

特に運営スタッフのファシリテーターは日々の校内における交流会等でもファシリテーターを担い、その都度ミーティングを実施し、改善するため試行錯誤を重ねた。その経験を運営準備会でも共有しながら、全ての会場で同じ雰囲気を作り、スムーズな進行ができるよう努力した。昨年度にもファシリテーターを行った生徒もおり、先輩たちから引き継ぐこと、さらによいものとして未来へつなぐことを意識した会への貢献も見られた。海外からオンラインで参加した生徒への配慮や宣言文作成における進め方等にはまだまだ改善の余地もあり、サポートする大人の課題でもある。

以下、高校生運営委員会ふりかえり会における各係の報告・反省・課題等を掲載する。

ファシリテーター報告書

〈改善点〉

- 電子機器の事前準備をもっとしておくべきだった
特に、海外からのオンライン参加者との接続テスト
→接続が不安定で、待ち時間が生まれたり、プレゼン内容がうまく伝わらなかつたり、計画通りに円滑には進まなかつたから
- 他校、海外からのプレゼンターとの打ち合わせの機会があればよかった
→当日初めてプレゼンを聞いて、内容をファシリテーター側が100%理解できず、進めるのが難しかった



- プレゼンの内容をもっと事前に確認して、内容を要約したものを参加者にも(終業式のタイミングなどで)配布しておいてもよかったかも
→参加者が英語を理解できず、初めて聞くプレゼンからディスカッションを進めるのが難しかった。
- 実行委員の仕事を事前に把握して、ファシリテーターとの連携を強くした方がよかった
→当日、自分の役割がわからなくなったりしてお互い困った
- 提言文作成のための事前準備をもっとすべきだった
→プレゼンとディスカッションの練習ばかりで、提言文を作る際のイメージができていなかった



ファシリテーター報告書 2

ファシリテーターの成長点

- ・ 臨機応変に対応ができるようになった
→ 想定していない問題が起こったが、時間内に収まるように自ら考えて動くことができた
- ・ さまざまな語彙を身につけた
→ 普段なら聞けないプレゼンテーションを聞き、語彙が深まった
- ・ 戸惑っているグループや盛り上がっているグループなど、グループによって対応の仕方を考え、その都度、変化させ、進めることができた
- ・ 英語があまり得意ではなかったが、練習の段階から英語に触れることにより英語が好きになった
→ 言語を学ぶことの楽しさも実感できた
- ・ 全体を見て行動することができるようになった
→ 自分の担当することだけに囚われずに動くことができるようになった



ファシリテーター報告書

今後の展望

- ・ 国際会議をもっと広めたい
 - より多くの意見を通して知見を深めたい
 - より多くの地域で国際会議をしてもらいたい
- 自分たちにできることはもちろん、
高校生が何を考え、どんなことを実践しているのか
知り、学ぶことができたから
- ・ さまざまな学校からより多くの人に参加してほしい
 - さまざまなプレゼンテーションや意見を聞くことで
多様な気づきにつながる



チーム・ファシリテーター

2023 高校生国際会議 環境係



よかった点

違う学年、学校の人とひとつのものを作り上げることがめったにないので、初めての経験ができました。環境係としての仕事を問題なく終えることができたのがよかったと思います。

環境係の仕事を他の班の人にも手伝ってもらったり、逆に他の班の仕事を手伝ったりしてみんなで仕事を分担していたので、スムーズに準備や片づけが終わったところがよかったです。

難しかった点

各会場ごとに机や椅子の配置を考えることや、ゴミの処理について考えることも難しかったです。例えば、ひとつの班に椅子をどれだけ用意するか、などでは、話しやすさを優先するか、ひとつの教室に入れる人数を増やすことを優先するかなど、あらゆることを話し合っていました。去年もこの国際会議に参加した先輩方もいたのですが、去年とは会場が異なったため、ポスターの配置や、机・椅子の並べ方、ゴミの扱いについてなど一から考え直さなければならなかったのが大変でした。



学んだこと

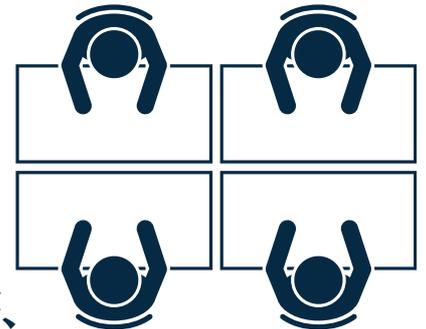
来賓の「熊本☆農家ハンター」の宮川将人さんの話を聞いて、チャレンジすることの大切さを改めて学びました。お話を聞いてるとあっという間に話が進んでいって一見すごく宮川さんがラッキーなことが続いているように見えるのですが、そのひとつひとつのチャレンジの裏には私が迷ってできないような、大胆な決断を繰り返しておられるのだなと感じました。宮川さんのようにひとつの事業を引っ張っていく力は、そういったチャレンジ精神が大切なのだと思いました。



環境係は主に、机の配置などの会場の環境づくりを担当しました。机の配置を決める際、何人で座ったら話しやすいかを考えて、4～5人で座ることに決めました。それだけでなく、スクリーンが見やすい位置関係や教室の狭さも鑑みて配置も考えました。今まで主催者側の仕事をした経験がなかったので、その考え方やノウハウが学べたことは貴重な経験になりました。

感想

5月27日から8月4日まで環境係として計9名で各テーマごとの部屋の机配置や椅子の数を考えましたが、写真だけでは発表会場の広さが分からなかったの下見に行きました。立ち入り禁止の場所や各部屋でどんな発表があるのかが参加者にもわかりやすいように、ポスターを作るように広報係に方をお願いするなどしました。



8月9日のリハーサルでは私たちが考えた机配置や椅子の数を移動させました。思っていたよりも机の数が多いなどのトラブルもありましたが、参加者が全員座れるように工夫しました。8月10日の本番では、机の数や椅子の数が足りないなどの問題はなく、リハーサル通りに机配置ができました。机を動かすことに関しては、私たち環境係だけでなく、他の係の人たちも手伝ってくれたのでスムーズにできたと思います。

環境係のメンバーだけでなく、全ての係がいるからこそ、この国際会議は成功したと思っています。

記録係



事前準備について

準備したもの

- ・記録用紙のテンプレートの作成
- ・ゴミ箱に設置する”ゴミ箱使用禁止”の作成

準備したこと

- ・誰がどこの部屋で記録をするのかを決める
- ・準備中とリハーサル中の写真撮影担当決め



当日の動き

- ・開会式 写真撮影
- ・基調講演 写真撮影、メモ
- ・各分科会 写真係→6つの分科会を写真を撮ってまわる
記録係→自分が担当する分科会の質疑応答のメモをとる
- ・提言作成委員会 写真撮影、メモ

提言作成委員会

〇LGBTQ+

日本では海外よりも理解が進んでいないので、もっと学ぶべき

〇3R

マイボトルやエコバックなど、身近なものの使い方を考え直す

〇フードロス

ドギーバックや美味しい食べ方など知識を増やそう! 食べられる量を買ったり、スーパーでは手前どりをする



「知識×思いやり=変化」

～自分が変われば世界が変わる～

反省点

- ・ディスカッション後の意見発表が英語で行われたので聞き取るのが難しかった
→その分、より集中してできたと思う
- ・事前の下見でゴミ箱の数え間違えがあった
- ・いつもと違う場所に対応するのが難しかった
→しっかり余裕を持って行動することが大切
- ・ゴミ箱の禁止ポスターの貼り方に関して担当者どうし意思疎通ができていなかった

良かった点

- ・最初は係内でうまく話がまとまらず、話が進みにくかったが、準備会を重ねるにつれ、意見交換ができるようになり楽しめた
- ・他の係としっかりコミュニケーションをとり、連携できた
- ・役割分担をして基調講演や提言作成委員会のメモをしっかりとることができた
- ・記録の写真係は、講演やディスカッションの様子をずっと歩き回って撮った(全部で700~800枚ほど)
- ・ゴミ箱にゴミを捨てないようにどうするか、など様々なことで意見を出し、話し合えた
- ・天候など色々な場合を考えて、準備できた

広報係



前日までの仕事

- ・ポスター作成
- ・当日のリーフレット作成

ポスター作成

成果

- ・ポスターを見てオンラインや現地で参加して下さった方がいた
- ・県内だけでなく県外にもお知らせすることができた

課題

- ・完成がギリギリになってしまい最後バタバタしてした
- ・各校で国際会議の宣伝をもっとするべきだった

リーフレット作成

成果

- ・係のメンバーで分担して、全体会用と分科会用を作成した
- ・どのような講演や発表があるかをみんなに紹介する役目を果たすことができた
- ・分科会では、発表内容の要約を配布し、発表内容を理解する補助となった

課題

- ・前日までに印刷を終えなければならず、作成にかかる時間を見越してもっと計画的にできればよかった
- ・たくさんの分量があったので、誰が何をするのか、よりはっきりさせるべきだった

当日の仕事

分科会のサポート

ディスカッションの参加、記録のサポート

第2回
高校生国際会議
in NARA

International Conference for SHS Students



蒼い地球を
未来につなぐ



グローバルが
生み出す力



先人の知恵を
未来へ届ける



みんなで作る
笑顔のコミュニティ



いのちの輝きを
未来に伝える



みんなちがうから
みんなで支え合う

参加申し込みはこちらから



奈良県内外問わずたくさんの
参加をお待ちしています

基調講演

くまもと☆

農家ハンター

宮川将人氏

2023年

8月10日(木)

奈良学園大学 2号館

主催：奈良県教育委員会、奈良県立国際高等学校、高校生運営委員会

共催：国連世界観光機関（UNWTO）駐日事務所

問い合わせ：高校の特色づくり推進課 高校教育指導係

TEL 0742-27-9851 FAX 0742-23-4312

2023

8/10

(THURS)

第2回 高校生国際会議

いのちの輝きを未来に伝える

1. 奈良県立国際高校
2. Sejong Global High School
3. Princess Chulabhorn Science High School
4. Princess Chulabhorn Science High School
5. Princess Chulabhorn Science High School

1. HOW NOT TO WASTE THE LIVES OF WILD ANIMALS

Gibier is a French word which means “wild animal.” The presentation introduces what gibier is, it's many benefits, and rising popularity. By working together with people from their local community, two high school students aim to introduce gibier to Nara prefecture. Through workshops and volunteer activities, they hope that more people will eat gibier which will positively impact the environment.

1. 野生動物の命を無駄にしない方法

ジビエとは、フランス語で“野生の動物”という意味です。プレゼンテーションではジビエとは何か、その多くの利点、そして高まる人気について紹介します。2人の高校生が地域の人々と協力して、ジビエを奈良県に紹介することを目指しています。研修会やボランティア活動を通して、より多くの人にジビエを食べてもらい、それが環境に良い影響を与えることを願っています。

2. PAINTING THE PORTRAIT OF SYMBIOSIS: ART AND HUMANITY

To cope with the increasingly serious environmental issues, symbiosis is the key. We chose art as a means to cultivate awareness of symbiosis among people. This presentation will explore examples of symbiotic art and, finally, introduce a self-planned exhibition.

2. 共生の肖像を描く:人間と芸術

ますます深刻になる環境問題に対処するためには、共生が鍵です。私たちは人々の間で共生の意識を育てる手段として芸術を選びました。この発表は、共生の芸術の例を探り、最後に自分たちの自主企画展の紹介をします。



高校生国際会議(司会)

目 標

会議の進行をスムーズに行う

苦労したこと

会場で流す音楽の選抜
司会で話す英語の発音

新たな発見

多くの人と
コミュニケーションがとれた

課 題

空き時間にうまく会場を
盛り上げきれなかった



次回への提案

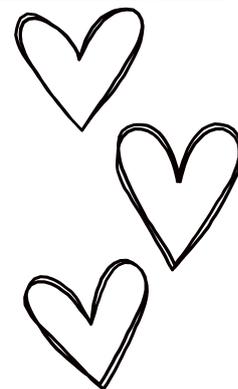
もっと日本語や英語を交え、
空き時間にゲームをするなど
交流の時間を持てるとよかった

感 想

2回目の国際会議でしたが、前回より参加者も増え、それぞれが役割を果たし、この会議を成功に導くことができました。
課題解決に向けて議論できてよかったです。

普段他校の人や海外の人と関わるのがなかなかないので、この会に参加したことで新たに自分の課題を見つけることができました。
司会としてどう言えば伝わりやすいかなど考えながら話すこともでき、いい経験になりました。

受付・案内係

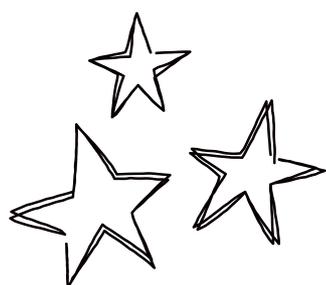


よかったこと

- ・ 明るい気持ちで迎えることができた
- ・ 立ち入り禁止の場所をわかりやすく示すことができた
- ・ 時間を確認しながら、それぞれの仕事を達成できた
- ・ 各会場が行われる場所を示した地図を階段付近に置くことで、皆が迷わず向かえるようにできた
- ・ 会場が明るく、わかりやすくなるようなポスターのデザインを考えられた
- ・ 階段付近では掲示に加え、人も立つことで、質問に答えるなど臨機応変に対応できた

改善点

- ・ 座席表の掲示を2ヶ所設けたが、思った以上に混雑してしまいスムーズに誘導できなかつたので、座席表の掲示を増やすべきだった
- ・ 前日の来賓の方を案内する経路の確認だけでなく、お茶を出すタイミングも確認すべきだった



受付・案内係

学んだこと

- ・ 事前に準備していてもうまくいかないこともあるから臨機応変に動くことが大事だとわかった
- ・ みなさんが帰る際に「ありがとうございました」と挨拶をすると、「おつかれさまでした」と声をかけてもらえて、達成感を感じることができた
- ・ このように大勢の人が集まる会議では参加者が混雑している時に、自分が場所の配置を覚えて大きな声で誘導した方がいいと思った。
- ・ 暑い中階段での移動は大変だった👉
- ・ みんなで協力して声をかけあうことができ1人で抱え込まずお互いに頼ることの大切を学んだ



3.2.4.e 論文作成

I. 論文形式

1. はじめに …… 研究動機
2. 序論 …… 目的、先行研究、資料と方法
3. 本論 …… 結果と分析・考察
4. 結論 …… まとめ（要約）、今後の課題
5. おわりに …… 自分自身の変容、これからの生き方など
6. 参考文献・出典・引用

II. 各章を書かせるねらい

・「はじめに・おわりに」は、通常の論文では作成しない部分であるが、国際高校では生徒自身が探究を通じてどのように変容したか、振り返らせることを重視しているため、このような項目を設けた。また、ファミリー（グループ）協働研究を行っているゼミもあり、メンバー個々の成長を振り返らせるねらいもある。

・「序論・本論・結論」については、一般的な論文に必要なリサーチクエスションから研究方法をふまえた探究の手順に準じている。なお、国際高校における探究活動は、生徒個人がそれぞれその後のキャリアにおいても継続していくことを念頭に置いているため、「結論」部分では、今後取り組んでいく予定のことを明確に記述させた。

III. ファイル管理・提出方法について

- ・ Google classroom を活用し、Google ドキュメントにより論文を作成させる。
- ・ 各ゼミのクラスルーム上で課題としてテンプレートを送信し、編集および提出をさせる。
- ・ クラスルーム上で管理することでオンライン上で、添削や助言を行うことができる。

IV. 論文の公開について

・ 生徒の卒業論文については、Web ページ（校内及び関係者への限定公開）で、オンラインで閲覧できるようにしている。また、冊子の卒業論文は図書館でも閲覧できる。在校生は卒業論文を探究活動の参考にし、自身の活動に利用している。

V. 成果と次年度以降への課題

[成果]

- ・ 全員の生徒が個人やファミリー単位での活動内容を論文としてまとめることが出来た。
- ・ 昨年度の反省を活かし、全体として計画的に論文作成に取り組めた。
- ・ 事前指導などを通して、生徒に論文の形式や決まりを学ばせることができた。

[課題]

・ 各ゼミで担当者が生徒の書いた論文のチェックを行っていたが、負担が非常に大きかったように思われる。個人探究ではなくグループでの探究にするなど、次年度以降の負担軽減に向けて、検討が必要である。

・ 生徒の基本的な文章能力の向上が必要である。最終年度に論文作成を目標とするのであれば、全ての教科を通して書く力の向上に取り組むたい。

3.2.5 グローバル探究の評価

本校の教育目標は、探究力、創造力、協働力、寛容さ、挑戦力、キャリアデザイン力の6つの力を身につけることを教育目標としており、これら6つの力を身につけるためには、課題探究型の学習を進めていくことが必要であると考えます。そのため、学校設定科目「グローバル探究」（全学年週3単位必修）を教育課程の中心に据え、学校全体で取り組みを進めている。「グローバル探究」では、生徒自身と教員が共に毎時間の振り返りを行うことで生徒の成長を見とる。生徒は6つの力を常に意識できるよう、デイリーチェックシートの項目を毎授業ごとに確認し、その時間の自分自身のふりかえりをメモに残す。月に一度、担当者はチェックシートのフィードバックを行う。また、年に6回（学期の始めと終わり）成長チェックシートで生徒が6つの力のうち、今の自分ができている力は何かをチェックする。

【チェックシート】

教員は「評価」とは呼ばず、チェックシートという名称で統一している。生徒が「評価」を意識しすぎず、自分自身の成長を見とれること、チェックの数が増えることによるこびを感じられることを意識した。また、このチェックシートはACCU「変容を捉え、変容につながる評価のカタチ」

(<https://www.unesco-school.mext.go.jp/wp-content/uploads/2021/03/henyou2021.pdf>) を参考に、ESDの視点と6つの力を統合させた形で作成した。

(https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/jissen10_senior.pdf)

ゼミ		学年・クラス・番号	名前				
		__年__組__番					
2021年度「グローバル探究」セルフチェックシート 実施月__月__日							
1. 【今月の目標】グローバル探究で意識して活動したい力を○で囲みましょう（いくつでもOK）							
「活動チェックシート」や前月のセルフチェックシートを参照しながら考えてみましょう							
探究力 知識を活用し課題を解決するか	創造力 新たなアイデアを生み出すか	協働力 協力・協働して互いに高め合うか	寛容さ 文化や考えの違いを大切にできるか	挑戦力 試練を克服し前進するか	キャリアデザイン力 進路に向けて行動を起こすか		
2. 【各時間における振り返り】自分が発揮できたと思う力とその具体的な場面を書きましょう							
日付	曜日	自分の記録（発揮できた力には○をつける、いくつでもOK）					
月 日		探	創	協	寛	挑	キ
		発揮できた力					
		どんな場面で					
		何ができたか					
		その時感じたことは					
月 日		探	創	協	寛	挑	キ
		発揮できた力					
		どんな場面で					
		何ができたか					
		その時感じたことは					
月 日		探	創	協	寛	挑	キ
		発揮できた力					
		どんな場面で					
		何ができたか					
		その時感じたことは					

2021年度 グローバル探究 成長セルフチェックシート		年 組 番号	名前	ゼミ	
ルーブリック		グローバル探究の授業の中で、自分ができたと感じる活動にチェックを入れましょう			
身に付いたか	レベル	レベル内容			チェック数
探究力	1	生活や社会について考え、改善したほうが良いと考えていることがある	<input type="checkbox"/> 積極的に考え、動くことができた	<input type="checkbox"/> 筋道を立てて考えることができた	/8
	2	地域や社会で解決したい課題を見つけて、その原因や背景を考察することができる	<input type="checkbox"/> 根拠を捉え、考えることができた	<input type="checkbox"/> 自分にできることを考え、共有し、伝えることができた	
	3	地域や社会のよりよい未来に向けて、改善すべき課題を見つけ、その原因を追求して、未来のあるべき姿を考察することができる	<input type="checkbox"/> その時だけのことを考えるのではなく、長期的に物事を捉え、問題解決ができた	<input type="checkbox"/> 未来のあるべき姿を思い描くことができた	
	4	グローバルな視点から、世界的な課題の問題点やより良い未来の理想的な姿を示し、その実行可能性について検討することができる	<input type="checkbox"/> 原因を分析、情報を正確に理解し、適切に対処するためのより良い改善策を提案することができた	<input type="checkbox"/> 主張だけでなく、その根拠となる理由を明確に相手に伝えることができた	
創造力	1	与えられた情報を整理することができる	<input type="checkbox"/> 情報を取捨選択できた(倫理観を持って情報を取り扱うことができた)	<input type="checkbox"/> 情報を読み取ることができた	/8
	2	地域や社会の課題について情報を集め、分析・評価しながら改善すべき点を提示できる	<input type="checkbox"/> ささまざまなものの関連性を理解できた	<input type="checkbox"/> 得た情報を生かすことができた	
	3	地域や社会の課題やその解決のための内容を批判的に思考し、根拠を挙げ、解決に向けた案を提示することができる	<input type="checkbox"/> 一つの問題に含まれる多様な要素のつながりを理解できた	<input type="checkbox"/> 与えられた課題だけでなく、自分の課題として捉えることができた	
	4	自己の考えに固執することなく、グローバルな視点から創造的に考え、斬新なアイデアを生み出すことができる	<input type="checkbox"/> すでにあるものに対する知識を得た上で、自らの研究や調査から自分のアイデアを作り出すことができた	<input type="checkbox"/> 新しい価値や考えを生み出すこと(既存の知識を活かし、組み合わせること)ができた	
協働力	1	他者と積極的にコミュニケーションをとることができる	<input type="checkbox"/> 自分の考えを持ち、伝え合うことができた	<input type="checkbox"/> 自分の考えを勇気をもって発言できた	/8
	2	目標達成のために、集団の中で他者を助けたり、支援したりできる	<input type="checkbox"/> 安心・安全の場を作り出すことができた	<input type="checkbox"/> 自分の気づきを他者へ反映できた	
	3	課題解決に向け、集団の中で自己の責任を果たしながら、他者と協力して行動することができる	<input type="checkbox"/> 自分の役割に責任をもって取り組むことができた	<input type="checkbox"/> 視野を広く持ち、さまざまな考え方をまとめていくことができた	
	4	課題解決に向け、対話を通して、自己の主張や他者の意見を調整し、集団として士気を高めることができる	<input type="checkbox"/> 組織内(ファミリーやコミュニティ)での役割を理解し、組織を活性化させることができた	<input type="checkbox"/> 多様性の中から共通点を見出し、前に進むことができた	
寛容さ	1	相手の立場や考えを気づかせる	<input type="checkbox"/> 相手の気持ちに寄り添いながら話を聞くことができた	<input type="checkbox"/> 自分と他者の違いを認識することができた	/8
	2	相手の立場や考えを常に想像し、共感することができる	<input type="checkbox"/> 他者の想いを汲み取る共感することができた	<input type="checkbox"/> 共感しようとする意欲と態度を持つことができた	
	3	文化や考えの違いを相手にもあたたく接して、他者の考えを尊重し、違いを認められることができる	<input type="checkbox"/> 自分の意見を表現し、相手の意見を受け入れることができた	<input type="checkbox"/> 他者を認めることができた	
	4	自分とは違う意見や考え、経験と共有し、社会をより良くしていくための重要なものと考えられることができる	<input type="checkbox"/> 意見の違いや立場の違いを理解し、場面に応じた適切な対応を取ることができた	<input type="checkbox"/> 寛容な心や思いやり、文化や価値観を理解したうえで、違いを受け入れることができた	

ルーブリック		グローバル探究の授業の中で、自分ができたと感じる活動にチェックを入れましょう			チェック数
身に付いたか	レベル	レベル内容			
挑戦力	1	与えられた指示に従い、自分の作業をすることができる	<input type="checkbox"/> 日常の小さな実践を積み重ねていくことができた	<input type="checkbox"/> 自分で考えて判断できた	/8
	2	指示を持たず、課題を自ら発見し、取り組むことができる	<input type="checkbox"/> 疑問(問い)を醸成し、問い続けていくことができた	<input type="checkbox"/> 判断するために複数の情報から取捨選択し、自らの意思や決断に責任を持つことができた	
	3	課題に取り組む中で、失敗しても強い意志をもって、新たな挑戦を続けることができる	<input type="checkbox"/> 困難なことがあっても回復していくとする力(レジリエンス)を持つことができた	<input type="checkbox"/> どんな環境でも課題を見つけ、解決に向けて取り組むことができた	
	4	高い目標や志をもち、困難なことに向き合いながら、意欲的・積極的・継続的に取り組むことができる	<input type="checkbox"/> 成功も失敗も、最初から最後まで全て受け入れ、自信をもって発信することができた	<input type="checkbox"/> 課題を解決する際に、新たな問題にも気づくことができた	
キャリアデザイン力	1	自己の適性について考えることができる	<input type="checkbox"/> 客観的に自分を捉えることができた	<input type="checkbox"/> 自分がわかっているかどうかを認識できる	/8
	2	自己の適性を理解し、進路に関する情報を自ら集めることができる	<input type="checkbox"/> 自分を見つめ、向き合う課題を認識して、自分の気持ちをコントロールできた	<input type="checkbox"/> 持続可能なライフスタイルを自分で考えることができた	
	3	希望する進路を実現するために、自己が直面している課題を把握することができる	<input type="checkbox"/> 自分と進路とつなげ、課題の要素を含めて検討できた	<input type="checkbox"/> 自分の言動を客観視でき、自分で改善することができた	
	4	希望する進路を実現するための課題を的確に把握し、解決のために行動を起こすことができる	<input type="checkbox"/> 課題解決のアイデアやプランを持ち、将来実行しようとする計画を立てることができた	<input type="checkbox"/> 将来の自分のキャリアに経験や考えを反映して言うことができた	
+αの力	-		<input checked="" type="checkbox"/>	今の自分が立っているところは世界と地続きであることを知っている	*
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	一人ひとりが大切な存在であることを実感できている	*
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	不平等な状態に気がつくことができる	*
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	自分と他人の人権を通した公平性の理解がある	*
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	国際社会とのつながりを意識できる	*
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	その人らしく生きていくための価値、平和を守り続ける大切さを理解している	*
	-		<input checked="" type="checkbox"/>	「公平」や「平等」に関する歴史的事象や現代社会の課題への理解ができている	*
-		<input checked="" type="checkbox"/>	ころなど、目に見えないものを想像することができる	*	
-		<input checked="" type="checkbox"/>	「公平」や「平等」に関する知識を得た後に考え、議論していくことができる力がある	*	

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

3.2.6 世界の言語 I

a 全体計画（シラバス）

「世界の言語 I」では、1年次に中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の5カ国語を「聞く」「話す」言語活動を中心に8回ずつ学習する。

英語以外の第二外国語の学習は、複数の言語やそれを使用する多様な他者への気づきと寛容な態度の形成、複数言語の比較によるメタ言語能力（自他の言語の相対性、類似性、相違性などを意識化、言語化する能力）の向上、個人の複言語能力の言語レパートリーの拡大といった成果が期待される。

1年次の「世界の言語 I」では、5カ国語を少しずつ学ぶことで、その言語の魅力や楽しさを知り、2年次で学習する言語を決定するためのきっかけとすることを目的としている。考査は実施せず、評価も点数ではなく、文章で行う。言語の違いや特徴はあるが、どの言語においても共通する学習内容は①言語の歴史、②使用地域、③発音・文法の特徴、④数字、⑤文字、⑥方言である。授業の構成は言語によって若干異なるが、概ね以下の通りである。

《授業の構成》

	内容	指導者
第1週（2時間）	挨拶や日常会話	言語担当教員
第2週（2時間）	自己紹介などの対話	言語担当教員
第3週（2時間）	身近な内容について話す	言語担当教員
第4週（2時間）	実践 実際に会話をしてみる 文化について知る	言語担当教員＋ネイティブ教員

《年間スケジュール》

各言語は8時間（週2時間×4週間）実施。最終日はネイティブ教員とのTT

	1組	2組A	2組B	3組A	3組B
4/19	今からの言語の勉強について(奈良教育大学吉村教授)				
4/26-5/31	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語
6/7-7/7	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語
9/13-10/6	ドイツ語	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語
10/11-11/10	スペイン語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語
11/15-12/8	中国語	韓国語	スペイン語	フランス語	ドイツ語
12/13	これまでの振り返りと言語の選択について(奈良教育大学吉村教授)				
1/10	手話講座				
1/12	振り返りと「Language Portrait」				

1/17, 1/19, 1/24	韓国・韓国語特別講座
2/2, 2/7, 2/9, 2/14	各言語の文化交流: 学ぶ・する・教える
2/28	選択言語オリエンテーション
3/6	パネルディスカッション

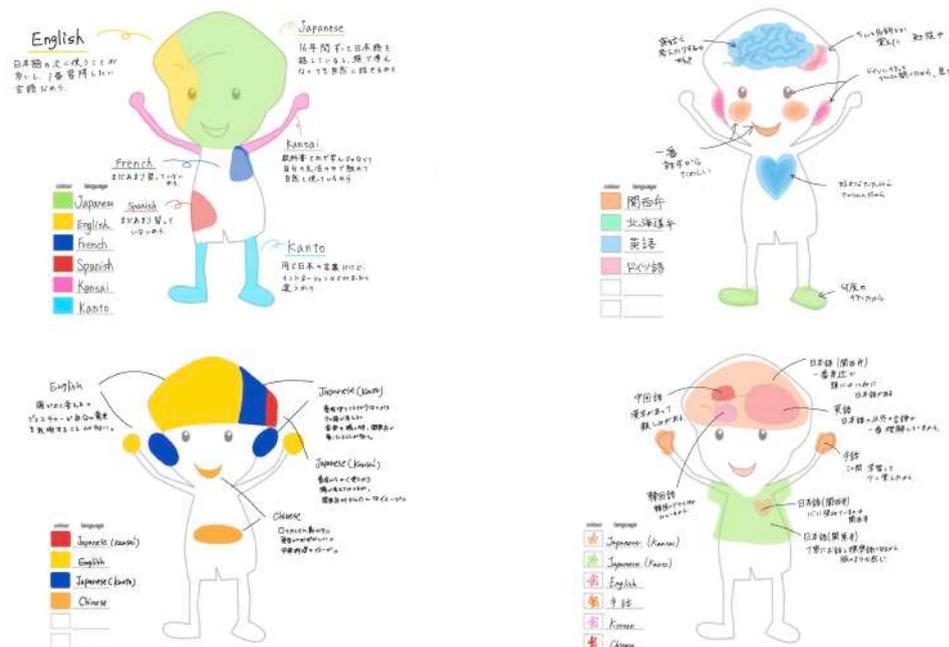
b. 3学期の課題研究と振り返り

奈良教育大学 吉村雅仁教授による講義（4月19日、12月13日）

奈良教育大学吉村教授にお越しいただき、全2回の講義を受けた。まず、初めの4月の授業では、言語と外国語学習の特徴が紹介された。5つの言語について学んだ後、日本と世界の言語についての今後の考察が示された。

最後の12月の授業では、生徒たちに言語学習について気づいたことや、1年間で学習した5つの言語について振り返りを行った。また、2年生で引き続き学習する言語を選択する際の今後の留意点についても話し合われた。個人の振り返りとして、生徒が自分の中にもっている「ことばイメージ」を考え、自分自身の*Language Portrait*を作成した。

*Language Portrait*の「ことばイメージ」



各言語の文化交流（2月2日、7日、9日、14日）

「外国語が話されている国・地域の文化についての理解を深める」を目的とし、文化活動の「学ぶ・する・教える」ことをした。

文化活動を学ぶ時は日本人教員とネイティブ教員の2名で指導にあたった。生徒は聞いたり、見たりするだけでなく、実際に体験した。4回目の授業では、それぞれの言語グループが学んだことを教え合うことで、より言語や文化についての知識が深まったと考えられる。

各言語の文化交流活動



パネルディスカッション（3月6日）

今年度最後の世界の言語授業では、ネイティブ教員を含む、世界の言語担当教員が、それぞれの言語学習経験や日本での多言語話者としての生活について発表した。これは、生徒が外国語使用者としての将来について考える機会となった。

c. 手話講座

1月10日に、奈良県立ろう学校の小林由季先生にお越しいただき、1年生全員を対象に手話講座を行った。世界の言語では、5つの外国語を学んだが、「手話も一つの言語である」という観点から、言語に対する理解を深めるのがねらいである。

まず、聴覚障害についてのお話をしていただいた。聴覚障害者が生活の中で困っていること、どのような工夫をしているか等について話していただき、会話のためには手話が必要であることをお話いただいた。

そして、実際に手話を体験し、基本的な挨拶から始まり、数字や誕生日の表し方を学習した。

d. 韓国・韓国語特別講座

1月17日、19日、24日に、奈良韓国教育院の方と韓国人の留学生が韓国語教員とともに、本校初の海外スタディツアー(令和6年2学期)に向け、韓国の文化、日常生活、マナー、サバイバル韓国語などに関する特別講義を実施した。

当日、生徒たちは、韓国の最近のトレンドや社会的な期待について学んだ。また、韓国を訪問している間に使える言葉を練習することもできた。今回の韓国・韓国語特別講座が、生徒の言語や言語学習に対する興味をより一層喚起する機会となった。

3.2.7 世界の言語II

a 全体計画（シラバス）

2年次より始まる世界の言語IIでは、それぞれの生徒が選択した言語を1年間継続して学び、基礎的な「読む」「聞く」「書く」「話す」4技能のコミュニケーション能力を身につけるとともに、言語を介して他者と意見交換を交わし、積極的に関わろうとする寛容さや挑戦力を身につけることを目標としている。言語により、細かい達成度は異なるが、共通する点としてCEFRのA1相当を目標とした。各言語共通の4技能の具体的な目標は以下のとおりである。

- ・話すこと：短く、定型的な表現を使い、自分自身の身近なことについて表現する。
- ・聞くこと：身近で日常的な内容や短く簡単な質問や発言を理解する。
- ・書くこと：身近で日常的な事柄について、簡単な語句や文を書くことができる。
- ・読むこと：よく知っている単語や基本表現を用いたテキストを理解できる。

また、学習内容や評価の方法は言語により異なるが、以下にフランス語の概要を記す。

協働 力					寛容さ・挑戦力
	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと	
<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初級文法、よく使われるフレーズを使い、読み、書き、話す、聞く力の育成 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの取り組み状況 ・授業内テスト ・小テスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常会話 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の会話練習(観察) ・インタビューテスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室フランス語 ・身近な話題の聞き方 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・インタビューテスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身や身近なものを紹介する文 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・ワークシートの取り組み状況 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書で扱っている、日常的なテーマの会話文の読み取り <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスメートと日常的なテーマで意見交換をし、多様な意見があることを理解する。 ・フランス語圏の文化、価値観を学ぶ <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の取り組み(観察) ・ワークシートへの取り組み状況

3.2.7.b 言語ごとの学び合い授業

2年生の世界の言語IIでは、それぞれの言語に分かれて1年弱、言語や言語圏の文化、文法、音声など、より詳しく実践的に学んだ。前述のとおり、複数の言語を学ぶことはそれを使用する多様な他者への気づきと寛容な態度の形成、複数言語の比較によるメタ言語能力（自他の言語の相対性、類似性、相違性、などを意識化、言語化する能力）の向上、個人の複言語能力の言語レパートリーの拡大といった成果が期待される。

1年間の各言語の学習を振り返り、他の言語を選択している生徒に学びを共有することで、より深い外国語学習の習熟を目指すために、「多言語学び合い交流会」を3学期に実施した。

2月9日（金）と2月14日（水）の2日間で、各言語でクラスごとにグループを作成した。今まで学習してきたことを振り返り、自分が選択した言語の文法、発音、表現、文化、日本語や英語との類似点や相違点など興味深い点や他の言語選択者に伝えたい魅力を考えさせた。また、1グループ5分間の短いワークショップではあるが、ただ単に説明で終わることなく、必要に応じてスライドやペアワーク、グループワークなどを交え、他の人が考えたり、参加者同士でやりとりができる内容にするよう促した。

2月28日（水）に、各クラスに戻り、他の言語を学んでいる生徒に発表を行った。

3年生では選択制になるため、すべての生徒が履修するわけではないが、2年間の中で、「世界の言語」は単に第2外国語の言語能力を向上させるだけでなく、異文化理解や寛容さ・挑戦力など国際高校が目指す、生徒に身につけてほしい能力の向上に貢献できたと考える。

3.2.8 世界の言語III

3年次より始まる世界の言語IIIでは、2年次にそれぞれの生徒が選択した言語を継続して学び、基礎的な「読む」「聞く」「書く」「話す」4技能のコミュニケーション能力を身につけるとともに、言語を介して他者と意見交換を交わし、積極的に関わろうとする寛容さや挑戦力を身につけることを目標としている。言語により、細かい達成度は異なるが、共通する点としてCEFRのA1～A2相当を目標とした。各言語共通の4技能の具体的な目標は以下のとおりである。

- ・話すこと：①趣味・部活動などのなじみのあるトピックに関してやりとりができる。
②身近な事柄について複数の文で意見を言うことができる。
- ・聞くこと：身の回りの事柄に関連した内容や要点を理解することができる。
- ・書くこと：日常的・個人的な内容について手紙、メモ、メッセージなどを書くことができる。
- ・読むこと：簡単な語を用いて書かれた人物描写、場所の説明、文化の紹介などの説明文を理解することができる。

3年次では、履修する生徒数も2年次より少なくなるため、ペアワークやグループワークなど、より実践的な活動を行うことができた。今年度は3年生でも積極的に海外の高校とのオンライン交流を実施し、普段の授業で学んだことを実践する機会に恵まれた。

学習内容や評価の方法は言語により異なるが、以下にスペイン語の概要を記す。

協働力					寛容さ・挑戦力
	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと	
<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初級文法、よく使われるフレーズを使い、読み、書き、話す、聞く力の育成 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの取り組み状況 ・授業内テスト ・小テスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常会話 ・プレゼンテーション <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の会話練習(観察) ・インタビューテスト ・プレゼンテーション 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室スペイン語 ・身近な話題の聞き方 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・インタビューテスト 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身や身近なものを紹介する文 <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト ・ワークシートの取り組み状況 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書で扱っている、日常的なテーマの会話文の読み取り <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内テスト <p>【評価の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中の取り組み(観察) ・ワークシートへの取り組み状況 	<p>【学習内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスメートと日常的なテーマで意見交換をし、多様な意見があることを理解する。 ・スペイン語圏の文化、言語(方言)、価値観を学ぶ

3.2.9 Immersion Science

a. 学習到達目標

英語による「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動を通して、自然の事物・現象に関わり、科学と数学の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行い、自然の事物・現象を科学的に探究し、根拠を示しながら考えや判断についての確かな説明をして他に理解を得るために必要な資質・能力を育成する。

b. 学習方法

- 実験・観察を行い、その結果について英語でプレゼンテーション、およびディスカッションをする。内容をまとめて英語で発表することで、海外大学で活用できる思考力と表現力を身につける。
- 英文で書かれた学術論文を読み、その内容を理解する。また、論文内に記された引用文献を読むことで、周辺の知識も得る。読解した学術論文の内容をスライドにまとめ、英語で発表、質疑応答をおこなうことで、科学の見方、考え方を養う。
- 海外の講義動画を視聴し、その内容についてプレゼンテーション、ディスカッションを行うことで、海外大学で活用できるコミュニケーション力を身につける。

c. 年間学習内容

1 学期	Orientation	Immersion Scienceの学習内容の説明。科学を英語で学ぶ意義とは。
	Find Your wonder	校内を散策し、身近にある不思議を見つける。文献を検索して見つけた疑問に対する答えを調べ、発表する。
	How to use microscope	顕微鏡の使い方を英語でプレゼンテーションする。また、そのプレゼンテーションを中学生に行い、プレゼンテーションに対するアンケートも実施した。
	TED talk	各自が興味のあるTED talkの動画を視聴して調査し、その成果をプレゼンテーション、およびディスカッションする。
2 学期	Find Your wonder2	校内を散策し、身近にある不思議を見つける。文献を検索して内容を調べ、発表する。実際にデータを用いて説明することを心がける。
	Let's read english paper.	「Science in school」というサイトから各自が興味を持ったpaperを読んで調査し、その結果を全員にプレゼンテーションする。
	brain	英語で脳の構造について学んだのち、鶏の頭部水煮を解剖して脳を観察した。さらに、実験内容や気づいたこと、さらに脳に関して感じた疑問を調査した結果について英語でプレゼンテーションした。
	Self-Check	2学期までの学習内容を総括し、自分の取り組みを振り返った。
3 学期	Free Presentation	1年間学習してきた感じたことなどを各自プレゼンテーションした。

d. 生徒の感想

- 普段のただ座って話を聞くスタイルではなく、実験やグループでの話し合いが多かったので楽しく学べました。
- メンバーと意見交換しながら、自発的に学習できて良かった。
- プレゼンテーションを頻繁に作成し、全て英語で行ったので、それぞれのスキルがとても向上したように感じる。

3.2.10 英語

a 概要

本校英語科ではそれぞれの学年において以下の科目を設定している。

学年	科目名	単位数	類型
第1学年	総合英語Ⅰ	4	全
	総合英語Ⅱ	2	全
第2学年	総合英語	3	全
	ディベート・ディスカッションⅠ	2	全
	EAPⅠ	2	海外進学コース
第3学年	総合英語	3	全
	ディベート・ディスカッションⅡ	2	全
	エッセイライティング	2	全
	EAPⅡ	4	海外進学コース

総合英語

1クラスを2つに分けた少人数制で授業を行っている。

4技能をバランス良く学習するために、教科書（Qskills for Success）を中心に授業を進めている。

1年生の総合英語Ⅱはネイティブ教員が担当し、プレゼンテーションやディスカッション、ライティング指導を行っている。

ディベート・ディスカッションⅠ・Ⅱ

1クラスをネイティブ教員、日本人教員のチームティーチングで指導している。

様々なテーマについての個人の経験やグローバルな話題について聞き、それに対して自分の考えを賛成・反対・提案などのスキルを使って話すことを目標としている。授業内ではディベート・ディスカッションだけでなく、個人やグループでのプレゼンテーションを行っている。

EAPⅠ・Ⅱ

海外進学コース選択者を対象として、4技能の更なる向上を目指し、海外の大学での授業の受け方やTOEFLの対策について指導している。また、様々なテーマについてディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、スピーチ、エッセイライティングなどを行い、生徒が英語でアウトプットする機会を多く設けている。

エッセイライティング

1クラスを2つに分けた少人数制で授業を行っている。

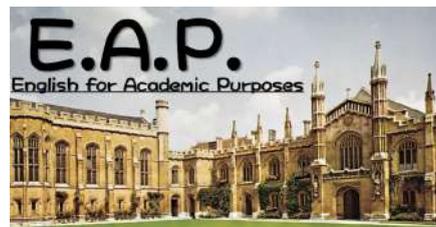
1学期には英語での論文の書き方を学び、2学期にはグローバル探究で作成した日本語の論文を英語にする指導を行った。

3.2.10.b EAP I

週2回（月曜日・水曜日） 2単位

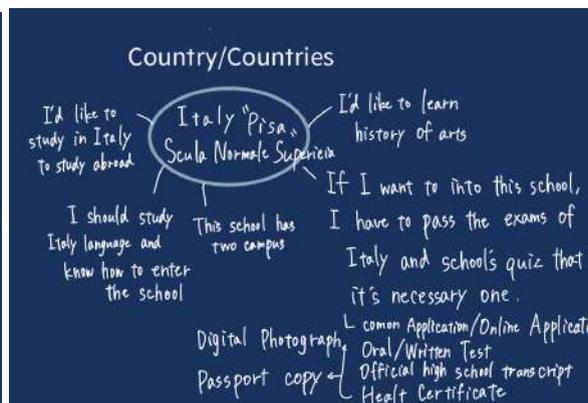
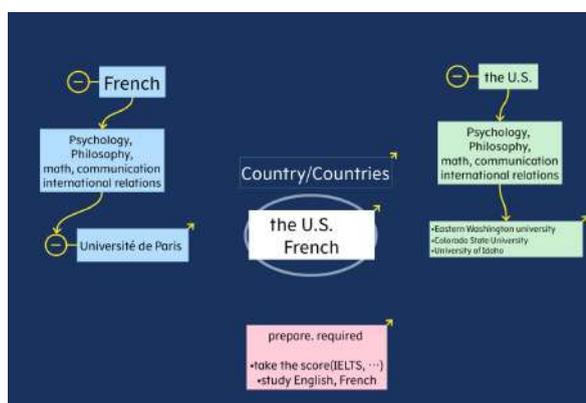
生徒人数：13人 留学生：4人 留学生：2 計：19人

EAP (English for Academic Purposes)は海外へ進学をしたい生徒のための英語コースです。一年間で英語4技能を鍛えながら、生徒はアメリカやイギリスの大学英語や授業の受け方を学びました。また、海外文化や日々の授業の中で留学生2人との交流も行いました。教科書を利用して、「心理学」、「業務」、と「メディア研究」のテーマから大学講義のリスニング、メモの書き方、ディスカッション、プチ発表（準備無しの発表）、プレゼンテーション、エッセイライティングなど幅広い活動を行いました。各単元ではプチ発表が行われます。各学期は必ず学期の最後に1つの発表と作文を提出しないといけません。



大学の雰囲気を表すため、毎回席の形は半丸を作ります。

1学期の最初の授業では、ロイロノートを使って「University Dream Chart」を作りました。つまり、海外に行く予定がなくても、理想の海外大学を検索して（検索のやり方も教えてあげた）表を作りました。大学によって判断基準も違うから生徒の内に何の準備が出来るかも考えさせられました。



1と2学期のノートブックは毎回利用しました。授業の最初の辺りで単元の話と合わせて何か動画、写真、音楽を見たり、聞いたりして、5分程度ほど感想を書いて、グループディスカッションをしました。

Objectives

In English for Academic Purposes (EAP), you will prepare yourselves for taking college level courses abroad. This course will focus on skills necessary for excelling in foreign countries such as reading comprehension, note-taking, and speaking efficiently for lectures and presentations.

Expectations

1. We will only speak English. Please do your best to use English; remember: practice makes perfect!
2. Turn in assignments on time. Late work will be rewarded only up to half points.
3. You need to have: responsibility, respect, and self-management.
4. DO NOT USE GOOGLE TRANSLATE!
5. Do not be afraid to make mistakes! You are in this class for a reason.

Required Reading

- Lecture Ready 1 | ISBN-13: 978-0194417273

Other Recommended Books

- **MLA Handbook**
ISBN-13: 978-1603283518
<https://www.amazon.co.jp/Handbook-Modern-Language-Association-America/dp/1603283515>
- **Publication Manual of the American Psychological Association: The Official Guide to Apa Style**
ISBN-13: 978-1433832161
<https://www.amazon.co.jp/Publication-Manual-American-Psychological-Association/dp/1433832161>
- **The Chicago Manual of Style, 17th Edition** ISBN-13: 978-0225267056
<https://www.amazon.co.jp/Chicago-Manual-Style-University-Press/dp/0225267056>

Assignments

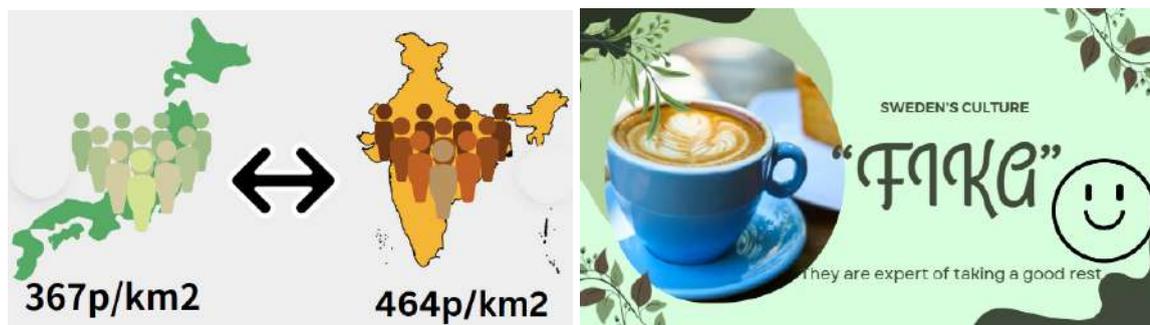
- Notebook (class notes and five minute writings)
- Ten vocabulary tests
- Ten mini-presentations
- Five Presentations
- Five Writing Assignments

Grading

- Notebook and Participation points
- Test points
- Presentation points
- Assignment points (Lois Note included)

「心理学」のテーマについて学び、大学（特に海外の大学）と高校の違いを理解し始めました。大学の自己管理は多く、大学の先生が書いたシラバスを読みながら、先生の期待を理解するために勉強しました。その後、EAPのシラバスも作って私の期待も説明しました。

単元1の最後にプチ発表では、アイコンタクト、身振り手振りなどのプレゼンテーションスキルを活用しました。プチ発表というのは準備無しでの発表なので、内容よりプレゼンテーションスキルの方に集中します。発音や言い方を間違えても、もしスキルを上手く見せてあげたら、成績は下がりにません。結果的には流暢性（フルッレンシー）は伸びてきました。単元2では、各国の時間に関する考え方を勉強しました。



生徒の発表は国の人口と国民の時間の大切さを上手く繋がりました。各国の文化も詳しく説明できました。

2学期では、単元3と4の中心は業務でした。3は革新・インノベーションについて勉強しまして、4は世界中で知られている会社でした。大学講義のリスニングを得るために、毎学期大学の先生の講義の動画を利用しました。これは教科書の材料で様々な国の先生や生徒が出て来たので、色んな発音やししゃべり方も勉強出来ました。

大学で普通のレクチャー風の授業があるだけでなく、人数が少ない授業で先生とディスカッションをすることや外でする授業もあります。大学に入って、授業の形が変わってくる可能性があるため、国際生も学びました。天気は寒くなる前に国際高校のグラウンドで授業が行われました。レイシャーシートを開いて、教科書の内容を勉強しながらディスカッションをしました。

2学期の作文と発表のテーマは2つの中から選べました。一つ目は世界中で知られている会社を1つ選んで、歴史や何でこの会社は有名やどんな革新を開発したかを研究します。二つ目は商品を選んで、どうやってこの商品は日本で売れあげられますかと説明しないといけません。



生徒が作成した会社の革新発表スライド

3学期の長さは限られていたので、プチ発表はロイロノートを使って皆の前で発表するのではなく、グループでしました。グループメンバーもアドバイスと質問を書いて、あげました。いつも通りの作文と発表も行いました。今回の話題はメディア研究なので、作文と発表のテーマは2つの中から選べました。一つ目は有名人を選んで、その方のニュースをフォローしながら情報収集して、そのニュースが適切かどうか研究して結果は作文の中で報告します。二つ目はマスコミの種類2つを選んで、2つともの良いところ、悪いところ、または似ているところを説明する作文を書きます。

3.2.10.c EAPII

EAPII (English for Academic Purposes) は、海外進学を目指す高校3年生の生徒が受講するコースです。このコースは、生徒が海外の大学に進学し、英語で授業を受ける準備をするために設計されています。クラス全体で14人の生徒が受講し、そのうち10人が女子で、4人が男子です。このコースで主に学習するスキルは、慣用表現の学習、プレゼンテーションとリスニングスキル、ノートの取り方、ディスカッションとディベートのスキル、さまざまな社会的話題に関する大学レベルの文章の読み取りです。教科書を主に使用しましたが、生徒はノート取りの活動やLoilonoteアプリを使ったスライドの送信、授業内および宿題の提出にも活用しました。

授業活動

通常の授業はウォームアップ演習、主題の紹介、実践、そしてパフォーマンスタスク（プレゼンテーション/グループディスカッション/読書タスクなど）で構成されていました。年の初めには、ウォームアップ課題は語彙や文法の演習を行うためのものでした。しかし、年が進むにつれ、留学生やIELTS、TOEFLの試験に備えて、より多くのマルチスキル活動を用意しました。これらの活動には、BBCニュースからニュースプログラムの一部を聴きながら、年間を通して身につけたスキルを用いてノートを取るものが含まれていました。その後、生徒には5分以内に小グループでディスカッションしたり、短い段落を書いたりする質問が与えられました。

評価

私は生徒の授業内および家庭内の課題を評価しました。また、ユニットの語彙や慣用句に関する短いクイズを定期的に行いました。中間評価と期末評価の一環として、個人およびグループのプレゼンテーション、エッセイ執筆課題、グループディスカッションがありました。プレゼンテーションの評価は、視線の合わせ方、長さ、ジェスチャー、トピック、および現在学んでいるユニットのスキルの使用など、主要なプレゼンテーションスキルに基づいて行いました。

主なイベント：

5月～11月	リットン高校（ニュージーランド）交流
2023～24年度	留学生との交流
10月	タイとの交流

今年はEAPIIを含む2つの主要なイベントがありました。2023年5月から11月まで、毎週金曜日にニュージーランドのリットンハイスクールと45分間の交流がありました。最初の学期はクラス全体での交流でしたが、2学期目には小グループでの交流に移りました。10月にはタイの高校との交流もありました。10名の高校生がEAPクラスに参加しました。私たちは小グループを作り、タイと日本を比較して世界の問題について話し合いました。「タイは食品の損失にどのように対処していますか？」や「タイは地震や洪水などの災害をどのように軽減していますか？」などのトピックがありました。また、私の生徒たちは日本の折り紙で折り鶴を作る方法を彼らに教えることもできました。1年を通じて、私たちはホンジュラス、イタリアからの交換留学生をクラスに迎え、ニュージーランドとの交流にはフランスからの2人の交換留学生も参加しました。これらの経験から、私の生徒たちはより独立して英語を使う自信を持つように成長しました。

Month	Topic	Contents
4月	Unit 1: Marketing	Presentation: Market a new product or new use to customers.
5月	Unit 2: Ads	idioms, round-table debate, telling a story
6月~7月	Unit 3: Work Habits	mid-term test
9月	Unit 4: Leisure Time	Writing: write about leisure time habits of your classmates, abbreviations, Presentation: group presentation about leisure activities
10月	Unit 5: Science and Pleasure: What We Eat	food pyramids, Presentation: Present a popular traditional food in your or a foreign country
11月	Unit 10: Global English	Review of strategies, Presentation: Prepare a presentation about how learning English at Kokusai HS has affected your life
12月	Review	Prepare and present an English game, write postcards to Lytton HS (NZ), お楽しみ会

Write an original sentence using 'give up'.

Give up= stop trying, stop doing
 give up (v ing)~ I'm too tired. I'll give up playing baseball after school.
 give up (noun) I'm going to give up video games.

Give up on = stop hoping that someone will get better/ stop chasing (dream, wish)
 give up on (noun) Don't give up on your idea of going to college.



3.2.10.d ガーレイノルズ名誉校長の授業

本校名誉校長のガーレイノルズ氏による特別授業を1年生全生徒を対象に行っていただいた。

日程：令和5年6月9日（金）

場所：1年各教室

参加者：本校の高校1年生

内容：プレゼンテーションの第一人者である本校名誉校長のガーレイノルズ氏に、1年生の総合英語の授業にゲストティーチャーとして来ていただいた。

聞き手に分かりやすい効果的なプレゼンテーションを行う方法について実践例を交えながらお話いただいた。

結果：生徒はビジュアルを用いたプレゼンテーションの作成方法について学ぶことができた。ガー先生から学んだプレゼンテーションスキルを用いて、グローバル探究や英語の授業におけるプレゼンテーション・発表に取り組んでいる。



3.3 授業外の学び

3.3.1 「国際教養大学イングリッシュビレッジ」

生徒：25名

概要：高校1年生と2年生の生徒が口頭英語に自信を持ち、英語スキルとプレゼンテーションスキルを磨くことである。約2日間、生徒たちは大学生のアドバイザーと集中的にトレーニングし、プログラムの3日目に行われる最終プレゼンテーションに向けて準備し、評価された。英語教育を志す13人の大学生と、海外からの5人の学生と交流する機会があった。このプログラムは、英語のグローバルな使用の重要性を強調している。

第1日目（令和6年1月19日）

訪問先：公立大学法人 国際教養大学

目的：初日の目標は、生徒たちを紹介し、アイスブレイキング活動やスポーツ、ゲームを通じてプログラムに慣れさせることだった。

活動内容：午前11時、秋田国際大学に到着した。生徒たちがバスから降り、わくわくした表情でキャンパスを歩き始めた。キャンパスに着くと、生徒たちは大学生のアドバイザーや留学生の英会話パートナーと一緒に、名前や出身地などを交換した。その後、みんなで食堂へ向かい、楽しく昼食を取った。

開会式は12時から始まった。生徒たちは大きな部屋に集まり、学校の役員や先生たちが挨拶した。開会式の後、12時25分から12時55分まで、アイスブレイクの活動が行われた。生徒たちはチームに分かれ、お互いの名前や趣味について話し合った。

13時から、「Guess What」というゲームが始まった。生徒たちはさまざまな単語を推測する手がかりを与えられ、チームで協力して答えを推測した。14時10分から15時20分まで、もう一つの活動が行われた。生徒たちは自分の英語力を試すために、相手に説明する練習をした。彼らは英語を話さなければならず、緊張した面持ちで取り組んだ。

15時30分から16時40分までの講義では、土屋教授がIPA（国際音声記号）の読み方について解説した。生徒たちは興味津々でノートを取り、新しい知識を吸収した。最後に、16時55分から17時55分まで、生徒たちはみんなでバレーボールを楽しんだ。笑い声と歓声がキャンパスに響き渡った。

17時55分、プログラムは終了した。生徒たちは満足そうな表情で、次のイベントを楽しみにしている様子だった。そして、18時55分にホテルへ移動し、一日の疲れを癒した。



第2日目（1月20日）

訪問先：公立大学法人 国際教養大学

目的：第2日目の目的は、構造化された活動に参加し、参加者のプレゼンテーションスキ

ルの習熟度向上を図るための講義を聴講することである。

活動内容：2日目には、生徒たちは午前8時15分に大学に到着した。笑顔と熱意を持って、学びと成長のもう一日に備えて、互いに挨拶した。午前8時25分から9時05分まで、生徒たちは「QuickLook」と呼ばれるツールを使って英語の勉強を助ける方法について学んだ。彼らのラップトップを開いて、指導者から共有されたヒントやトリックを熱心に吸収した。

その後、午前9時15分から10時40分まで、生徒たちは魅力的な会話を維持するためのさまざまな単語や表現をマスターすることに焦点を当てていた。ロールプレイングのシナリオで、生徒たちはフォローアップの質問をする練習をし、話者が自分の考えや経験を詳しく説明するよう促した。

次に、午前10時50分から12時まで、生徒たちは留学生との興味深いインタビューに参加した。好奇心を持って、趣味や出身地、多様なバックグラウンドについて尋ね、文化交流と相互理解を促進した。

短い昼食休憩の後、午後1時から2時まで、生徒たちは効果的なプレゼンテーションの行い方に没頭した。彼らは一連のプレゼンテーションを注意深く観察し、それぞれの強みと弱点を分析した。熟考を重ねることで、プレゼンテーションの成功に貢献する要素を特定した。

改善の旅を続けるために、午後2時10分から3時10分まで、生徒たちはプレゼンテーションスキルをさらに磨きました。アドバイザーや仲間からの指導を受けながら、スライドやデリバリーテクニックを細かく調整した。

日が進むにつれて、午後3時25分から午後7時まで、生徒たちは最終プレゼンテーションの準備に多くの時間を費やした。アドバイザーや留学生と緊密に協力しながら、スピーチを磨き、すべての詳細を最大限に洗練した。

疲れ果てながらも満足し、生徒たちは夕食のために再集合し、物語や笑いを共有した後、ホテルに戻った。



第3日目（1月21日）

訪問先：公立大学法人 国際教養大学

目的：最終日のプログラムのクライマックスは、過去3日間にわたって習得した知識を実践し、包括的な最終プレゼンテーションを行うことである。

活動内容：最終日には、生徒たちは午前8時15分に大学に到着した。その時、彼らの中には喜びや興奮が漂っており、彼らの苦勞の結晶を迎えることを心待ちにしていた。プレゼンテーションまで残りわずか75分、彼らはこの時間を賢く使い、スライドを細かく仕上げ、スピーチを繰り返し練習した。

午前9時40分から11時10分まで、待ちに待ったプレゼンテーションの時間がやってきた。それぞれのグループがステージに上がり、緊張しながらも決意を持って、自信を持って新たに身につけたスキルを披露した。一方で、他のグループのパフォーマンスを注意深く見守り、建設的なフィードバックや励ましを提供した。

時計が11時30分を指すと、感情が高まった。閉会式が始まり、生徒たちは一堂に集まり、彼らの旅を振り返った。思い出を切り取った写真、過去3日間のハイライトを捉えた感動的なビデオモンタージュが贈られた。

新たな友人たちに別れを告げた後、生徒たちは最後の昼食を楽しみ、仲間との最後のひとときを味わった。そして、13時に空港に向けて出発した。空港では、彼らは忘れられない体験を記念するためのお土産や思い出を買う短い時間があった。

伊丹空港に到着すると、生徒たちは別れを告げ、友情や成長、英語ビレッジプログラムで得た貴重な教訓の思い出を胸に刻みながら、それぞれの道を歩み始めた。



3.3.2 立命館アジア太平洋大学（APU）異文化理解研修

目的：立命館アジア太平洋大学は、学生の約半数が約90か国・地域から集まる国際的環境が特色の大学である。国際学生との交流を通し、異文化理解を深め、地球的な課題について英語で協議する力を身に付ける。

日時：令和5年11月26日（日）から11月28日（火）

場所：立命館アジア太平洋大学（大分県別府市十文字原1-1）

参加者：1年生6名 2年生12名

実施内容

- ・ APU学生団体企画
 - SDGsに関するグループワーク
- ・ 異文化理解・交流研修
 - 奈良県および国際高校の紹介
 - 国際学生の生活、出身国の文化、日本での生活などを知る
 - 質疑応答などのグループワーク
- ・ 国際交流
 - 高校生がグローバル探究で学んでいることについてグループに分かれて発表
 - グローバル探究ゼミ内容、テーマ内容発表
 - 質疑応答

研修時間内は、全て英語でコミュニケーションをとる。

生徒感想（抜粋）

・ APU研修に行く前に、1から自分の探究と学校紹介のプレゼンを作成・練習し、しっかり事前準備をすることがとても大切だと改めて感じました。自分の英語力や発表する力に自信がなかったけど、APUの学生さんにたくさん褒めて貰って質問もしてもらって、意見交換もでき、とても良い時間になりました。先輩やAPUの学生さんが優しく話しかけて下さったので、不安や緊張がほぐれて安心して発表や質問、会話ができて、とても楽しかったし充実した3日間になりました。

・ 私はAPUに行って日本ではない国の人と関わることはこんなに難しく楽しいものなんだと知りました。私は積極的に関わりにいけるタイプではなく、今回のAPUもとても悩みました。行くのは簡単でも行ってからAPUの学生さんたちとどんな会話をしたらいいのかとかAPUの国際学生の人にはどうやって話しかけたらいいのかなど不安はいっぱいありました。でもそこで一歩踏み出して今は本当に良かったと感じています。

・ 色々な国籍を持っている大学生の方達と一緒にゲームをしたり、英語でプレゼンをしてディスカッションしたりなど、国際学生と関わる楽しさをこの研修を通して学んだと思います。普段通りに生活しているとなかなか経験できないことを経験することができたので、遠かったけど行った価値は十分あったと思います。

・ 上手に英語が話せなくても、伝える努力をしっかりとしていたらちゃんと伝わるということが、2日間のAPU研修を通して知ることが出来た。また、それぞれの国によって考え方も前提知識も、当たり前だけれど英語の発音の仕方も、何もかもが違ったため、探究発表をした後の質疑応答の時間で様々な意見や色々な英語の発音、イントネーションにふれたり、自分だけでは見つけることが出来なかったプレゼンの不足点や疑問点を知ったりすることができた。

・ APUに行ったことで自分の中での選択肢が増えたと私は感じました。今後の探究活動ではさらに自分の探究に対して、私自身が持っているバックグラウンドも活かしつつ、共通点だけでなくどんな点が違うのかを違う文化、違う価値観を知りより物事を客観的にみれるように広い視野を持って自分がいる環境で自分ができるベストを尽くしたいと思います。

・一日目はコミュニケーションの難しさ、自分の英語力のなさを痛感して落ち込みましたが、活動を通してそれでも伝えようとするのが大事だと学びました。

また先輩が国際学生の方とスムーズに会話しているのを見て、英語を通して違う国の人同士でつながることはなんて素敵で楽しそうなんだろうと思いました。自分も先輩たちのようにもっと英語を喋れるようにこれから頑張りたいと思います。二日目の探究テーマ発表では自分の英語で通じるかどうか不安でしたが、発表途中で皆さんに頷いて頂いたり、良いテーマだと褒めていただいたり、フィードバックをして頂いたりして英語が通じ、伝わったことがすごく嬉しかったです。

・実際にAPUの研修に行って、たくさんの学生の方達と英語で交流したり、キャンパス内を案内してくださったり、いろいろなアクティビティを用意してくださって、とてもいい経験になりました。また、プレゼンをしている時にいろんな学生の方から「こうした方がいい」、「ここをこうすればもっと良くなる」といったことをアドバイスしてくださいました。これからのプレゼンにもしっかりと活かして行きたいと思います。正直、英語で英語のスライドを使ってプレゼンをするのが不安で仕方がなかったのですが、学生の皆さんが優しく温かく発表を聞いてくれていてとても安心しました。



3.3.3 地域とのかかわり

a 登美ヶ丘わいわいフェスタ2023

目的：

登美ヶ丘地区社会福祉協議会主催の本イベントにボランティアとして参加することで地域との関わりを深め、貢献する。主催団体を初め、地域の様々な団体、店舗、近隣の幼・小・中・大と連携することで堅固なネットワークを形成し、地域に根ざした学校を目指す。

日時：令和5年10月22日（日）10：00～15：00

場所：中登美ヶ丘近隣公園

概要：

当該イベントにおいて本校生徒はボランティアとして主に、受付、フードバンク、スマホ教室、モルック（ゲームコーナー）の各ブースの手伝いを担当した。生徒たちは、ブースの枠を越えて主体的に行動していたのが印象的であった。後述の生徒の声から分かるように、来場していた幅広い年齢層の地域住民の方と直接触れ合うことで、自分たちはこのコミュニティの一員であるという意識が芽生えたと考えられる。今後も、学校内にとどまらず、地域や社会においても、奉仕の精神を養い発揮してくれることを期待する。

また、イベントの運営側として参加することでいくつかの気づきを得られたように思う。今回得られた気づきを今後の学校生活等にいかすとともに、生徒主体でイベントを運営する際の参考になると考えられる。

参加した生徒の感想：

- ・フードバンクのブースでお世話になりました。食品を持ってきてくださったお客さんが皆優しい心を持っていらしかったのを感じ、地域のつながりの大切さを改めて知ることができました。
- ・いろんな人と関わりながらボランティアの仕事をして大変だったけれど、それ以上にやりがいや達成感があり、かつコミュニケーション力が高まったと思いました。
- ・呼び込みなどして積極的に活動すれば良かったと思いますが、少しの人でも来てくれたので助けになれて嬉しかったです。

写真1：スマホ教室



写真2：イベント補助



3.3.3.b 中学校での韓国文化体験

実施日：令和5年12月7日（木）9：50～11：40

内 容：奈良韓国教育院の協力により、本校中学生を対象に実施した。K-POPのダンス体験とテコンドー体験の2つについて、奈良韓国教育院から講師を招いて実施した。

対 象：本校中学生生徒71名

参加した生徒の感想：

- ・ K-POPやテコンドーを体験して、似ているものがあったり、かっこよかったりした。どちらも、必死に練習した人たちがいきいきとして楽しそうに優しく教えてくれたのが良かった。なぜテコンドーは足だけを使うのかを調べたいと思った。
- ・ 空手とテコンドーは似ていると思ったのですが、今回の体験で少し違うことを知れてよかったです。
- ・ 日本から近い韓国ですが、あまり韓国の文化について知ることはなかったので自分で体験することができて楽しかったです！
- ・ 私はあまり韓国に興味がなかったけれど、クラスの友達に韓国のダンスや文化が好きな子がいて、たまに話を聞くぐらいでした。けれど、今回の体験で韓国のダンスに興味を持つことができました。また韓国のダンス、文化についてクラスみんなで学びたいです！
- ・ 格闘技系をあまり知らなくて、テコンドーが韓国の文化ということを知ることができた。twiceとかの振り付けを教えているのにびっくりして実際に韓国の有名なアイドルの人と同じ環境で自分たちも練習させてもらったことが嬉しい！

写真1：K-POPダンス体験



写真2：テコンドー体験



3.3.3.c 登美ヶ丘南公民館英語サロン

日程：10月2日（土曜日）
時間：10：00～12：00
場所：登美ヶ丘南公民館
参加人数：25人

10月2日に地域との国際交流会「英語サロン」が行われました。この交流会の目的は地域と共に年齢や国籍などを問わず、住みやすい地域を作ることについて考えることであった。教員3人、国際高校生8人と留学生2人で留学生2人を中心にイタリア、ホンジュラスについてのクイズゲームを楽しんで、地域に関してディスカッションを進めました。

イベントの後半で3～4人のグループになり、世界のクイズゲームをしました。グループが順番に質問のテーマや難度を選び、全員で様々な質問に答えました。例えば、

“How many world heritage sites are there in honduras? The answer is 3.”

クイズで人と人のコミュニケーションを大事にし、世界についてより多く考えることが出来た。クイズの後、ホンジュラスやイタリアについての追加

情報や質問タイムがありました。主な質問は留学生エロズの民族服についてやイタリアの食文化についてでした。休憩時間を挟んで、イベントの後半は8人グループで「どのように住みやすいコミュニティを作るか」のテーマでディスカッションをしました。話のなかで、政治経済、外交、日本社会、高齢化社会などの視点で物事を考えることができました。普段外国人と関わることはない人や違う年齢で交流出来ない方もいましたので意見を尊重し、お互い意見交換をすることができました。地域住民から「ホンジュラスという国の人に会ったからホンジュラスに対してもっと関心があった」などの声が出ました。来年オープンスクールとして地域の方々とのコミュニケーションを増やすのは今後の課題と考えます。



交流会の計画

- 1 始まりの挨拶
- 2 留学生の自己紹介
- 3 世界のクイズゲーム
- 4 休憩
- 5 ディスカッション
- 6 Q&A、コメント
- 7 終わりの言葉
- 8 集合写真



3.3.3.d 秋風のコンサート

社会参加活動の一環として地域の方々に観て頂くことで、教育活動について地域の方々の理解を深めていただく。また、生徒たちにも地域社会との関わりを感じさせ、地域に貢献できる人材を育成することを目的としている。さらに、生徒が自主的に企画・運営を行ってPDCAを行うことで主体的・対話的な学びを深め、達成感を育むことも目的としている。

本年は奈良育英高校吹奏楽部にも出演していただき、学校間での交流も行った。また、生徒たちからの申し出でトルコ南部地震への募金活動も行った。



本年度からは一般の観客の入場も可となり、地域の方にもご来場いただけたことで、地域の方にも生徒たちの活動を見ていただけたこと、そして、本校生徒が地域の構成員の一員として実感できたことができた。また、進行や会場設営など生徒たちが主体となって運営し、演奏会終了後にはアンケート集計や反省会も行ったことで多様な学びにつながった。

参加した生徒からは「たくさんの地域や保護者の方に来てもらえて嬉しかった」「短い準備期間でもみんなと協力できて演奏会を開催できた」「他校の高校生と一緒に演奏できて良い経験になった」といった感想があった。

本年度は都合が合わずに地域中学校との連携が行えなかったが、地域に根ざした企画として、来年度は地域の中学校や小学校、保育園や大学と連携をしていくことを目標とする。

3.3.3.e withキッチンの取り組み（生徒報告）

私たちは、2023年8月に福井県で行われた第3回高校生プレゼン甲子園に参加しました。最初は、前年度にプレゼン甲子園で優秀賞を獲得された先輩方のプレゼンテーションを見て、私達も新しいことに挑戦してみたいという軽い気持ちでエントリーをしました。4月から8月19日の決勝大会前日まで念入りに準備を行いました。今年度は「well-beingと未来社会 持続可能な幸せとは」というテーマでした。その際、「幸せ」という人によって、基準が曖昧なものを、どのようにして捉え、説得力のあるプレゼンテーションにするかにとっても苦労を感じました。そこで私達は、国、世代に関係なく、誰もが幸せになれる瞬間とはどんなときだろうと考えた時、思いついたのが「食事」でした。私達は、コロナウイルスにより、中学3年生から高校2年生の間、昼ご飯の時間を友人とほとんど顔を合わせる事無く過ごしました。この3年間は、マスク着用の義務、規制された生活、そして、黙食を通し、日々当たり前だと思っていたことがいかにして幸せなことなのかを痛感した瞬間でもありました。だからこそ、皆で一緒に食事をする共食の大切さや幸せを再度実感し、コロナウイルスや共働きなどの問題によって増えつつある孤食問題を見つめ直すため、私たちは「withキッチン」というコミュニティの提唱を行いました。プレゼン甲子園で一次審査、二次審査を通過し、決勝大会で最優秀賞及び、ベネッセコーポレーション賞をいただけたのは、決して私達のみではありません。卒業後にわざわざ学校まで来て練習にお付き合いいただいた先輩方、常に多方面からアドバイスを下さった先生方、いつも見守ってくれていた家族、アンケートに答えて下さった多くの方々といった、沢山の人の支えがあってこそ得られたものなのだと改めて感じます。

また大会でのプレゼンテーションだけにとどまらず、「withキッチン」を実現するために、地元のイベントやフェスタ等にも積極的に参加しました。10月に行われたフードバンクさん主催のイベントで出会った平城京ロータリークラブの方々からは、金銭的援助をいただけることが決まり、3月10日第1回withキッチンを行うにあたり、資金をいただくことができました。またそのイベントで繋がって下さった司会の方からは別件で大きな会の司会進行も任せていただくなど、地域との繋がりを実感できる経験をたくさん得られたと感じます。こうしてつながった皆さんのおかげで令和6年3月10日に地域の公民館で1回目のwithキッチンを実施する運びとなりました。これからもこのご縁を大事にしていきたいと思えます。これらの経験で得られたものは沢山あります。ポスターやアンケート、そしてスライドといった資料作成や、Gmailでのやり取りに加え、自分がコミュニティに対してどう貢献できるかをよく考えたり、自らが導き出した意見をしっかりとつとめた主体性が身につく、大きく成長できたと感じています。「withキッチン」が日々、人々の拠り所になる場所にするために、これからも日々、仲間と共に研鑽を積んでいきたいと思えます。



<参考>

第3回全国高校生プレゼン甲子園
<https://presen.or.jp/2023/08/5218/>
ベネッセ ウェルビーイングLab記事
<https://www.benesse.co.jp/well-being/2023/12/column2/index.html>

3.3.4 図書館の取り組み

a ビブリオバトル

目的: お薦めの本を持ち寄ってその魅力を語り合い、一番読みたい本を決める「ビブリオバトル」の実施を通して、生徒同士の交流を深め、より読書のよさを認識し読書習慣の定着を図る。

第一回ビブリオバトル 令和5年5月10日(水) 15時から

対象: 高校3年図書委員5名、本校生徒

第二回ビブリオバトル 令和5年7月3日(月) 16時から

対象: 高校2年図書委員5名、本校生徒

第三回ビブリオバトル 令和5年9月13日(水) 15時から

対象: 高校1年図書委員3名・中学1年図書委員2名、本校生徒

場所: 三回とも本校図書館で実施

チャンプ本(発表後参加者の投票によって一番読みたくなった本を決定する)

第一回『毎日が冒険』

第二回『滅びの前のシャングリラ』

第三回『ゴールデンカムイ』

当日の様子

上記の図書委員以外に有志の生徒も参加した。生徒の感想については後述する。昨年度は大阪大学の今坂朋彦氏、甲南女子大学の堀内八衣乃氏をお招きしてビブリオバトルを行った。生徒たちは昨年の学びも生かしながら、聴衆の興味を引くために工夫を凝らしていた。また全学年から発表者を設定したことによって緊張しながらも先輩の発表に耳を傾けたり、後輩の発表に積極的に質問したりする様子が見られた。本番では原稿を暗記し堂々とした振る舞いでプレゼンテーションを行っていた。ただ発表者の中には、原稿を念入りに作成したものの、それをそのまま暗唱しているだけの発表になってしまっている生徒がいた。人前で自分が推薦する本を紹介するという経験と技能についてはビブリオバトルのみに留まらず、本校の様々な教育活動の中で活かすことができると考えられる。

生徒の感想(抜粋)

- ・一人一人が話し方や問いかけなどを工夫していて、とても楽しめました。ビブリオバトルが始まってからの時間の経過がとても早かったように思います。
- ・どの発表者も本に対する思いが伝わってくる熱い発表ですごく読みたくなりました。チャンプ本を一冊しか選べなかったのが残念なくらい面白かったです。
- ・初めてのビブリオバトルでとても緊張して話したいことがまとまらなかつたりしましたが、伝えたいことをとりあえず言えてよかったです。今度またビブリオバトルをする機会があったら次は今回の反省点をいかして話したいと思います。
- ・中学生の読んでいる本が思ったより大人ですごいなと思いました。また、『氷菓』は私たちが高校生ということもあり共感できるのかなと思って読みたくなりました。
- ・中学生が自分の好きな本をしっかりと紹介できていてすごいと思いました。みんなあらすじだけではなくて、自分の好きな部分も言っていて良いと思いました。
- ・ビブリオバトルを終えて、自分は読んだことのない本ばかりだったけれど、発表を聞いてどれも読んでみたくなった。やはり本は読む人によって感想が違うのが面白かったです。今回興味をもったいくつかの本はまたゆっくり読んでみたいと思います。
- ・三年間毎年参加したが、年ごとにレベルが上がっていてとても素晴らしいと思った。ぜひこの国際高校図書委員会の文化として受け継いでほしい。



3.3.4.b 「多言語・特別コーナー」展示

昨年度と同様、「LANGUAGES OF THE WORLD」の本棚に授業で学ぶ5カ国語の本と留学生の母国語の本を購入した。その中でも検定試験対策の関連本がよく借りられ利用された。

今年度の取り組みとして、生徒の保護者にも多言語に興味を持ってもらい家で生徒とこのことについて話してほしいという目的で、「中南米 関連本」コーナーを企画した。展示期間は、保護者が来る第4回登美ヶ丘祭に合わせた。なぜ、中南米関連本にしたかという、ちょうど9月にホンジュラスから来る留学生と国立国会図書館 国際子ども図書館「中南米セット42冊」をお借りできたからである。生徒や保護者からの反応は、まず本の冊数の多さに驚かれ、どの本も魅力的な本であったことから多くの方に手に取って見ていただけた。他には保護者自身が、ブラジル人の方で子どもに本を通じて母国の料理や歌を教えている姿が見られた。スペイン語やポルトガル語で書かれた絵本があり、本の選定に役立った。

真の国際人を目指して多文化世界を生きるためには、多言語がとても重要になってくる。今後も魅力的な展示を試みたい。

「中南米 関連本」コーナー



ホンジュラスの留学生



3.3.5 GCCの取り組み

GCCはGlobal Citizens Clubの略称。3年生3名、2年生10名、1年生3名、中学生4名で活動している。

1. 国際デーの取り組み「世界コットンの日」

ユネスコスクールキャンディデート校に承認されたことから、GCCでは昨年度より国際デーを取り上げ、学校全体への周知を目指している。

10月7日「世界コットンの日」には、自分たちの着るものがどこから来ているのか、誰が作っているのか、そこに問題はないか、などを意識するキャンペーンを行った。部員が一般生徒にコットンの日を知ってもらい、コットンを持って写真撮影、それらを学校一般開放のイベント時に展示した。



2. 国際デーの取り組み「教育を攻撃から守るための国際デー」

様々な状況下で教育の機会を失われている子どもたちについて学習し、文化祭で展示を行った。また、子ども向けのクイズ等を作成し、地域のイベント「登美ヶ丘わいわいフェスタ」でもブース出店をし、小学生を対象にクイズ大会、ぬり絵缶バッジ募金を行い、世界で児童労働をなくすための活動をしている団体への募金とした。



(写真：文化祭での展示)





(写真：登美ヶ丘わいわいフェスタでの取り組み)

3. 国際デーの取り組みに引き続き、「バレンタインデーを恋人だけでなく、子どもたちも笑顔にする日に」の取り組み

カカオを生産する現場でも多くの児童労働が行われている現実を知り、子どもたちや現地の環境をよくするための取り組みを調べた。チョコレートを買う立場として、中高生の仲間たちにできることは、チョコレートを買う時に何を選択するか、考えること・できるなら買うものを選ぶことである。バレンタインデーに向け、子どもたちや女性など、現地でどのような取り組みがされているかを企業ごとに調べ、どのチョコレートを買うことで貢献できるかなどを知らせる展示を行う。

3.3.6 生徒会の取り組み（異文化理解）

生徒会役員は前期2年生3名、3年生7名、後期1年生5名、2年生4名で構成される。

他校種と交流を持ち、共生や異文化理解を身につけるため県立ろう学校と2回の交流を持った。

1回目は6月に本校で、2回目は2月にろう学校で交流会を行った。

2回とも自己紹介や授業への参加をし、両校生徒とも生き生きと交流を持っていた。その中で、お互い今まで使用していた言語では潤滑な交流は出来ず、筆談や手話といった言語を用い交流を行った。

同国内でも他言語に触れ、自身の日常で使用する言語を見つめ直す機会になった。



3.4 成果の発表

3.4.1 全国高校生プレゼン甲子園

全国高校生プレゼン甲子園は、課されたテーマについて深く考察し、高校生が自分の考えや想いを伝えることで論理的思考力、表現力、創造力等を養い、互いの発表を通してプレゼンテーションスキルの向上を目的として、2021年より開催されている。

第3回となる2023年の夏に、「Well-being(ウェルビーイング)と未来社会ー幸せとは何かー」という大会テーマのもと、本校の3年生の代表生徒3名が3分間のビデオ投稿による予選に参加した結果、全国616チームから決勝に進んだ10チームのうちの一つに選ばれた。

本選では、「みんなで創る幸福のメカニズム」を主軸にプレゼンテーションを行った。社会問題の一つとなっている「孤食」に着目し、「孤食」によって引き起こされる肉体的精神的課題について実証実験を踏まえて探究した結果を紹介した。また、孤食問題の解消のために「Withキッチン」の可能性についても言及した。「人と人をつなぐ場所」の可能性として、世代を超えた多様な人々が一つの食卓を囲む場を提供することで孤食問題の改善を目指す取り組みである。この取り組みを通して、国籍や年齢を問わず、人々が孤独を感じる事無く人や食へ関心を抱き、コミュニティを形成する手助けとすることが目的である。

このような取り組みを発表し、本選では、本校参加生徒の3名が第1位となる「最優秀賞」と「ベネッセコーポレーション賞」の二つの賞を受賞することができた。今後は、地域に根ざした「Withキッチン」を発足させていくために、フードバンク等にも協力を仰ぎつつ下級生にもこの取り組みを継承し、探究を続けていく。



3.4.2 高校生フォーラム

概要：12月17日、文部科学省・筑波大学主催の全国高校生フォーラムに参加した。2019年ぶりの対面実施で、国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた。本校からは「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミの2年生3名が参加した。「コンポスト」利用者を増やすことにより、家庭ごみの削減、ゴミを燃やすことで排出される二酸化炭素を減らしたいと取り組んでいるチームである。



日本語タイトル：「廃棄物から資源へ ～コンポストの力で～」

日本語要約

二千万トンという数字は毎年日本で排出される生ごみの量だ。日本では何十年もの間これを焼却し続けている。排出される二酸化炭素は地球温暖化の原因のひとつにもなっている。私たちは家庭でも簡単に使えるコンポストを作り、生ごみを生物に分解してもらおうと学校で実験を始めた。今後はその成果もふまえ、市や自治体と協力し、コンポストをまずは学校周辺地域から広めていきたいと考えている。

英語タイトル：“From Waste to Resource: The power of Composting”

英語要約

20 million tons of food waste is produced in Japan every year. In Japan, food waste has been incinerated for decades, and the resulting carbon dioxide emissions are contributing to global warming. To help mitigate this environmental issue, my group and I started an initiative where we made composters that can be used at home, allowing us to decompose kitchen waste with the help of microorganisms. Our goal is to be able to collaborate with other cities and municipalities to promote and spread the practice of composting.

From Waste to Resource ~The Power of Composting~

1. Why Composting?

Annual Organic Waste in Japan
7.6 Million Tons

Regarding the publication of the estimated amount of food waste, etc., and food loss in Japan (FY2020)



The CO2 Emission for Each Method

Burning	2,053 kg of CO2 / 1 ton of food waste
Composting	161 kg of CO2 / 1 ton of food waste

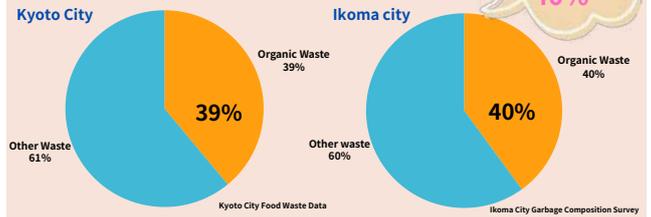
Garbage Recycling Network Japan

The Daily Amount of Organic Waste

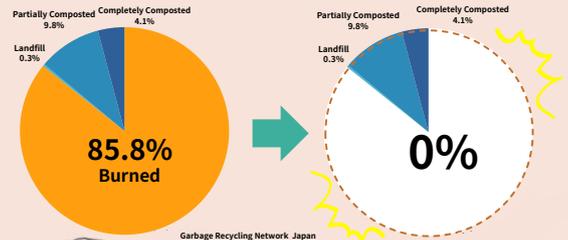
Date	11/22 (Wed)	11/23 (Thu)	11/24 (Fri)	11/25 (Sat)	11/26 (Sun)	11/27 (Mon)	11/28 (Tue)	Average
Mr.I	204g	138g	412g	290g	252g	309g	371g	282g
Ms.T	247g	200g	109g	152g	143g	102g	136g	156g
Ms.K	84g	35g	18g	24g	110g	40g	90g	57g

Our Average: 165g
Ikoma's Average: 210g
Kyoto's Average: 288g

The Proportion of Organic Waste



The Disposal Method of Organic Waste



2. How Easy Composting Is



3. Time It Takes to Decompose



4. Downside [Unable to Decompose]



5. Fake News



6. Collaborating with Local Government

"Quiello"

Ikoma City Original Compost

- Citizens can get it for **only 500 yen**
- They can be used **at a balcony**
- It has a **lid** so no need to worry about rain

HOWEVER

The number of monitors

	Portable	Embedded	Total
2020	66	9	75
2021	41	13	54
2022	83	19	100

Two Types of Quiello



7. Ongoing Project

Exhibiting "Quiello" at Our School



Holding workshops to promote Compost

References :
Ministry of the Environment. "Publication of Estimated Amounts of Food Waste, etc. and Food Losses in Japan (FY 2020)." Apr. 2021. <https://www.env.go.jp/press/109519.html>
Ikoma City. "Current Status and Issues of Waste Reduction Efforts in Ikoma City." 2021. <https://www.city.ikoma.lg.jp/cmsfiles/contents/0000000/352/1804.pdf>
Ikoma City. "Ikoma City Garbage Composition Survey." May 2023. <https://www.city.ikoma.lg.jp/0000024063.html>
Kyoto City Food Loss Zero Project. "Kyoto City Organic Waste Data." Dec. 2023. <https://isakiin-kyoto.com/data>
Garbage Recycling Network Japan. "CO2 Emissions from Incineration of 1 ton of Standard Organic Waste." Sept. 2011.
<http://www.namagami-rz.sakura.ne.jp/index1/12050yakuco2.pdf>
Garbage Recycling Network Japan. "Results of a Survey on Organic Waste Recycling." Dec. 2014. <http://www.namagami-rz.sakura.ne.jp/en/ko-to/015010101kka1.pdf>

We need more composting fellows! → → → → →

3.4.3 英語弁論大会など

a 第72回チャーチル杯争奪全日本高等学校英語弁論大会

関西学院大学と青山学院大学の英語研究部が毎年合同で開催している。全国の高校生を対象とした英語弁論大会。英国の首相故ウィンストン＝チャーチル郷の名前を借り、1952年から開催している。（開催要項より）

1. 目的：社会貢献の一貫として社会貢献の一環として青少年育成のため、スピーチを通じての高校生の総合的な英語力向上に資することを目的とし、人前で自分の考えを英語で表現する機会とするため。（開催要項より）
2. 日程：西日本予選 10月15日（日）
本選 11月11日（土）
3. 場所：西日本予選 関西学院大学
本選 青山学院大学
4. 参加者：ESS部員 1年生1名、2年生1名、計2名
5. 結果：2名のうち、1名が西日本予選3位入賞。本選に出場し、3位入賞。



b 第74回奈良県高等学校英語弁論大会・第5回英語暗唱大会

1. 日程：11月4日（土）
2. 場所：奈良県立高取国際高校
3. 参加者：弁論大会 ESS部員 2年生2名
暗唱大会 ESS部員 1年生1名
4. 結果：弁論大会では、1位と3位に入賞。1位に入賞した生徒は第20回近畿高等学校英語スピーチコンテストにも出場した。
暗唱大会では、入賞はしなかったが、堂々と練習の成果を発揮することができた大会であった。



c 第28回イングリッシュ・フェスティバル

県内生徒がより多くの英語に触れる場として毎年開催されている、イングリッシュ・フェスティバルに本校のESS部員が参加した。本年度は、より多くの生徒に英語や国際教育に触れる機会を創出するため、第32回奈良県留学生・研修生の日本語による体験発表会も同日におこなわれた。

1. 日程：令和5年12月16日（土）
2. 場所：奈良県立郡山高等学校
3. 参加者：ESS部員 1年生4名、2年生2名
4. 内容：ESS・英語関係クラブ&留学生交流会①
ディベート（第1ラウンド）
ディベート（第2ラウンド）
留学生・研修生の日本語による体験発表会
ESS・英語関係クラブ&留学生交流会②
5. 結果：ディベート大会では、第1グループ、第2グループともに、優良賞を受賞。
留学生・研修生の日本語による体験発表会では、本校1年生の2名が、発表会の司会や受付を務め、発表会の運営のサポートも行った。
ESS・英語関係クラブ&留学生交流会では、他校の生徒や留学生とゲームを通して、英語を使用しながら楽しい時間を過ごすことができた。



3.4.4 韓国語スピーチコンテスト

- 1 目的： 韓国語選択者が授業内でスピーチを作成し、在日日本大韓国民団奈良県地方本部主催、奈良韓国教育院主管(後援：駐日大阪総領事館、奈良県日韓親善協会、一般社団法人在日韓国商工会議所奈良在日日本大韓民国婦人会奈良県地方本部)の奈良県韓国語スピーチ大会に参加することで、韓国語の異文化体験及びコミュニケーション能力の向上を目指す。
- 2 日時： 2023年11月18日(土)
- 3 場所： 奈良県韓国人会館
- 4 参加者： 2年生韓国語選択者及び3年生韓国語選択者のうち希望者
- 5 結果： 特別賞1名、銀賞1名、奨励賞2名



3.4.5 中国語スピーチコンテスト

第41回全日本中国語スピーチコンテスト

日時：2023年10月22日（日）

参加人数： 朗読部門 2人 （1年生1人 ;3年生1人）

スピーチ部門 1人 （2年生1人）

場所： 奈良市中部公民館 （奈良市上三条町23-4）

内容：

- 1) ~10:00 集合
- 2) 10:30~11:30 個人練習
- 3) 11:30~12:30 グループ練習
- 4) 13:30~16:30
前半 スピーチコンテストに参加；
後半 成績の発表
- 5) 16:30~17:00 写真撮影



成績： スピーチ部門 中学・高校生部 第一位
朗読部門 中学・高校生部 第二位（全国大会への推薦）

感想と改善点：みんなの練習のおかげで、良い成績を収めました。中国語の声調のトレーニングはまだ強化する必要があります。

第27回全国高校生中国語スピーチコンテスト

日時：2023年12月16日（土）

参加人数： 初級部門（朗読） 2人 （2年生1人 ;3年生1人）

場所： 京都外国語大学 7号館4階 741教室

内容：

- 1) ~10:00 京都駅で集合
- 2) 10:00~11:00 京都外国語大学へ行く
- 3) 11:30~12:30 グループ練習
- 4) 13:30~15:30
前半 スピーチコンテストに参加；
後半 成績の発表
- 5) 15:30~16:00 写真撮影



成績： 京都商工会議所会頭賞、日本国際貿易促進協会京都総局賞

感想と改善点：電車の遅延のため、ギリギリで会場に到着しました。次回は練習のためにもう少し早く到着できるようにします。

3.4.6 スペイン語（スピーチコンテスト、レシテーションコンテスト）

スペイン語では、日々の学習の成果を発表する場として、代表生徒が一昨年度より清泉女子大学高校生スペイン語スピーチコンテストに出場している。これは毎年3月末に行われる全国規模の大会で、高校生が自分でテーマを設定し、4分間でスペイン語で想いを発表する大会である。1次審査と2次審査があり、1次審査は発表原稿による書類審査で、1次審査を通過した場合、清泉女子大学のキャンパスで行われる2次審査に出場することができる。

国際高校としては、2022年3月に続き2回目の2023年3月に4名の生徒が2次審査に出場した。テーマは各自が設定し、自分自身の家族との経験や留学生活から学んだこと、部活動の経験から考えたことなど多岐に渡った。3月には春休み中も何度も登校し原稿の暗記から発音、イントネーション、リズム、表情やジェスチャーまで徹底的に練習を重ねた。今回は2年生の生徒1名が総合第1位となる最優秀賞を受賞した。



2023年12月に行われた天理大学主催第1回関西高校生スペイン語レシテーションコンテストでは、今年度高校3年生の3名が出場しそのうち1名が審査員特別賞を受賞した。事前にスペイン語圏の有名な詩を課題文として練習し、当日はそれを暗唱し、スペイン語の発音やリズム、イントネーションなど表現力を競う大会である。

英語以外の外国語を学ぶ高校生にとって、ひとつの課題となるのは、その言語を授業以外で触れる機会に乏しく、学習するモチベーションが低下したり、目的意識が持てなかったりすることである。本校が取り組んでいる海外の学校とのオンラインや対面での交流、このようなスピーチコンテストなど普段の学習の成果を発揮できる場を積極的に活用し、スペイン語をもっと身近に感じてほしいと思っている。



3.4.7 フランス語の成果

今年度は、校外で開催されている2つのコンクールに参加した。

1 第20回西日本高校生フランス語スケッチ・コンクール

主催：在日フランス大使館、関西日仏学館、日本フランス語教育学会

日時：2023年11月23日（木）13:00～

会場：関西日仏学館一京都

「スケッチ」とは、寸劇のことで、このコンクールでは2人1組のペアがフランス語の課題劇を演じる。本校からは2年生2組が出場を希望し練習を重ねてきたが、1組はインフルエンザ罹患により出場できず、1組だけの出場となった。

大阪・兵庫・奈良から合計11組が出場し、本校生徒も練習の成果を発揮し最後まで演じ切ったが、残念ながら表彰には至らなかった。



本校生徒の発表の様子

2 第15回西日本高校生フランス語暗唱コンクール

主催：アサンプション国際中学校高等学校、関西日仏学館、日本フランス語教育学会

日時：2024年2月3日（土）13:30～

会場：アサンプション国際中学校高等学校

フランス語の課題文を暗唱し、披露するコンクールである。出場者は5つの課題文から1つを選択し、暗唱した。コンクールには大阪府、兵庫県、奈良県の8校より計15名が出場した。本校からは2年生2名が出場した。このうち1名が「アサンプション賞（特別賞）」を受賞した。



発表の様子

3 最後に

上記2つのコンクールは、本校からは初めての参加であった。今後は入賞を視野に入れながら、指導に取り組んでいきたい。コンクールの出場にあたって、本校非常勤講師エヴェイエ・ミカエル・ベルナル先生が、毎週水曜日の放課後、長時間にわたって指導をしてくださいました。フランス語学習歴1年未満の生徒に対し、本番で堂々と発表ができるレベルになるまでご指導いただいた。ここに感謝申し上げます。

3.4.8 校内での防災啓発講座（生徒報告）

探究テーマ：地震の防災を知ろう

概要：近年地震の起こる頻度が増えている。日本は世界で上位の地震大国であり、日本の地形上、地震が起きたら被害は大きくなると予想され、南海トラフ巨大地震が来た場合、甚大な被害が考えられる。

これらから地震がどれだけ危険で恐ろしいものであること、対策が必要であることを多くの人に知ってもらい、防災に取り組んでほしいと思った。今の私たち高校生には何ができるのか、何をしなければいけないのかを知ってもらうため、高校生を対象に伝えていこうと考えた。

今までしてきたこと：

①地震について調べる。

高校生という若者に、地震について深く知ってもらい、防災意識を高めてほしいと考えた。過去の地震を知り、地震が起きた時取る行動や身の回りの防災、避難方法を見直し、最終的には実際に地震が起きた時、自分たちの得た知識を使って多くの人の手助けができるようになってもらいたいと考えた。そのためにもまずは私たちが知識を蓄える必要があると思った。本やネットで調べるだけでなく、誤った情報を得ないように主に国土交通省気象庁や首相官邸ホームページなどから調べた。

②アンケートを取る

当時の1、2年生を対象に実施。地震の関心度は半数の人がはいと答えた。ほかにも、家族と避難場所の共有や防災グッズ、家具転倒防止など対策をしている人は少なかった。アンケートの最後に質問項目を用意したところたくさんの質問が寄せられた。しかし、私たちの知識では答えられなかった。もっと自分たちに知識が必要だと感じた。

③防災センターへ行く

地震のシュミレーション映像を見たり、地震発生時に、家にいた場合と外にいた場合の対処法の違い、震度7の体験、防災グッズには何が必要かなど本やネットだけでは得られない情報を知ることができた。また防災センターの方にお時間を取っていただき、アンケートで来た質問や私たちが知りたいことを質問した。

④高校生に向けて地震対策を呼びかける

これまで私たちが学んできた情報や過去に起きた大地震、地震が起きたときの被害、避難方法を伝えた。また特別活動を通して、実際に防災に触れる機会を作った。グループワークで、防災グッズに必要なものは何か、それはなぜ必要なのかなどを考え、発表してもらったり、新聞紙でスリッパを作ったりした。最後にアンケートを取った結果、地震の関心度について、9割以上の方が授業を通して関心を持ったと回答した。授業後多くの人から家の防災の確認や準備をすと言ってくれた。

⑤パンフレットを作成

探究を始める時に、地震について多くの人に感心を持ってもらい、防災をしてもらうためにパンフレットを作成することを目標としていた。これまで得た知識や防災センターで学んだ情報をもとに実際に作成した。

⑥国際会議

奈良学園大学で行われた国際会議で今まで私たちが取り組んできたことや防災の知識を英語で発表した。

探究活動をする中で学んだこと

今回の探究の欠点は始めにゴールの目標を立ててしまったことである。パンフレットを作ることというゴールを決めてしまい、パンフレット作成後、それ以上の探究は何をしたら良いのか分からなくなってしまった。探究とは旅と同じで何も無いまま歩きはじめ、何が起こるか分からず、行く先々でいろんな物を得るもので、ゴール地点を決めてはいけないと思った。探究は永遠に終わりのないものであるということを知った。

今回の活動を振り返って、さらに探究すべきことを見つけた。家や身近な防災だけでなく、学校の防災や避難時の設備は整っているのか、国際高校だからこそ英語で避難誘導の表記はあるのかなど調べるべきことを発見した。

そして一番感じたことは、学んだ知識は自分のものにしておくのではなく、周りの人に伝えていくことが大事だということ。正しい情報を発信していくことで自分が理解しているか知る良い機会にもなる、ということ。情報が共有されることで、防災について取り組む人が増え、多くの人を救うことにつながると思う。今後も身近な人に防災を伝え、地震が起きたときは率先して行動したいと思う。この探究活動で学んだことはこれから先の新たな探究でも活かしていきたいと思う。

3.4.9 WWL成果報告会

a. WWL成果報告会（校内）

学校内で実施したWWL成果報告会を以下のように実施した。

1. 日時 令和5年12月12日（火曜日）
受付（本校会議室）
8：50～ 9：10
全体会（本校会議室）
9：10～ 9：40
成果報告会（本校体育館）
9：50～10：40
意見交換会（本校会議室）
10：50～11：30



2. 場所 奈良県立国際中学校・高等学校（奈良市二名町1944-12）

3. 参加者

県外連携校等の先生方
県内公立小学校、中学校及び高等学校の先生方
地域の方々
本校生徒（高校1年生、2年生、中学1年生）

4. 内容

- ・全体会：日程説明など（県教委担当者、学校長、教頭）
- ・公開授業：
 - ①高校生国際会議の報告
 - ②3年生より代表チーム（3チーム）の発表・質疑応答
 - ③世界の言語の活動報告（代表生徒）司会・進行は2年生生徒による
- ・意見交換会：その他の活動報告など

意見交換会の際に得た講評を以下にまとめる。

吉田敦彦 先生（大阪公立大学）

- 重要な3点：自分ごと、モヤモヤ感、ロールモデルについて述べた。
- プレゼンテーションは綺麗だが、プロセスのドラマ感の伝達をが不足している。

福山 哲治 館長（登美ヶ丘南公民館）

- 生徒は自身の取り組みに自信を持っているように見えた。
- 生徒は、英語を用いた国際サロンや文化理解の場について積極的に取り組んでいると評価。

佐藤 真久 先生（東京都市大学）

- 良かった点：
 - 探究アプローチのプロセスと自律化に重点を置いている。
 - 実体験に基づく探究と多角的な視点での学問の捉え方を評価する。
 - 言語の重要性とコミュニケーションの重要性について。
- 改善点：
 - プロセスのドラマ感と試行錯誤の不足。
 - 「探究成果発表会」というタイトル変更と中間報告としての位置づけの明確化。
 - 謝辞のスライドへの追加と根拠の多様性、ロジックの強化を提案。

宮岸 悠可 指導主事（奈良県教育委員会事務局）

- WWLと国際高校の理念の一致を指摘。
- 引き続きの取り組みと発展を期待する。

b. 「WWLコンソーシアム構築支援事業におけるEBPMに向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究」 成果報告会

株式会社リベルタス・コンサルティングがオンラインで実施した成果報告会に参加し、取り組みを発表するとともに、パネルディスカッションに参加した。

日時	令和6年2月27日（火曜日）	
開会		13:30～13:35
令和3年度カリキュラム開発拠点校の取組発表		13:35～14:35
調査結果の報告		14:45～15:05
WWLの各取り組みの実施報告		15:05～15:55
パネルディスカッション		16:10～16:50

報告会の内容を以下にまとめる。

- ・ 令和3年度カリキュラム開発拠点校の取組発表

北海学園札幌高等学校では1500人の生徒が10クラスに分かれ、Global Village探究や年間探究発表会、海外研修、国際会議の実施などに取り組む。新潟県立三条高校では、専門高校やSSH校と連携を強化し、グローバル探究や英語力向上、フィールドワーク、県内大学の留学生との交流に力を入れる。愛知県立千種高校は生徒数1000人で、クラス横断的なキャリア形成や自己のあり方を探求し、高校生国際会議はまだ実施していない。名古屋大教育学部附属中高は名古屋大学の授業を受講し、研究室との共同研究や高大接続を進める。京都先端化学大学附属は、海外の連携校が多く、アメリカやインドでの研修、国際会議の開催、課題研究の成果発表など、多岐にわたる活動を行う。
- ・ WWLの各取り組みの実施報告

大教大平野では大教大と連携し、3年間のグローバル探究や生徒の意見を取り入れた探究方法を採用し、AARサイクルを実施する。長崎東中学校高等学校では他校との合同探究発表会を行い、チーム学習と探究ピアサポートに重点を置く。宮崎大宮高校はSGHプログラムの一環として海外に生徒を派遣し、外国の生徒を招待する。長野県上田高校は信州大学や長野県立大との高大連携をオンデマンドで実施し、双方にメリットがある共同学習を推進する。渋谷教育学園渋谷中学高等学校は国際会議や学びオリンピックSORAを通じて、生徒が主体的にテーマを設定し、多様なクラブや委員会活動と関連づけて探究活動を行う。
- ・ パネルディスカッションの要約（佐藤先生の講評も含む）

佐藤先生の総括では、探究教育の高度化と自律化、ネットワークの重要性、探究の仕組み化とハンドブックの役割が強調された。全国規模でのネットワーク活用と、現場での実践から得た知見の共有が推奨される。社会課題の解決への応用や共同体の拡張、教員や学校間の連携強化も重要な論点として挙げられた。指定期間終了後の活動としては、生徒のモチベーション維持、実践しやすい環境の構築、資金集めの継続的な取り組み、協働の深化、カリキュラムとの整合性保持、グローバル人材の育成などが提案される。教員と学校が新しい学びの構築に向けて協力し、探究教育が生徒、教員、学校、地域に及ぼす影響についても言及された。

3.5 国際交流

3.5.1 長期留学

3.5.1.a 長期留学生リスト・生徒の現況感想

長期留学生リスト			
クラス	出発日	留学先	帰国日
2-1	R5 9月	カナダ	R6 6月
2-1	R6 1月	オーストラリア	R6 6月
2-1	R5 9月	イタリア	R6 7月
2-1	R5 9月	フランス	R6 7月
2-2	R5 9月	フランス	R6 7月
2-2	R5 8月	ドイツ	R7 6月
2-3	R5 7月	アイランド	R6 8月
2-3	R5 8月	ドイツ	R6 7月
2-4	R5 8月	カナダ	R6 6月
2-4	R5 9月	ドイツ	R6 7月

“自分と向き合う、向き合わなくてはいけない事が増えたので前より自分の感情を言語化して理解できる様になったかなと思います。人に話しかける事に少し積極的になれていると思います。ほんの少しドイツ語が聞き取りやすくなりました。日常生活で毎日使う様な大切な表現や言葉は聞き取れる様になったかなと感じています。また長游明朝(本文のフォント - 日本語)文の場合、文章として何をいっているのかはまだわからないけど、文章の中の単語一つ一つは前に比べて聞き取りやすくなったと思います。

“言語力が伸びました。将来について色々考えました。悩むことがあっても焦らずゆっくり自らしく挑戦し自己表示します。多様性があることを感じました。日本とイタリアのいい所や悪い所を見比べて新たな視点を見つけることが多くなりました。来たばかりは新しい刺激が多いことからこちらでの生活は日本よりストレスフリーに過ごしていたけどこちらでの生活を深く考え自分なりに有意義な時間を作ろうとすればするほど真剣に考え生活するほど問題や悩みを見つけます。”

“毎日驚きと発見があり、それについて「なぜ？」を友達に聞いたり、自分で調べたりするようになった。フランス人は英語を話せる人が少ないのでフランス語ではないとあまり多くの人と会話ができない。学んでいるうちに気づいたことは、常に興味を持つこととなぜ学びたいのかの本質を忘れないようにすることだと気が付きました。フランス人の友達に「日本といえば」と聞くと「東京!」「京都!」「大阪!」と答える友達が多かったのですが、逆を言えば「フランスといえばの地域はどこ?」と日本人に聞けば「パリ!」と答える人が多いです。このことから言えることは一面的だと思います。つまり、視野を広げるといいきっかけになりました。”

“この留学期間で成長したところはたくさんあります。まず問題が発生した時は自分で考え自分で対処できるようになりました。親の助けがないので困ったことがあれば全て自分で解決しなければならぬので自己解決能力が上がりました。また家事をする力が上がりました。僕はシングルマザーのファミリーでそのマザーもめんどくさがり屋で家事をしない日があるのでその時は基本僕がします。洗い物や自炊、ゴミ出し、掃除などをします。日本では滅多にこんなことをする機会はなかったので最初がとても難しく感じましたが最近は家事が日課になってきています。”

3.5.1.b 留学体験発表会

日程：1月23日（火曜日）

時間：16:10～17:10

参加人数：14人

対象：留学に興味のある生徒（中学校1年～高校2年）



このイベントの目的は、留学に興味を持つ学生が既に留学経験を積んだ生徒たちから学ぶことでした。このイベントのために、4人の学生プレゼンターは留学体験に関する10分のプレゼンテーションを作成しました。主要なテーマはホストファミリーとの関係、ホスト国の言語の理解、留学の申請プロセス、ホームシック、留学後の悩みなどでした。プレゼンテーションを作成した後、イベントのために放課後に数時間を費やして練習しました。参加する学生のニーズを満たす課題は、各プレゼンテーションを10分以内に保ちつつ、より小さなグループディスカッションの時間を確保することでした。

イベントの当日、中高生1年生から2年生の生徒14人を歓迎しました。プレゼンターは留学体験について交代でプレゼンテーションを行い、その後4つの小さなグループに分かれて参加者が質問をし、留学について詳しく話す機会を提供しました。全体的に、このイベントが学生たちに留学への動機を与えたと考えています。生徒たちは同じレベルの他の生徒に自らの知識を伝えることができたため、他の国での生活に関する悩みを自由に話すことができました。イベントが終了した後も、参加者は残って連絡先を交換し、経験について話すことができました。私はこれを将来も国際高校の留学プログラムの一環として継続していきたいと考えています。



3.5.2 留学生の受け入れ

2023-2024年度に受け入れた留学生

ドイツ (1名)	AFS	4月～7月 2023
アメリカ (3名)	YFU	4月～7月 2023
フランス (2名)	YFU	10月～11月 2023
イタリア (1名)	AFS	9月～7月 2024
ホンジュラス (1名)	AFS	9月～7月 2024
ミャンマー (1名)	AFS	11月～3月 2024

今年、異なる6つの国から計9人の交換留学生を受け入れました。以前の年度とは異なり、今年の生徒たちは主にクラスメートと一緒にホームルームで授業を受けましたが、以前は異なるクラスに移動して他の生徒と交流するために移動していました。生徒たちはほとんどの時間を自分のクラスで過ごすことができたため、クラス内の多くの生徒と関係を築くことができました。ただし、これのデメリットとして、生徒たちは日本文学や地理などの難しい授業を履修し、高い日本語能力が必要であったため、授業の内容を理解するのが難しく、テストの際に苦勞することがありました。従来通り、交換留学生は週に平均4時間の日本語の授業を受け、自分のスキルレベルに基づいて日本語を学びました。これらの日本語の授業から、生徒たちは基本的な単語やフレーズを話すことから、日常会話で理解し、対話できるように成長しました。



留学生とのイベント

留学生は、年間を通じてさまざまなイベントに参加し、自分たちの文化に関する知識を共有しました（上の表を参照）。これらのイベントの実施を通じて、私は当校の生徒たちが非英語圏の国についてより知識を持っていると感じました。これにより、生徒たちは以前は知識がなかった国々について学び、訪れることへのモチベーションが高まりました。



6月2023年	第一回国際交流（ドイツ語）
10月2日2023年	登美ヶ丘南公民館英語サロン
12月16日2023年	イングリッシュフェスティバルと留学生の日本体験による発表会
1月24日2024年	中学校ホームルーム（国際理解）
1月24日2024年	第二回国際交流（ホンジュラス、イタリア、ミャンマー）
2月14日2024年	高校1年ホームルーム（国際理解）



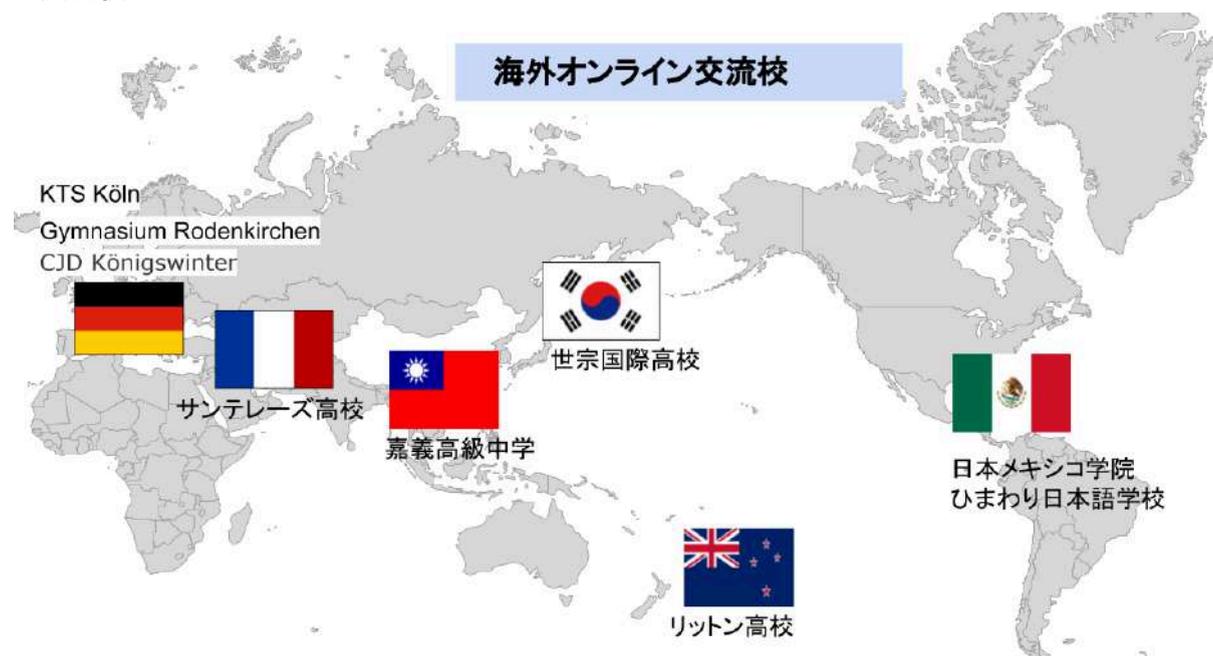
3.5.3 オンライン国際交流

a.概要

海外交流校6校との継続交流に加え、新たに韓国・世宗国際高校とMoUの締結を行った。各言語クラス、EAP II クラスで放課後や授業時間を使いオンライン 同期型交流を実施。クラスによっては、Padletにて文章投稿、クリスマスカードや年賀状の交換などの非同期型オンライン交流も行い、一年を通じて学びの深い交流ができた。ドイツ語、中国語クラスでは郵送にて手紙やお土産の交換も行い交流を深めた。

交流校4校が来日し、1校は学校休暇中のため校外にて、3校は体験入学を受け入れ、国際高校開校以来初めてとなる対面交流を実施。交流校教員とも今後の更なる交流発展に向けて意見交換を行うことができた。

<交流校>



スペイン語クラス	メキシコ	日本メキシコ学院、ひまわり日本語学校
中国語クラス	台湾	嘉義高級中学
フランス語クラス	フランス	サンテレーズ高校
ドイツ語クラス	ドイツ	KTS Köln / CJD Königswinter / Gymnasium Rodenkirchen
韓国語クラス	韓国	世宗国際高等学校
EAP II クラス	NZ	リットン高校

<ZOOMオンライン交流>

スペイン語クラス	3年生	放課後	日本メキシコ学院と2回
	2年生	授業時間内	ひまわり日本語学校と2回
ドイツ語クラス	2,3年生	放課後	CJD他ドイツの2高校と合同で1回
中国語クラス	2,3年生	放課後	嘉義高級中学と3回
フランス語クラス	2,3年生	放課後	サンテレーズ高校と3回
韓国語クラス	2,3年生	授業時間内	世宗国際高校と4回
EAP II クラス		授業時間内	リットン高校と10回

<非同期型オンライン交流>

スペイン語クラス	Padletにて自己紹介、コメントでの交流
ドイツ語クラス	郵送にてビデオ、お土産、コメント交換
中国語クラス	Padletにて自己紹介、郵送にて年賀状の交換
フランス語クラス	Padletにてクリスマスカードの交換
EAP II クラス	自己紹介動画の交換

<対面交流>

サンテレーズ高校（生徒15名／教員2名）	2023年2月来校	2日間体験学習(ホームステイ2泊)
ドイツ CJD校（生徒5名／教員1名）	2023年4月春休み期間中に奈良公園にて国際高校生徒5名、教員2名と交流	
日本メキシコ学院（生徒16名／教員3名）	2023年6月来校	1日体験学習
嘉義高級中学（生徒32名／校長先生・教員2名）	2024年2月来校	1日体験学習
ドイツ CJD校（生徒6名／教員1名）	2024年3月春休み期間中に校外で国際高校生徒10名、教員1名と交流予定	

<姉妹校提携とMoU締結>

2月13日	フランス	サンテレーズ高校とオンライン調印式を行い姉妹校提携締結
5月31日	韓国	世宗国際高校の校長と教員2名が来校し、MoU調印式を実施

3.5.3 b ニュージーランド Lytton高校オンライン交流

今年、私たちは2023年5月から11月まで、ニュージーランドのリットン・ハイスクールとオンライン交流を20回実施しました。この拡張された交流の目標は、異なる国の同学年の生徒たちと学んだ英語を使う機会を提供することでした。これは、留学を希望する生徒たちのために設計された「海外進学」クラスに所属するEAP（English for Academic Purposes）の生徒たちを対象として、毎週金曜日に実施されました。これにより、生徒たちは実際の状況で会話を始め、質問をする主導権を取る機会を得ることができ、卒業後に大学で留学する予定の生徒たちにとって有益でした。

交流の準備のために、私とリットン・ハイスクールの担当教師で、4月末から交流の進行方法、内容、話すべきトピックについて話し合うための会議を行いました。最初のセメスターでは自由な交流があると生徒たちにとって有益であると考え、これにより生徒たちは留学時と同じような自然な会話の機会を得ることができました。また、リットンの生徒たちが日本語を学んでいたため、私は毎回のクラスで生徒たちにいくつかの役立つフレーズを教えるように促しました。2023年5月から7月初旬まで、毎週金曜日の2限に45分の交流を行いました。交流はクラス全体で行われました。国際的な交流で予想されるいくつかの困難にもかかわらず、私たちは自然な英語を使用することができ、ニュージーランドの生徒たちにいくつかの日本語のフレーズを教えることができました。夏休み中、私の生徒たちは個人の時間に、リットンの生徒たちと小グループで会話することができました。これにより、生徒たちが自分で会話の主導権を取ることができて嬉しかったです。



また、夏休み中に、前学期末のEAP生徒のアンケートのコメントをもとに、交流をより小さなグループサイズにすることを決定しました。これには部屋の予約や生徒のためのGoogle Meetリンクの準備が必要でした。これが私にとっては初めての交流の形式でしたが、全体としてはうまくいきました。各グループは話題を用意することができ、小さなグループサイズのおかげで生徒たちは選択した言語で話す時間が増えました。第2のアンケートから、生徒たちは小グループでの交流をより楽しんでおり、話すプレッシャーが少ないと感じているようでした。私たちは学期の残りの期間も交流を続けることにしました。

今年の交流からは、クラス内だけでなく、クラスの外でも関係を築くことができました。クラス全体と一緒に海外旅行するのは難しいですが、異なる国でコミュニケーションする経験を教室にもたらすことができました。これにより、生徒たちは自分たちのComfort Zoneの外の人々と話すことに対してより快適に感じるようになりました。私は来年もリットン・ハイスクールとの関係を続け、国際高校の他の生徒たちとも同じ経験を共有できることを願っています。

3.5.3.c ドイツの高校との交流

ドイツのCJD Königswinter: 対面の交流

日時 令和5年4月8日(土)
参加人数 相手校：8人 当校6人(3年生)

交流内容

- ① 令和4年ビデオ交流の後、個人でオンライン交流を続ける(3年生)
- ② 1月~2月 奈良公園の案内する計画(3年生)
- ③ 4月8日(土) 奈良まちで会って、奈良公園へ散歩(CJD・奈良国際高校)



奈良公園でのドイツ CJD Königswinter・国際高校の対面交流



総括 3年生にとっては、ドイツ語のスキルを地元で「ツアーガイド」として実際に使うチャンスだった。学校でのビデオ交換が終わった後も、インターネットを通して、ドイツの生徒たちと個人的に連絡を取り合うことができた。両校の生徒はお互いの語学力に刺激を受け、本校の生徒は奈良の世界遺産を外国人に案内することに誇りを感じていた。

改善点 ドイツと日本の学校スケジュールの違いにより、日本ツアーは3月末と4月初旬にしか予定できなかった。日本では年度始めの忙しい時期だったため、今回は学校訪問ができなかった。

ドイツのKTS Köln/CJD Königswinter/Gymnasium Rodenkirchen: ビデオ交流

日時 令和5年9月~令和6年2月
参加人数 相手校：19人 当校29人(2年ドイツ語選択者)

交流内容

- ① 9月 ドイツからの動画を視聴(2・3年生)
「自己紹介、学校生活、ドイツ語で和食、ケーニヒスヴィンターの町」
- ② 10月 グループで両言語の動画作成(2年生)
「自己紹介、趣味、食べ物、部活動、学校生活など」
- ③ 11月 メッセージカード(2・3年生)・動画(2年生)をドイツに送付
- ④ 2月 ドイツの生徒から感想やコメントの伝達
- ⑤ 3月 対面交流の予定

KTS Köln / CJD Königswinter / Gymnasium Rodenkirchen 作成動画



国際高校から送った感想



国際高校作成動画



ドイツから寄せられた感想



ドイツのCJD Königswinter オンライン交流

日時 令和5年11月16日(木) 16時00分～17時00分

参加人数 相手校：14人 当校12人（1年生2人、2年生9人、3年生1人）

交流内容

- ①あいさつ（2年生の4人の代表）
- ②学校紹介 国際高校（日本語）
- ③学校紹介 CJD Königswinter（ドイツ語）
- ④ブレイクアウト・ルームへ
「両言語での自己紹介」
「ドイツ語、日本語（と英語）のフリーチャット」
「ソーシャルメディア情報の交換（希望者のみ）」
- ⑤集合写真
- ⑥最後のあいさつ

集合写真



感想 今年のオンライン交流は、生徒たちがリーダーシップを発揮し、大成功を収めた。初心者だがモチベーションの高い1年生も、英語でのコミュニケーションを楽しみ、3月に直接会いたいと言っていた。2年生と3年生にとっては、学んだ言語を披露する良い機会であると同時に、テクノロジーを通じて国際的な友情を築く良いチャンスとなった。

改善点 学校ではインフルエンザが流行していたため、マスクを着用している日本人生徒もいて、ドイツ人生徒を驚かせ、コミュニケーションを難しくする場面もあった。次回はマスクをしなくても参加でき、顔を見せて笑顔をかち合えるようにしたい。

3.5.3.d 日本メキシコ学院 ひまわり日本語学校

今年度、2年生スペイン語選択者（39名）はメキシコ合衆国の中部グアナフアト州にある、ひまわり日本語学校と11月と2月にオンライン交流を行った。第1回目となる11月の交流では、ひまわり日本語学校の学生が主導となって、日本語とスペイン語を交えて自己紹介や両国の文化をテーマにした絵しりとりなどをして交流を楽しんだ。両校の参加人数もちょうどよい数になり、1グループ4人程度でブレイクアウトセッションを利用し、少人数で深い交流を行うことができた。スペイン語ネイティブとの初めての交流ということもあり、事前指導ではメキシコ特有のスペイン語などを紹介し、交流当日に積極的に使うように促した。

2回目の2月の交流では、国際高校の生徒が主導となって、オンライン交流の企画と運営を行った。交流内容の企画を行う「実行委員」の生徒が主体となって、交流の2カ月前から準備を開始した。1回目の交流では交流中にさまざまなアプリを使って行ったが、使い方など短い時間で慣れるのに戸惑った生徒も多かったことから、今回はできるだけデジタルを使わず、アナログで取り組むことに決めた。その結果、好きな日本文化に関するクイズや折り紙、切り絵を画面越しで一緒に体験するなどした。そのために、事前にメキシコ人の生徒に紙を用意してもらい、国際の生徒がリアルタイムで折り紙を教え、一緒に完成させた。



3年生スペイン語選択者（21名）は、5月と10月、2024年1月にメキシコシティにある、日本メキシコ学院とオンライン交流を行った。相手校の提案もあり、当日のリアルタイムの交流だけでなく、「Flipgrid」というビデオ投稿アプリを活用し、自己紹介やお互いの学校紹介など個人やグループでビデオを作成、投稿し、それに両校の生徒が日本語とスペイン語を用いてコメントし合い、事前に交流を開始した。そのため、当日のオンライン交流では、簡単な自己紹介の後、トピックに基づいたフリートークなど生徒同士の自由なやりとりにより多くの時間を削ることができた。生徒たちは、事前にビデオ投稿とコメントし合うことにより、リアルタイムの交流時にはより緊張感が少なくリラックスした雰囲気で行うことができた。交流が終わった現在も、3年生はインスタグラムなどのSNSを通じて日本メキシコ学院の生徒とプライベートの交流を継続している生徒もあり、とても有意義な交流になったと感じている。

3.5.3.e 台湾 国立嘉義高級中学校

日時：2023年12月7日 13:00 午後(日本時間)

参加人数：相手校20人（日本語クラス1年生）、本校25人（2年生中国語選択者38中）

場所：探究A (1-2グループ)、プレゼンルーム(3-6グループ)、つながる一む(7-10グループ)

交流内容：

- 1) 接続+グループ分け (10 分)
- 2) 自己紹介:自己紹介+質問タイム(15分)
- 3) <奈良紹介>:グループ発表(10分)+コメントタイム(5 分)
- 4) <嘉義紹介>:グループ発表(10分)+コメントタイム(5 分)
- 5) 撮影+交流会の終わりの挨拶(5 分)



感想と改善点：2年生の学生たちは事前に十分な準備をしたため、交流の内容は広く、雰囲気もとても良かったです。ただし、学生たちは3つの異なる教室に分かれており、一部の人は名前とグループを変更していなかったため、最初のZoomのグループ分けに非常に多くの時間がかかりました。次回は事前に教室に到着し、名前とグループの変更を確認します。

e 台湾 国立嘉義高級中学校 オンライン交際交流 (3年生)

日時：2023年6月7日 13:55~14:20 午後(日本時間)

参加人数：相手校12人（日本語クラス1年生）、本校10人（3年生中国語選択者11中）

場所：家庭科室

交流内容：

- 1) 接続+グループ分け (10分)
- 2) 体表者による交流会前の挨拶 (5分)
- 3) <奈良紹介>:グループ発表(10分)+コメントタイム(5分)
- 4) <嘉義紹介>:グループ発表(10分)+コメントタイム(5分)
- 5) 撮影+交流会の終わりの挨拶(5分)



福井佳宝:

最後の交流会今までで1番うまくプレゼンを行えたと思っています。今までよりも、カギ高校の皆さんのリアクションがあったり、相槌を感じたりしたので、自分の成長を感じると共に皆さんと会話を楽しむことができた嬉しさでいっぱいでした。実際に会える機会があればいいのになと思いました。



奈良欢迎你



窪尾 琥太郎:

最後の交流会ありがとうございました。普段の授業では味わえない楽しさを数回の交流会を通して体験することができました。とても日本語が上手で毎回驚いていました。日本語を聞くのも自分たちが中国語を話すのも楽しかったです。もし日本に来たら一緒に遊びに行きたいです。ありがとうございました!!



感想と改善点：3年生の最後の交流会では、皆が十分な準備をしていたため交流は順調に進みました。そして、三年生の学生たちも自分の中国語の成長を感じながら感想を書いています。しかし、探究週の午後には、多くの学生が交流の場所を忘れてしまい、最初の集合には多くの時間がかかりました。次回は1日前に再び生徒に交流の注意事項を伝えることに留意します。

3.5.3.f フランス サン・テレーズ高校

フランス西部・カンペール (Quimper) に位置するサン・テレーズ高校 (Lycée Sainte-Thérèse) とはオンライン交流を続けている。2023年2月にはサン・テレーズ高校の生徒・教員が来校し、対面での交流の機会を持つとともに、姉妹校協定を締結した。

令和5年度は、6月、9月、12月にオンライン交流を実施した。

1 オンライン交流1回目 (2023年6月7日)

日時：2023年6月7日 (水) (日本) 15:00~16:00 (フランス) 8:00~9:00

場所：本校つながるーむ

テーマ：自己紹介、持っているもの、好きなもの、好きじゃないもの

参加者数：(本校3年フランス語選択者は全員参加、2年生は希望者のみ参加)

	3年	2年	1年	合計
国際高校	12	5	0	17
サン・テレーズ高校	8	15	10	23

【概要】

開会行事等を行わず、Zoomに接続してすぐ交流に移った。ブレイクアウトルームを作成し、生徒を4つのグループにわけて交流した。60分の時間のうち、20分をフランス語で話す時間、20分を日本語で話す時間、20分をどの言語で話してもよい時間と設定したが、実際はどの時間にどの言語を用いてもよいこととした。また、会話の内容もテーマにとらわれず、自由にしてもよいと伝えた。

最初の方は、緊張もあってなかなか会話が続かない様子であったが、時間が経つにつれ活発な意見交換ができるようになった。

2 オンライン交流2回目 (2023年9月27日)

日時：2023年9月27日 (水) (日本) 15:00~16:00 (フランス) 8:00~9:00

場所：本校つながるーむ

テーマ：スポーツについて、週末の過ごし方について、ふだんの食事について

参加者数：(本校3年フランス語選択者は全員参加、2年生は希望者のみ参加)

	3年	2年	1年	合計
国際高校	10	3	0	13
サン・テレーズ高校	9	8	0	17

【概要】

2回目の交流もこれまでと同様の形式で行った。グループは先方の機材の関係上3つのグループに分かれた。また、今回はサン・テレーズ高校の日比先生のご提案もあり、交流前に自己紹介ビデオの交換を行った。自己紹介ビデオは「Padlet」のサービスを用い、オンラインでいつでも見られるようにした。これまでのオンライン交流ではグループ内の自己紹介に多くの時間を費やし、会話の時間が十分に取れなかったが、事前のビデオ交換によって、生徒たちはスムーズに打ち解け、会話を楽しんでいたようだった。



Padlet上にアップロードされたビデオ

3 オンライン交流3回目（2023年12月6日）

日時：2023年12月6日（水）（日本）16:00～17:00（フランス）8:00～9:00

場所：本校つながる一む

テーマ：クリスマスやお正月の過ごし方について

参加者数：（本校3年フランス語選択者は全員参加、2年生は希望者のみ参加）

	3年	2年	1年	合計
国際高校	9	7	0	16
サン・テレーズ高校	2	8	10	20

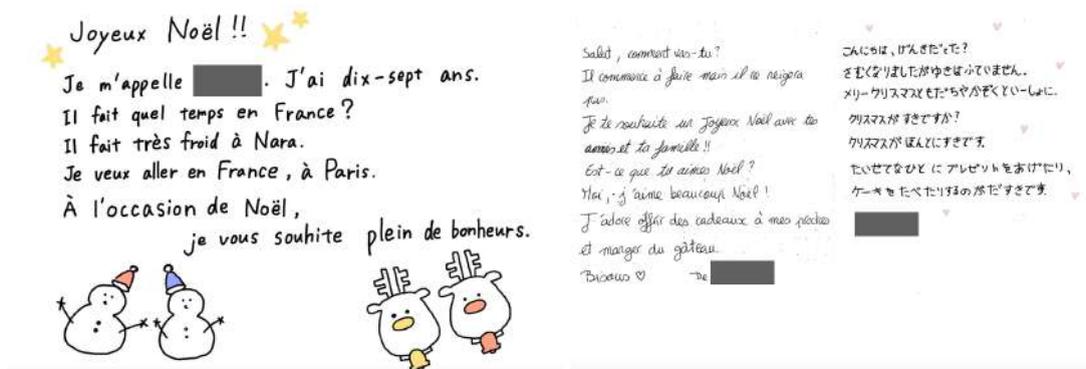
【概要】

これまでと同様の形式で交流を行った。今回はPadletでクリスマスカードの交換を行ってからの交流となった。令和4（2022）年度は紙のカードを作成し、郵送していたが、オンラインでの交換としたことによって、生徒はすぐに、いつでもカードを見ることができるようになった。本校の生徒はフランス語で、サン・テレーズの生徒は日本語でカードを作成した。

交流のテーマはクリスマスやお正月の過ごし方についてであった。どのように過ごすか、誰と過ごすか、何を食べるのかなどについてお互いの生活を紹介しあった。

4 クリスマスカードの交換

本校の2年生・3年生のフランス語選択者は全員、ロイロノートを用いて1枚クリスマスカードを作成し、共有した。カードは教員が回収した後、PDFファイルにまとめてPadletにアップロードした。



クリスマスカードの一例

5 生徒へのアンケート

9月、12月の交流会の後、参加生徒にアンケートを実施した。

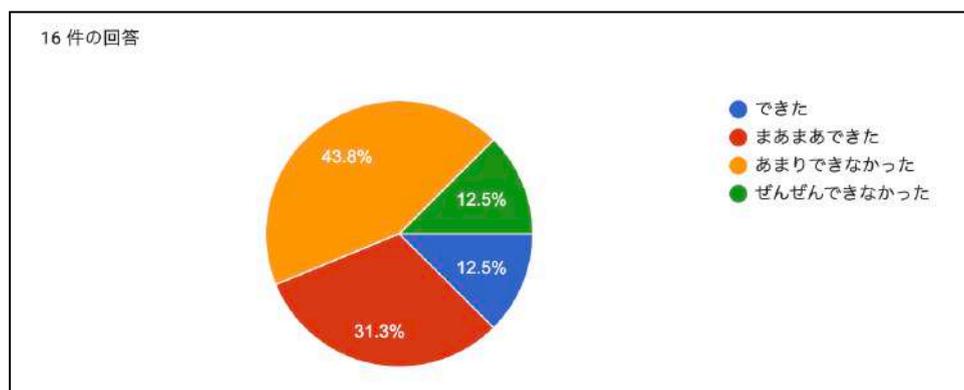
【9月】

全体的な感想（抜粋）

- 相手にフランス語が通じたとき、とても嬉しかったです。サンテレーズ高校の子が日本語を上手に話しているのを聞くと、私もフランス語をもっと頑張りたいと思いました。フランスと日本の違いを共有するのがおもしろかったです。
- 日本のアニメが好きの人が結構いたので共通の話題が思ってた以上にあったので話が盛り上がって楽しかったです。
- すごく楽しかったです！次はもっとフランス語上手くなって、もっと色々な話したいなって思います！
- 日本語がたくさん通じてびっくりしました。お互い知っている内容が多く、楽しかったです！
- 久しぶりにフランスの子達と交流できて楽しかったです。もっとフランス語のスキルアップをしたいと思いました。

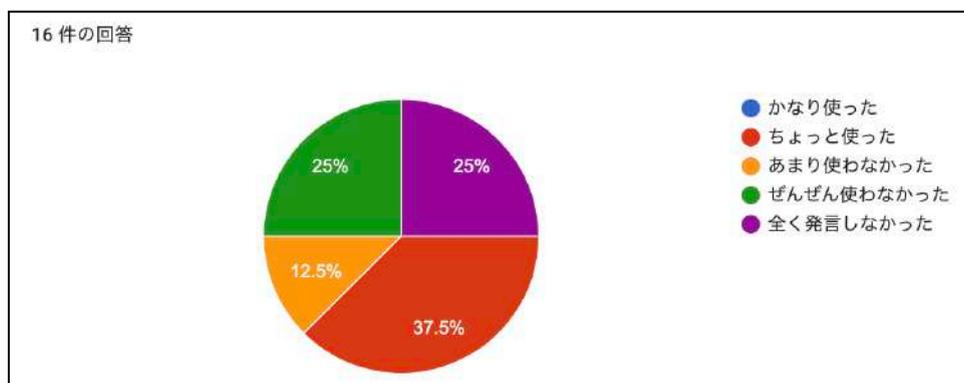
【12月】

質問：フランス語を積極的に使うことができましたか。



約半数の生徒が前向きな回答をした。

質問：英語はどのくらい使いましたか。



「かなり使った」と回答する生徒がおらず、英語をあくまでも補助的に使用している様子が伺える。

生徒の感想（抜粋）

- 思ったよりも会話が通じて楽しかった。けれどなかなか専門用語というか、クリスマスに使うものの名前が分からなかったりはしたのももちろん自分で調べる事も大事だけど何かクリスマスで使う有名なものとかの簡単な語句リストとかがあればもっとやりやすかったのかもしれないと感じた。

- フランスの子はお正月よりクリスマスが好きだと分かりました。また、好きなスポーツやアニメについて知れてよかったです。フランスの子はクライミングや乗馬をしたり日本のアニメがみんな好きだったりしておもしろかったです。フランスをまた身近に感じられて楽しかったです。もっとフランス語を話せるように勉強したいと思いました。
- 日本のアニメや、ご飯をよく知っていてすごいと思った。フランス料理やフランスのアーティストについて知りたいと思った。

6 まとめ

今年度は、交流当日だけでなく、〈事前〉〈事後〉の指導を行うことができた。〈事前〉には自己紹介等を行い、互いのバックグラウンドを知った上で交流を始めることでコミュニケーションが円滑になった。また、〈事後〉では、交流の感想を互いの学習言語でまとめることによって、外国語を使って自分の気持ちを伝えることができた。

この〈事前〉→〈交流〉→〈事後〉のサイクルを回していくことで、生徒同士のつながりがより強固なものになると考えている。

また、9月の交流からアンケートをとりはじめた。フランス語の使用や英語の使用について継続して調査し、生徒の意識の変化を見られるようにしたい。

対面での交流はまだ困難な状況が続いているが、オンラインでできることを模索しながら、サン・テレーズ高校との交流を深めていきたい。



2023年12月6日（水）交流後の写真

3.5.3.g 世宗国際高等学校

世宗国際高等学校がある大韓民国中部に位置する世宗特別自治市は、「行政中心複合都市」と呼ばれる、韓国の中央官庁が集積するニュータウンである。

本校と同じ国際高校であり、第二外国語の授業では、日本語、中国語、スペイン語が学べて本校ともシンクロ性が高い。

世宗国際高等学校との交流

2023年にオンライン交流を1学期と2学期に1回ずつ行い、2024年の10月には、2年生がスタディーツアーで訪問、交流予定。

日時：2023年6月16日 / 10月6日

場所：奈良県立国際高等学校 プレゼンテーションルーム、つながる〜む

対象：本校韓国語選択者2年生35名、3年生25名

世宗国際高等学校韓国語選択者1年生20名、2年生15名

内容：6月16日

本校2年生と世宗校1年生（2時間目9:45~10:30、つながる〜む）

- ・世宗国際高等学校パク・ヒドン校長挨拶
- ・本校生徒による韓国語での学校紹介
- ・世宗校生徒の日本語での自己紹介

本校3年生と世宗校2年生

（3時間目10:40~11:25、プレゼンテーションルーム、つながる〜む）

- ・お互いの紹介したい文化や流行りの物（言葉、ファッション、食べ物など）を相手の言語で紹介する

10月6日（プレゼンテーションルーム、つながる〜む）

本校2年生と世宗校1年生（2時間目9:40~10:30）

本校3年生と世宗校2年生（3時間目10:30~11:10）

- ・お互いに質問したい内容を相手の言葉で事前に伝えておき、その答えを準備し、翻訳して交流した。

生徒の感想

2年生

- ・学校紹介文は、できている物を読む練習しただけなので、学校紹介から自分たちで考えてみたかった。
- ・実際に会って交流したい。
- ・もっと準備して交流すれば良かった。
- ・伝えたことにリアクションをとって必ず反応してくれて嬉しかった。
- ・次は2対2ぐらいの少人数でしたい。
- ・説明用に写真などの準備もあれば良かった。

3年生

- ・フリートークの時間が欲しかった。
- ・韓国の生徒たちはリアクションが良かった。
- ・接続するタブレットはグループに1つだけの方が良い。
- ・質問がくる時があるので翻訳機を用意しての方が良い。
- ・質問は3つくらいで良いかも。
- ・1つの話題をもっと長く話したかった。



3.5.3.h 今後の計画

- ・ EAP II クラス、各言語クラス共に現在の交流校と継続して年間交流を行う予定である。交流校のうち2校が、来日及び本校を訪問予定である。各交流校と2024年度の交流時期及び内容については、今後随時担当者と打ち合わせ予定である。

<2024年度 各言語クラス交流予定>

ドイツ語クラス	CJD他2校	オンライン交流1回 ビデオ、お土産を郵送交換
フランス語クラス	サンテレーズ高校	オンライン交流 2, 3回 クリスマスカードを交換
中国語クラス	嘉義高級中学校	オンライン交流を2回 年賀状を郵送交換
スペイン語クラス	ひまわり日本語学校 日本メキシコ学院	オンライン交流を2回 オンライン交流を2回
韓国語クラス	世宗国際高校	オンライン交流を4回
EAP II	リットン高校	オンライン交流を複数回 ビデオ交換

・ 来校予定

日本メキシコ学院	2024年6月に体験入学とホームステイを調整中
サンテレーズ高校	2025年2月に来校予定

・ 訪問予定

世宗国際高校	2024年10月にスタディツアーで訪問
--------	---------------------

3.5.4 国際理解講座

3.5.4.a ドイツ文化講座

日程：6月28日（水曜日）

場所：図書館

時間：15:00～16:00

参加人数：14人 中学校1年～高校3年生



ドイツからの短期留学生在がドイツ文化講座をおこないました。中学年から高校三年生まで、14人の生徒がイベントに参加しました。国際理解委員会からは2人の教師と2人の生徒がイベントを管理し、計画しました。国際委員会の生徒がスピーカーとしてイベントを主導し、イベントと目標を紹介しました。

ドイツからの短期留學生は、食べ物からドイツの学校生活まで、スライドを使用してドイツ文化について話しました。彼女は日本で消費されているドイツの製品や食品を紹介しました。多くの生徒が、日常の製品がドイツ製であることに驚きました。その後、私たちはドイツ語で1から20までの数字を発音する練習をしました。すでにドイツ語の授業で数字を学んでいた生徒もいたので、発音には慣れていました。次に、ワークシートを使用して1から20までの数字を選んでワークシートに書き込みました。ドイツからの短期留學生がドイツ語で数字を言うと、生徒はビンゴカードに数字を消し線で消してビンゴを目指しました。ビンゴができた生徒には、ドイツのおやつをプレゼントしました。最後に、全員がビンゴを達成し、ドイツの数字を楽しむことができました。グループ写真を撮影してイベントを終了しました（以下に写真があります）。実施した調査によれば、外国語の学習に対する多くの肯定的な回答がありました。この経験のおかげで、将来はドイツを訪れたいと考えている生徒もいます。

学校としては、留學生に自国や文化について教え、話すように奨励しています。特に他の国から来た人と会う際、生徒は少し恥ずかしがりやな傾向があるため、このようなイベントは友好的な環境で生徒たちを結びつけ、異文化の学びを奨励します。今年もこのようなイベントを続けていければと思っています。

流れ：

- 1 紹介
- 2 ドイツについての話
- 3 ドイツ語で数字ビンゴゲーム
- 4 質問タイム
- 5 終わりの言葉、アンケート



3.5.4.b 第2回文化講座

日程：1月24日（水曜日）

場所：図書館

時間：15：10～16：10

参加人数：22人 中学校1年～高校2年生

この交流イベントは、イタリア、ホンジュラス、ミャンマーからの3人のAFS留学生が主導しました。この交流の目標は、異文化への積極的な態度を醸成することでした。今回は3人の生徒がイベントを主導していたため、参加者は3つの異なるアクティビティを楽しむことができました。参加した生徒たちは中学1年生から高校2年生までの国際委員会のメンバーで、合計で22人の生徒がイベントに参加しました。



3人の留学生の自己紹介の後、参加者はそれぞれ異なる国に関連するアクティビティを楽しむために3つのグループに分かれました。ホンジュラスのグループでは、生徒たちは木製の大型ナイフを使った伝統的なダンスを楽しんでいました。このダンスはもともと農民たちが秋の収穫の開始を知らせるために行われていました。今日では、このダンスは学齢の子供から大人まで一年中行われています。イタリアのグループでは、生徒たちは通常イタリアの小学校で行われる歌とリズムのゲームをプレイしました。生徒たちは手をつないで輪を作り、歌を歌いながら遊びました。ミャンマーのグループでは、生徒たちはビルマ語でのフレーズや単語を学びました。ミャンマーの文字は日本語とはかなり異なりますが、文法は日本語と非常に似ていることが分かりました。様々なフレーズの使い方を日本語で聞いて学ぶことが容易でした。



全体的に、生徒たちは異なる文化を理解することができ、同時に3人の留学生は自らの文化について教えたり話したりする経験を得ることができました。イベント終了時に行われたアンケートによれば、参加者はこれまで経験したことのない3つの異なる文化の伝統的なゲームを体験できて嬉しかったとのこと。私たちはこのイベントが将来の留学への動機づけとなり、生徒が自分の周りの環境をもっと体験するきっかけとなることを期待しています。このイベントの実施以来、2022年以降、生徒たちは自分たちの母国の伝統を共有する機会を得ただけでなく、同じ学年の生徒だけでなく、普段の学校生活では会うことのなかった生徒たちとも親密な関係を築く機会を得ていると感じています。このイベントは、英語圏以外の文化の違いに対する意識を高める一助となっています。



3.5.5 対面国際交流

3.5.5.a メキシコ学院高校生来校

今年度は6月30日に日本メキシコ学院の生徒16名と引率教員3名を一日体験入学という形で本校で受け入れをした。この日は世界の言語の授業がある日であったため、1年生～3年生の各スペイン語の授業に入り、交流を楽しんだ。

1年生は、スペイン語を学び始めて数週間しか経っていなかったため、簡単な自己紹介や本校生徒が事前に用意したスペイン語圏の国々に関するプレゼンテーションを日本語で行った。2年生の授業では、日本の文化やアニメに関するクイズを全体で行った後、グループに分かれて日本で人気のある「なんじゃもんじゃ」ゲームをして楽しんだ。本校生徒のスペイン語力は基礎的に留まっているが、身振り手振りや相手に思いを伝えようとする態度がコミュニケーションをとる上で大事であることを実感した。3年生の授業では、メキシコの民謡曲「シエリト リンド」を生徒の演奏と歌で歓迎し、その後はサイコロトークやペン習字体験を一緒に取り組んだ。

午後には3年生の生徒有志がメキシコ学院の生徒と一緒に奈良公園を散策した。奈良公園の鹿にエサをやったり、東大寺をスペイン語で案内しながら見学したり充実した時間を過ごした。また、奈良県外国人観光客交流館（猿沢イン）では折り紙体験や着物などの和装体験を一緒に行った。

スペイン語の授業では、一昨年度よりメキシコの学校とオンライン交流を重ねてきたが、今回が初めての対面での交流となった。たった1日間の短い時間ではあったが、直接会って交流、対話することにより、オンラインでは味わうことのできない心の通じた交流ができたように思う。交流の時の両校の生徒の生き生きとした姿、うまく言葉を話せなくても相手に伝えようとする気持ちが直に通じ合い、真の国際交流、異文化理解を進めることができた。



3.5.5.b タイの訪日教育旅行団の受け入れについて

日時 令和5年10月3日（火曜日）12:00～16:00

学校 タイの公立中高一貫校3校

Phanatpittayakarn School パナットピッタヤーカーン学校

chonkanyanukoon School チョンガンヤーヌグーン学校

Banbung Uttasahakamnuhro School バンブンウタサハカムヌクロ学校

構成 中1:2名 中2:3名 高1:6名 高2:13名 高3:7名 計31名

全員が日本語を学んでいる

引率教員4名、ガイド2名（うち通訳1名）

日程

	中1～高1 11名	高2～高3 20名
12:00（予定）～	Welcome Ceremony（大会議室） 校長・生徒のあいさつ、日程説明	
12:20	各クラス国際理解委員は大会議室へ生徒を迎えに来る	
昼食 12:20～13:00	中1教室にわかれて昼食 （＊配属クラスは別途連絡）	高1・高2教室にわかれて昼食 （＊配属クラスは別途連絡）
12:55		各クラス国際理解委員は体験授業教室に案内
5限 13:00～13:45	A班（5人） 1-A 言語と文学（交流授業） B班（6人） 1-B 数学（体験授業）	C班（10人） 1-1/2 書道（体験授業） D班（10人） 1-1/2 音楽（体験授業）
6限 13:55～14:40	A班（5人） 1-B 数学（体験授業） B班（6人） 1-A 言語と文学（交流授業）	C班（10人） 1-1/2 音楽（体験授業） D班（10人） 1-1/2 書道（体験授業）
7限 14:50～15:35	A班（5人） 1-3 総合英語I（体験授業） B班（6人） 1-3 総合英語I（体験授業）	C班（10人） 3-1 EAPII（体験授業） D班（10人） 3-4 総英III（体験授業）
15:35～ 15:50 16:10 バス出発	7時間目体験授業クラスの生徒はタイ生徒を大会議室へ案内 お別れの会 国際理解委員 お見送り	

・バスで来校（大型バス、午後は格技場横に停車予定）

・昼休み、昼食（弁当）を持って各クラスへ



3.5.5.c 台湾 嘉義高校の訪日団の受け入れ

日時 令和6年2月2日（金曜日）9：30～16：00

学校 嘉義高校（台湾 中国語授業でのオンライン交流、高校生国際会議に参加）

構成 高1：11名 高2：12名 高3：9名 計32名

引率教員: 陳元泰校長、陳淑娟（学務係）主任、魏芳芳係長

日程

	全体の流れ	国際理解委員の動き
9:30来校		
2時間目 9:45-10:30	世界の言語「中国語（高2）」 @プレゼンテーションルーム 本校生徒と嘉義高校生徒がペアになり、本校生徒が「日本語で自己紹介」の仕方を嘉義高校生に教える	終了後、 中国語選択者（2年生）国際理解委員は大会議室へ案内
3時間目 10:40-11:25	歓迎セレモニー @大会議室 司会：本校中国語選択2年生代表 参加：嘉義高校訪問団、校長・教頭・ESD部 生徒会長・中国語選択3年生有志 1 国際高校校長あいさつ 2 嘉義高校校長あいさつ 3 国際高校生徒会長（下村・1年）あいさつ 4 嘉義高校生徒代表あいさつ 5 記念品贈呈 6 記念撮影 歓迎会 終了後	
4時間目 11:35-12:10	中国語選択者3年生交流会 「しらたま団子」を一緒に作る 中国語選択者が中国語で作り方を説明し、グループに分かれてしらたま団子を調理、交流しながら試食した 中国語選択者は事前に中国語でレシピを作成、当日はスライドを使いながら説明し、実際に作りながら交流した	
昼休み 12:20-13:00	嘉義高校生徒は国際理解委員と一緒に各教室へ移動 各教室で交流しながら昼食	高1・2の国際理解委員は大会議室に「 <u>ウェルカムカード</u> 」を持って迎えに来る それぞれのクラスに入る嘉義高校生徒を教室に案内する弁当のゴミ・手洗い・教室移動等サポート
5～7時間目	各クラスで授業に参加 日本の授業を体験する	必ず授業には国際理解委員が案内
SHR 15:35-15:45	SHRで各クラスでお別れのあいさつ 大会議室に集合	HRでお別れをしたら、大会議室に案内する（一緒に来る）
15:45 15:50 16:10 バス 出発(予定)	終了の式 1 国際高校校長あいさつ 2 嘉義高校校長あいさつ 3 おみやげの贈呈（嘉義高校より）	終了の式に参加 国際理解委員は後方で参加



3.6.1 連携の広がり 概要

WWL事業最終年度となる本年度は、高校における連携先が広がった。また、これまで連携していた大学や関係機関とも、連携の回数や中身を充実させることができた。

単位認定につながる高大連携についても、次年度に向けて、奈良教育大学と新たに協議を行うことができた。

連携先	連携内容
延世大学	<ul style="list-style-type: none"> ・教員3名が大学を訪問 ・次年度スタディツアーに向けて協議を開始
国際教養大学	<ul style="list-style-type: none"> ・イングリッシュビレッジ ・出前講座（内田教授）
大阪公立大学	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムアドバイザーとしての指導助言 ・2年生対象キャリア講演会（吉田教授） ・データサイエンス講座の活用 ・研究室訪問 ・2期生が総合型選抜で進学
奈良教育大学	<ul style="list-style-type: none"> ・「世界の言語」における吉村教授の講義 ・グローバル探究Iでのフィールドワーク支援 ・次年度の大学での夏期講座の検討
同志社女子大学	<ul style="list-style-type: none"> ・大学での講義受講 ・2期生が進学
立命館アジア太平洋大学	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化理解研修 ・1期生がアシスタント役 ・2期生が進学
畿央大学	<ul style="list-style-type: none"> ・英語のワークショップ（福島教授）
東京都市大学	<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表会での指導助言（佐藤教授）
長崎東高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生平和会議への参加
名古屋国際中学校 ・高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生国際会議（奈良県） ・WWL高校生国際フォーラム参加
奈良女子大学附属中等教育学校	<ul style="list-style-type: none"> ・AYF (Asian Youth Forum)への参加
世宗国際高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・連携協定の締結 ・オンライン交流
環境省	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での講座、ワークショップの実施
(株) アイエスエイ	<ul style="list-style-type: none"> ・留学セミナー ・海外大学進学セミナー ・グローバル講演会（1年生対象）

3.6.2 延世大学

1. これまでの連携の経緯

延世大学とは令和2年度に包括的な協定を締結した。昨年度は1期生1名が延世大学に合格をいただいた。また2月には、延世大学アドミッションオフィスの方2名が来校され、今後の連携について協議を行った上で、2年生韓国語選択者に対して、直接大学の説明をしていただく機会をもつことができた。

2. 延世大学訪問

2023年12月19日～12月21日に実施した韓国スタディツアー視察において、学校長、ESD部長、1年学年主任が延世大学アドミッションオフィスを訪問した。アドミッションオフィスのNoh, Minchul氏、Park, Taehyng氏に対応いただいた。韓国スタディツアー中の大学訪問等について協議を行った。以下に協議内容をまとめる。

国際高校: 本校生徒が延世大学を訪問した際に、キャンパス内の見学、大学生との交流、研究者などによる講演は可能か？

延世大学: キャンパスツアーは可能である。大学生との交流はおそらく可能である。しかし、応募する生徒が減っているのが現状であるので、実施を確約できない。研究者による講演等は、担当者への確認が必要である。ただし、大学の学長や学部長の改選があり、その内容が3月以降に決まるため、返答などは3月以降に行って欲しい。訪問日程などもできるだけ早く教えて欲しい。

延世大学: 訪問先の具体的なリクエストはあるか？

国際高校: 現在のところ、ゼミの探究内容が決まっていないので、具体的なものはない。3つのゼミの中で探究内容を検討していく。延世大学訪問については、ゼミごとになるのか、全体になるのかについても検討する。

国際高校: 事前にZoomなどを使っての研究者や学生からのレクチャーは可能か。

延世大学: 3月以降に調整を行い、必要ならば可能である。

国際高校: 通常の大学の講義を高校生が受けることは可能か。

延世大学: 通常の講義を、大学生とともに受けることはできない。特別講義などは可能である。

3.6.3 国際教養大学出張講義

昨年に引き続き、本校及び奈良県教育委員会と教育に係る連携協定を締結している公立大学法人国際教養大学より、専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科教授内田浩樹先生にお越しいただき、講演を行っていただいた。内容は、「進路設計について」「国際人になるために」「探究活動について」の大きく3つのお話をしてくださった。

1. 日程：令和6年3月8日（金）1限～3限

2. 場所：プレゼンテーションルーム

3. 参加者：本校の高校1年生

4. 講演内容

進路設計「頑張っても未来は開けない」

国際人になるために「世界を飛び回ってもただの旅人」

探究活動「Googleに相談するのは最後にして」

5. 生徒感想

「最初から最後まで聞き入っていました。私は最初の「頑張るとは」という掴みに惹かれました。日常の中で当たり前に使っている言葉ですが、改めて辞書で引くと結構深い意味があって、実際に頑張ると言うことは難しいことだと思いました。また、大学のカリキュラムとシラバスを見ることは今回の講演を聞いてとても大切なことなのだと思います。しっかり自分で調べてみないと、本当のことは分からないし、自分の勝手な理想と現実はもちろん違って後で後悔している自分は見たくないと感じました。これは、日本国民は頭が悪いという内容の話でも同じことが言えると思いました。今後は上部だけの事実から周りの正義に便乗するのではなく、自分自身で疑問を持ち、周りに流されすぎないことは大切な力になっていくと思いました。」

「改めて今考えてる志望大学を調べてみます。正しく頑張っているか少し不安な点があるので自分と向き合って将来を考えていこうと思います。考えさせられる事が非常に多かったので整理中ではありますが、探究の仕方など色々知る事ができたので、今日の講義を生かしていけたらなと思います。」

「大学選びのことやなどを恋愛に例えた説明がとても面白くて分かりやすかったです。数値は必ずしも正しくないとわかり、自分の思い込みや元からある概念を無くしていき、グローバルな視点で物事を捉えたいと思いました。探究の取り組み方も考えた上で、大規模なものではなく高校生ならではの身近で出来ることを探していこうと思いました。長い時間たくさん貴重な話を聞かせてくださり、ありがとうございました。」

「大学は自分に合うものを見つけるチャンス」という言葉が響きました。これを機に大学のことについて考え直したいと思いました。ありがとうございました。」

「今まで様々な環境への取り組みを見てどれも地球温暖化に貢献していると思っていたけどその取り組みによって損してしまう人がいるなんて考えたこともなかったので地球温暖化に限ら

ず、一つの問題が解決すると新しい問題が出てくるからそれがなぜ出てきてしまうのか、解決策はあるかを積極的に考える姿勢が大事だと思った。それにたくさん問題が出てきたからと言って諦めずに考える力をもっとつけようと思った。」

「自分が3年かけて探究していくことは、大きく考えず自分と置き換えて考えることが大切だと思いました。また、なんでも根拠が必要だと感じました。」



3.6.4 大阪公立大学

a 吉田先生講演会

グローバル探究・キャリア合同講演会

- 1 目的：探究活動を通して、高大連携の繋がる学びを知る
- 2 日時：令和5年5月16日（火）
- 3 場所：本校体育館
- 4 参加者：2年生180名
- 5 実施内容
探究活動の意義について
今大学が（社会が）求める学生（人物）について
高校での学びから大学での学びへの流れ
高校生の今しておくべきこと

3.6.4.b 招待授業

12月13日（水）3年生10名で大阪公立大学を訪問した。高校生が大学を訪問し、大学教授や大学生との対話ができる機会である。高校生が自らの学びや変容を発表し、大学生から意見をいただける。また、教職課程を選択している大学生も受講しており、探究的な学びを進める高校や高校生の声を聞き、変化する学校現場を知ってもらう場でもある。高校生と大学生が互いに学びあえるよう設定していただいている。

2限目（11:00-12:00）

「吉田教授による特別講座」

3年生の生徒はその前日、自分たちの3年間の学びの報告会を実施したところであったので、吉田教授からは、その振り返りもしていただき、今後の進路でもさらに探究活動を深めていけるようなご指導をいただいた。探究活動での悩みや進路の迷いを持っている生徒たちには、持続可能な社会を作るために自分たちは何を学び、何を身につけるために進学するのか、どの大学にどんな教授がいて、何を学びに行くのか、「目的思考型」で考えるようにと声をかけていただいた。身近な問題に意識を持ち、探究活動をしてきた生徒たちではあるが、どこかで自分たちの探究活動に自分で制限をかけてしまっていたり、満足しているところもあったので、探究を止めないこと、深めることへの意識の持ちようなどについてもアドバイスいただいた。

3限目（13:15-14:45）

「人間形成論」

学校の概要や探究活動を軸として国際高校が育てたい力などについて担当教員が説明をした後、それぞれ生徒たちは自分たちが取り組んだ「高校生国際会議について」「探究活動の取り組みについて」それぞれ報告を行った。

1. 高校生国際会議実行委員
2. 「みんなでつくる笑顔のコミュニティ」ゼミより、「防災」
3. 「先人の知恵を未来に届ける」ゼミより「食品ロス」
4. 「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミより、「高校生の化粧品に対する意識の改革」



3.6.5 畿央大学

高校生国際会議に向けて、3年生の生徒が英語でプレゼンテーションや質疑応答をスムーズに行うために、畿央大学教育学部現代教育学科の福島玲枝先生による講義及びワークショップを2回にわたりオンラインで実施いただいた。

1回目は5月17日の1・2限に行われた。テーマは、「英語で『言いたいこと』を『分かってもらう』ように伝えるために」であった。言いたいことを表現するために、いかに文章をシンプルに言い換えるかや、英語で伝えるためには、主語・動詞を明確にすることや簡単な表現にする工夫などを、生徒がワークショップで実際にやってみる機会を多く取り入れた、充実したものとなった。

2回目は、7月5日の2・3限に、リモートで行われた。福島先生は会議室からオンラインにて講義・ワークショップを展開されたが、ワークショップでは時々会議室から各ホームルームへ福島先生が様子をみたり、生徒に声かけをしたりしながら、生徒に直接会う機会ももちつつ実施された。

テーマは「英語で互いの考えを『理解しあう』ために」であった。グローバル探究で各自が探究している内容について英語でシンプルに伝え、ディスカッションする時間も取りながら、高校生国際会議で実際にやりとりをする場面を想定しながら行われた。

2回の講義・ワークショップを通して、生徒は英語で会議を行う心の準備を整え、また実際に発表・議論を行うためにどうすればいいのかを学ぶことができた。

3.6.6 名古屋国際中学校・高等学校

名古屋国際中学校・高等学校主催 WWL高校生国際会議への参加

日時：2023年12月27日（水）9:00～15:30

開催方法：ハイブリッド型

対 面：名古屋国際中学校・高等学校

仮想空間：NTT XR Space WEB(DOOR)

（本校は仮想空間[オンライン]での参加）

日程：

9:00	受付・ログイン
9:30	開会
9:45	基調講演
10:45	休憩
11:00	アイスブレイク
11:30	昼食・休憩
12:20	ログイン
12:30	説明&企業紹介
12:40-13:35	インタビューセッション
13:45-14:45	VRカンファレンス
14:50-15:20	発表&講評
15:20	閉会

参加者：2年生生徒5名

【概要】

9:00に本校つながる一むに集合し、仮想空間にログインした。

開会行事の後、基調講演が行われた。講師はグレーターナゴヤイニシアティブ協議会の滝鈴花様。ご自身の海外での体験なども交えながら多様性を認め合うことの大切さについて英語で話してくださった。

アイスブレイクでは、仮想空間上でアバターを操作し、参加者同士が交流した。お互いの共通点を見つけるという活動であった。

昼食休憩を挟んだ後、午後からのインタビューセッションに移った。名古屋を中心に活動されている企業が8社来られ、高校生からの質問に答えてくださった。アバターを介してではあったが、本校生徒も自分の探究テーマに関わる質問を準備し、質問をした。

VRカンファレンスでは、名古屋国際中学校・高等学校が提案する「New Borderless Education」に向けて、高校生ができることは何かについて参加者同士が話し合った。話し合いの結果をまとめ、それぞれのグループが発表した。最後にご講評をいただき、閉会した。

今年度はオンラインでの参加となった。参加生徒からは、やはり会場まで行って対面で直接交流したいとの声が上がった。しかしながら、誰でも、どの場所からでも参加できる仮想空間での会議はまだ珍しく、このような新しいスタイルの会議への参加は非常に有意義なものであったと感じられる。今回の先進的な取り組みに関わった経験は、生徒の今後の活動にも役立つだろう。



参加者の様子

3.6.7 同志社女子大学

1 目的：同志社女子大学と締結した高大連携を図り、大学での学びを体験することで知る機会を持つため。

2 日時：令和6年2月22日（木）

3 場所：同志社女子大学（京田辺キャンパス）

4 参加者：1年生2名 2年生9名

5 実施プログラム

大学紹介

キャンパスツアー

模擬授業

卒業生からのメッセージ

6 生徒感想

・授業の内容などが細かく知れて良かった。
聴診器で自分の心音を聞くなどの体験ができて興味深かった。

・バイタルサインについて学ぶことができました。足浴が患者さんにとってとても大事なあり、
血圧、脈拍の数値の見方も教えてもらってとても、興味深かったです。自分の心音を聞けて楽しかったです。

・話を聞いているだけじゃなくて、私たちに質問を問いかけてくださったのでたくさん発言でき、そして自分たちで考えるというような授業だったので楽しかったです。



3.6.8 株式会社アイエスエイ

グローバル講演会

- 1 目的：海外留学、海外大学進学について知る
- 2 日時：令和5年5月16日（火）
- 3 場所：本校体育館
- 4 参加者：1年生117名
- 5 実施内容
 - TOEFLゼミナールより
在学中の海外留学支援について
 - ISAより
海外大学進学支援制度について

感想

自分の勉強や進路について基本的なイメージしか持っていなかった生徒にとって、高1の最初の段階でこの講演会に参加したことは、将来の計画を立てるための具体的なアイデアになったはず。

また、国際高校を選んだ生徒の大きな動機のひとつは、海外留学または海外進学のチャンスであり、予想される英語レベルや実際にかかる費用についての情報は有益であり、早い段階からそのための計画を立てるのに役立った。

3.6.9 環境省

「環境省・外務省について知ろう！」 「SDGsカードゲーム」

実施日時：令和5年5月17日（水）

対象： 3・4時間目：高校1年生（3クラス）

5・6時間目：中学1年生（2クラス）

講師：外務省 田代 久美さま

環境省（近畿地方環境事務局）岡崎 真由美さま、田上 広樹さま、土田 真由さま

内容：

【高校生】

1. 環境省ってどんなところ？
2. SDGsについて
認知から行動変容へ
3. 知りたいことを聞きに行こう（4人の講師に聞いてみよう）

4人の講師のそれぞれの経験や経歴についてお話いただいた後、高校生からも質問が飛び交いました。外務省・総務省・環境省など各省庁のお話や、世界へ羽ばたく方法やそこから得たことなど、人生の先輩からのアドバイスもたくさんいただきました。



【中学生】

SDGsカードゲーム：「協力は強力！」力を合わせてバランスの取れた社会を作ろう！

ファミリーにわかれて「社会・環境・経済」がバランスの取れた世界にするにはどうすればいいかを考えました。



3.6.10 Asian Youth Forum for Sustainable Future (AYF)

1. Asian Youth Forum for Sustainable Future (AYF)の概要：

アジア各国の生徒がホスト校に集い、その年のテーマについて協同的な学びを深める国際交流事業。今年は、奈良女子大学附属中等教育学校がホスト校となり、海外の生徒を招いて、対面にて実施した。日本以外の国からは、インドネシアから2校、韓国から2校、台湾から1校、ベトナムから1校が参加した。今年のテーマは、“Sustainable cities and communities: What can be done to make cities and human settlements inclusive, safe, resilient, and sustainable?” で、持続可能な街やコミュニティについてプレゼンテーションやディスカッションを行い、学びや考えを深めた。

2. 日程：令和5年7月28日（金）～ 7月29日（土）、7月31日（月）～ 8月1日（火）

3. 場所：奈良女子大学附属中等教育学校
大和ハウスグループみらい価値共創センターコトクリエ

4. 参加者：ESS部員 2年生2名、3年生3名

5. 活動内容

7月28日（金）

- ・開会式
- ・AYFについての説明
- ・文化・学校紹介プレゼンテーション
学校についてや国の文化について紹介をした。
- ・アイスブレーキングアクティビティ（クイズ、ぼうずめくり、書道体験）
- ・音楽、ダンスパフォーマンス
- ・ウェルカムパーティー

7月29日（土）

- ・大和ハウスグループみらい価値共創センターコトクリエ 施設見学
- ・奈良市内観光
グループで奈良市内を散策した。各グループにそれぞれの参加校の生徒が配属されていたので、英語を使ってコミュニケーションを取りながら、楽しい時間を過ごした。

7月31日（月）

- ・今年のテーマに沿ったプレゼンテーション
本校は、**inclusive society, safety, sustainable preservation** について現代社会での問題や課題を挙げながら、それらにどう取り組むべきかを「自分たちに何ができるのか」という視点で発表を行った。
- ・ポスタープレゼンテーションの準備

8月1日（火）

- ・ポスタープレゼンテーションの準備
- ・ポスタープレゼンテーション発表
- ・フェアウェルパーティー

6. 生徒感想

- ・世界で何が起きているのかをもっと学ぶ必要があるときづいたし、英語を学ぶ必要性を感じた。
- ・とても良い時間を過ごすことができた。
- ・英語を上達させるモチベーションにつながったので、参加してよかった。



3.6.11 WWL高校生国際平和会議

長崎県教育委員会・長崎県立長崎東高等学校主催の令和5年度WWL高校生国際平和会議と、生徒交流会並びに合同平和フィールドワークに本校第3学年の生徒2名が参加した。本会議は、これからの未来社会を担う国内外の高校生が、グローバルな社会課題についてディスカッションを行うなかで学びを深めるとともに、友好交流の契機とすることを目的としている。

1. 事前会議

本番の国際会議を踏まえ、会議の練習の場として事前にプレ会議が実施された。日程は6月14日、6月28日、7月12日、7月19日の4日間である。仮テーマを設定して、オンラインで他校の参加者と議論をするなかで、協働性や自己表現力を高めた。

2. 生徒交流会・合同平和フィールドワーク

国際会議前日の7月27日に実施された生徒交流会・合同平和フィールドワークに本校生徒2名も参加した。国際会議参加生徒との交流やフィールドワークを通して、友好を深めるとともに平和への見識を深めることを目的としている。当日の流れは以下の通りである。

- ・ 歓迎行事・生徒交流会（長崎東高等学校）
実行委員による挨拶・アイスブレイク・レクリエーション
- ・ 合同平和フィールドワーク
平和公園・原爆資料館見学・ガイドによる説明・資料館内会議室で対話会

3. WWL高校生国際平和会議

7月28日に長崎ブリックホールにて開催されたWWL高校生国際平和会議に本校生徒2名が参加した。長崎県内から5校、県外から7校、国外から5校が参加し、SDGsを踏まえた社会課題についてのパネルディスカッションを主に行った。会議の主題は、SDGs17の項目を4つのカテゴリーに分類し（共生・環境・社会・経済）、参加者は興味関心に応じたテーマについてグループで議論を行った。それぞれのカテゴリーにおいて、「英語の部」と「日本語の部」の2部門でディスカッションが実施された。当日の流れは以下の通りである。

- ・ 開会式
校長挨拶・管理期間挨拶・国際平和会議実行委員長
- ・ 基調講演
NPO法人Red Wood Japan 住吉正治先生
- ・ 国際平和会議
「経済」「社会」「共生」「環境」（日本語の部・英語の部）
- ・ 高校生平和共同宣言
- ・ 閉会式
来賓講評
国際平和会議実行副委員長挨拶



3.6.12 世宗国際高校 MOU締結

1. 大韓民国大韓民国世宗国際高等学校とMOU：Memorandum of Understanding（基本合意書）を締結した。MOUの内容を以下に抜粋する。

大韓民国世宗国際高等学校と日本国奈良県立国際高等学校は、奈良韓国教育院を通じて2023年3月から共通の教育目標と国際的展望に基づいて交流を始めることに合意した。両校間国際交流の覚書を通じて両校の関係を正式なものとし、世宗国際高等学校と奈良県立国際高等学校の長期的な関係を構築していきたい。交流を通じて生徒の知識、理解を深めグローバルな教育経験を積むことで、生徒が世界に出て韓国と日本の両国関係を強化できるようにするとともに、指導する教員の力量の向上も目指す。両校は次のような相互交流計画を推進する。

1. カリキュラムを通じた交流
 - A. オンラインによる講義、セミナー、授業への参加及び対面交流
 - B. 両校教員の協力を通じて生徒が国際的理解を深めるための授業交流
2. 国際交流
 - A. 文化的理解と発展を図るための生徒及び教員のオンライン交流
 - B. 地球規模の課題に関する会議でのパートナーシップ
3. 相互訪問交流
 - A. 生徒と教員に対する理解を深めるための両校訪問交流
両校の責任者は、世宗国際高等学校と奈良県立国際高等学校間のコミュニケーションと活動を管理する責任があり、年間交流を互いに計画し合意する。

2. 上記MOUは、世宗国際高等学校 Park Hidong校長、Juyeon Noh氏、Hyein Lee氏、Lee Kiho氏が国際高校に来校し、奈良韓国教育院、宋達庸院長、李常美室長の立ち合いのもとに調印された。その内容を以下に記す。

日時：2023年5月31日（水）15:00-15:40

場所：奈良県立国際高等学校 大会議室

日程

13:30	訪問団来校
13:55-14:40	3年生韓国語の授業見学、生徒による学校紹介
15:00-15:05	1 開式
15:05-15:10	2 日本韓国教育院 宋院長 挨拶
15:10-15:15	3 世宗国際高校 Park校長 挨拶
15:15-15:20	4 国際高校 中尾校長 挨拶
15:20-15:25	5 協定書にサイン
15:25-15:30	6 記念品の交換
15:30-15:35	7 記念撮影
15:35-15:40	8 閉式



4 成果と課題

4.1 コンソーシアムの成果と課題

a. 成果

・学びのネットワーク構築

3年間をかけて、徐々に連携校や協働機関は増え、生徒が県内、県外、国外の生徒との学び合い、教員以外の大人からの学び、また大学等の高度な学びの機会を得ることができた。また、生徒だけでなく、生徒の探究活動を通して教員同士が学び合うことも可能になった。拠点校において開発、推進してきた探究活動のカリキュラムが、公開授業や成果報告会等の機会に共有され議論されることで、県内の他校でもノウハウを生かすことが徐々に出てきている。

・高校生国際会議

第2回の高校生国際会議は対面、オンラインのハイブリッド方式で開催することができた。約50名の学校の枠を越えたALネットワーク校からの運営生徒が準備、運営にあたり、当日は県内外、国外から約60名の発表者を迎えることができた。

生徒にとっては、取り組んできた探究活動の最大の成果発表の場であるこの会議であるが、大きなハードルとなっているのがすべて英語での進行であるという点である。発表生徒はもちろん、運営生徒も英語での進行、議論をスムーズに行うために、当日まで多くの努力を重ねた。とくに運営生徒は、外国人講師による支援、指導の機会を多く設定し、英語運用力を高めた。普段直接関わりのない様々な人に自分の考えを共通言語の英語を用いて伝え、議論することは、多くの高校生にとって大きなチャレンジであるが、これからのグローバル社会を生き抜き多くの課題を解決するために、その力をつけることの重要性を再認識した。

これまでの2回の高校生国際会議は、主に探究活動の発表の場という性格をもっていた。様々な場所で発表機会が増えたおかげで、生徒たちは人前でも生き生きと考えを述べる力をつけることができた。今後は、「発表」から深い「議論」の場へと徐々にステップアップさせていく必要がある。自分の考えを述べ、人の考えを聞き、議論を交わして最善の着地点を見出すプロセスを、英語を使ってより多く経験できるような会議に今後していきたい。

b. 課題

・成果の波及

拠点校や連携校での取組をどう共有し、広げていくかが今後の課題として挙げられる。連携校の中には、他事業に取り組む学校も多くあるが、それを様々な視点での探究が共有できる良いチャンスとしてとらえ、積極的に学校間で連携を図る必要がある。教員の負担を増やすことなく、学校間で連携、共有していくシステム構築のための工夫が必要である。3年間の取組を拠点校だけの一過性のものにしないよう、県全体へ成果が波及するよう取り組んでいきたい。

・財政支援

これまでの取組を今後継続させていくため、予算をどう確保していくかは大きな課題である。まず、事業終了後にも持続可能な取組としていくため、県での予算化の検討や、各取組の内容面での工夫が必要になってくると思われる。また、各校において、とくに海外研修や海外との交流にかかる費用が一番の問題となっており、現地に滞在して実際に体験して学ぶことの価値の大きさは認識しつつ、その費用面でのハードルから実現できない現実がある。ネットワーク校で合同で海外ワークショップを実施するなど、共同研究も視野に入れた取組を検討していきたい。

4.2.1 拠点校の取組の成果と課題

a. 3年間の成果

<カリキュラム開発>

- ・探究の自律化

「グローバル探究」では、「ジブンゴト」として課題をとらえる、生徒のモヤモヤ感を大切にす、答えよりも問いを重視することなどを通して、探究の自律化に力をいれたカリキュラムを構築することができた。

- ・生徒のタテのつながり

探究週間に行う「たてにつながる探究交流会」を年に数回実施することによって、上級生には多面的な意見との出会い、下級生にはロールモデルとの出会いを提供することができた。

- ・教科における探究的な学び

全教員が「グローバル探究」に取り組むことで、自身の教科においても探究的な学びを取り入れる授業を計画することができた。

- ・多様な言語・文化への興味

「世界の言語」で、高校1年次に、日本語、英語以外に、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、日本手話などに会うことで、多様な言語・文化への興味・関心をもつことができた。長期留学22名中8名が留学先にドイツやフランスを選択している。英語以外の言語を学べる学部、学科を進学先に選択する生徒も多くいた。生徒会では、5か国語でのクリスマスを自ら企画するなど、生徒の中に、多様な文化に対する興味・関心が高まった。

<海外とのつながり>

- ・「世界の言語」で学んでいる5言語（中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語）を話す国すべてに連携校ができた。1年目の新規開拓、2年目の試行実施を経て、本年度は5つの言語を選択しているそれぞれの生徒が、学期に1回のオンライン交流ができるようになった。

- ・長期留学

この3年間で、長期留学に向かった生徒は合わせて22名となっている。

- ・留学生の受け入れ

3年間で19名の長期留学生を受け入れることで、学校内に「多様性」「寛容さ」などを育むことができた。

<高度な学び>

- ・さまざまな大学と連携し、出張講義や大学でのワークショップなどを実施することができた。

- ・海外大学進学

令和5年春に卒業した1期生は7名が海外大学に合格し、5名が進学している。

b. 課題とこれからの方向性

<カリキュラム開発>

- ・探究の高度化

カリキュラムを深化さて、高度化に取り組んでいきたい。

- ・教員のタテ・ヨコのつながり

教員間の連携を深めることで、それぞれの教員が3年間蓄積してきた実績を共有していく必要がある。

- ・教科間のつながり

教科横断的な学びをより一層推進するため、中学校の国際バカロレアプログラムで試行実施をしている「IDU（学祭的な単元）」を高等学校でも実施していきたい。

- ・多様な言語・文化の比較

「世界の言語I」では、言語間の差異や共通点を見つけ出す機会をより多く設け、言語に対する意識を高めていくことができるよう、カリキュラムを深化させていきたい。また、国際交流を通して、多様な文化と自らの文化を比較し、受け入れるような機会も多くもちたい。

- ・議論できる国際国際会議

より議論を深めるため、これまで1日で開催していた高校生国際会議を複数日にする。また、議論を深めることができるよう、事前に外国人講師による英語のワークショップを実施する。

<海外とのつながり>

- ・対面での交流

海外連携校の生徒を受け入れたり、連携校への短期海外研修を企画し、対面での交流の機会を増やしていきたい。

- ・日本人生徒と留学生の学び合い

高校生国際会議や英語で実施する授業を実施することで、留学生とともに学びあうことができる機会をこれまで以上に創出する。

<高度な学び>

- ・継続的な連携・単位認定

奈良教育大学をはじめとした、さまざまな大学と協議を進め、単位認定のシステムを構築していく。

- ・海外大学進学支援

奨学金の説明会を増やしたり、低学年からIELTSやTOEFLを意識した英語力向上をサポートするなど、海外大学への進学にむけた体制をより一層強化する。

- ・国際バカロレアプログラムの導入

MYPの認定、DPの候補校申請に取り組んでいく。

4.2.2 生徒・保護者アンケート結果

保護者・生徒向けアンケート結果

奈良県立国際高等学校

対象	項目	アンケート内容	肯定的回答 (%)		
			1年生	2年生	3年生
生徒	教育方針の共有	国際高校で「身につけたい力」について理解している。	94.7	81.9	92.0
	特色ある教育	国際高校では、特色ある教育活動が行われている。	96.8	93.1	98.2
	危機管理体制	学校では、安心して過ごすことができている。	92.5	85.2	92.0
	情報発信	学校は、classiやホームページなどで必要な情報を提供している。	83.9	80.1	81.7
	個別の生徒対応	先生方は、悩みや相談に適切に対応してくれている。	88.2	77.6	94.5
	多面的評価	先生方は、テストだけでなく様々な面から成長を評価してくれている。	89.2	74.2	92.7
	学習意欲	学校の授業は、やる気を引き出すものとなっている。	77.4	60.4	75.6
	進路保障	学校の授業は、進路希望に応じたものとなっている。	89.2	75.8	86.6
	家庭学習	家庭での学習に熱心に取り組んでいる。	64.5	68.1	63.5
	充実度	充実した学校生活を送ることができている。	94.6	85.4	93.3
	満足度	国際高校に入学してよかったと感じている。	95.7	76.7	89.0
保護者	教育方針の共有	学校は教育方針や教育内容をわかりやすく伝えている。	85.7	76.3	86.7
	特色ある教育	学校では、特色ある教育活動が行われている。	98.7	92.7	97.4
	危機管理体制	学校は、危機管理や安全対策に努めている。	81.8	77.3	72.0
	情報発信	学校は、保護者への情報発信に努めている。	87.1	75.3	81.4
	個別の生徒対応	教職員は、お子様の悩みや相談に適切に対応している。	87.0	80.4	82.7
	多面的評価	学校は、テストだけでなく様々な面からお子様の成長を評価している。	92.2	88.7	93.3
	学習意欲	学校の授業は、お子様のやる気を引き出すものとなっている。	84.4	76.3	81.3
	進路保障	学校の授業は、お子様の進路希望に応じたものとなっている。	85.7	84.5	86.7
	家庭学習	お子様は家庭での学習に熱心に取り組んでいる。	53.5	60.8	72.0
	充実度	お子様は充実した学校生活を送っている。	94.9	90.7	89.3
	満足度	お子様を本校に入学させてよかったと感じている。	94.8	88.7	90.7

生徒向け授業アンケート結果

奈良県立国際高等学校

アンケート内容	肯定的回答 (%)	
	1年	2年
おもしろい内容で興味や関心がわく授業である	82.6	76.2
iPadやプロジェクター等ICT機器を効果的に活用した授業である	80.8	78.6
生徒の活動（話す・聞く・読む・書く）を重視した授業である	80.7	78.3
説明が明確でわかりやすい授業である	85.6	78.4
あなたは、集中して授業に取り組んでいる	90.6	84.8
あなたは、学力が身に付いていると感じる	80.8	76.0

3年生向け総括アンケート結果

奈良県立国際高等学校

項目等	内 容		(%)
英語	生徒の活動（話す・聞く・読む・書く）を重視した授業であった。	肯定的回答	94.6
	英語の力が身についたと思う。		80.8
iPad	授業では、iPadが効果的に使われていた。	肯定的回答	91.7
	iPadは自分の学習に役立った。		92.3
	iPadは学校外での学習に役立った。		92.9
	探究的な学習（自ら疑問をもち、それを解決する学習）に役立った。		97.4
グローバル探究 【学校設定科目】	グローバル探究に取り組むことについて		
	あなたの「知識を活用し、課題を解決する力（探究力）」はついたと思いますか。	肯定的回答	91.7
	あなたの「協力・協働して互いに高め合う力（協働力）」はついたと思いますか。		93.0
	あなたの「試練を克服し前進する力（挑戦力）」はついたと思いますか。		91.0
	あなたの「新たなアイデアを生み出す力（創造力）」はついたと思いますか。		92.3
	グローバル探究に取り組むことで、あなたの「文化や考えの違いを大切に する力（寛容さ）」はついたと思いますか。		95.5
	あなたの「進路に向けて行動を起こす力（キャリアデザイン力）」はつ いたと思いますか。		90.4
	グローバル探究の中で、最も印象に残っている、学びがあったことは次のどれですか。		
	ボルネオ島の生物多様性		20.4
	ゼミでのファミリーとの活動		32.0
	スタディツアー		58.5
	高校生国際会議		23.1
	論文作成		21.1
	グローバル探究で学んだことは、あなたの進路希望をかなえるために役立 ちましたか。	肯定的回答	58.4

世界の言語 【学校設定科目】	以下は、世界の言語を3年間選択した生徒のみ回答してください。		
	身近な内容について、話したり聞いたりすることができる。	肯定的回答	43.3
	身近な内容について、聞いたり読んだりすることができる。		42.2
全体を通して	国際高校で魅力的だったことは次のどれですか。		
	グローバル探究		44.4
	英語		35.9
	世界の言語		56.3
	タブレット活用		57.0
	イングリッシュビレッジなどの課外活動		19.7
	国際交流		41.5
	在学中に海外留学できること		6.3
	留学生と学ぶこと		28.2
	部活動		18.3
	自分の将来を見据えて		5.6

3年生向け総括アンケート結果（記述回答）

【英語】英語の授業について感想を書いてください。

- ・全て英語で行われていたので聞き取りもできるようになったし、英語で自分の意見をスラスラ書けるようになったのですごく良かった。
- ・会話をする機会が豊富にありスピーキング力・リスニング力が上がったと実感している。
- ・エッセイライティングやディベートディスカッションなど様々な英語の授業があり、国際高校の特色だと感じた。全員が主体となって進める授業だった。
- ・話すことに特化している感じでよかった。会話に慣れることができた。実践的な授業であり、入学前よりも自分がレベルアップした。
- ・グループワークやペアワークが多かったり、プレゼンで前に立って話す機会が多くあって、自信がついた気がする。
- ・「文法」の授業が3年生から始まるのは本校だけだと思うから受験の時に周りとの差で困った。高1から日本語で説明する授業があってほしかった。入試のための授業じゃなくて、社会に役立つ授業だった。オールイングリッシュの授業は中途半端だ。オールイングリッシュにこだわることでむしろ使う英語のレベルが下がっていると感じた。
- ・もう少しリーディングに焦点を置いて欲しい。文法や単語を学ぶ時間も取り入れてほしかった。
- ・1、2年生のときに応用。3年生の時に文法などの基礎みたいな感じの授業で順番が逆に感じて難しかった。話す・聞く・読む・書くは勉強になったが「文法や長文読解」などは不十分に感じた。
- ・ネイティブの先生の発音など生きた英語を聞けてよかった。英語で話す機会が多く、実用的な英語を学ぶことができ良かった。しかし、受験的な英語にはあまり対応していなかったと思う。
- ・授業がすごく楽しかった。文法をしながら発音も教えてくれるので英語の知識でなく海外で使える英語の知識を学ぶことができた。英語の授業はAll Englishなのでリスニング力は自然に身についたと思う。ただ話す機会がまだ少なく英語を話すことが恥ずかしいと思う生徒が多くカタカナ英語になりがちなので、そうならないような対策をすればよりネイティブ感のある英語を話せるようになると思う。

【グローバル探究】グローバル探究の中で、最も印象に残っている、学びがあったことについて、その理由を教えてください。

- ・高校時代に最も長時間かかって「プレゼン準備」や「論文」に取り組んだこと。2年間を論文作成に使ったため、一番大変だと思った。
 - ・グループのみんなと発表したこと、自分たちで行動する大切さを学ぶことができ楽しかった。
 - ・同じゼミの生徒たちが、自分にはない視点から様々な社会問題や些細な疑問に目をむけていることが理解できて興味深かったし、新たな視点を得られる良い機会になったと思ったから。
 - ・プレゼンテーションで、自分の研究内容を客観的に知れた。今まで考えたことのない、社会の問題の連鎖に気づけたこと。
 - ・授業の一貫として、学校のサポートがあるので実際に自分達で計画し、行動出来る事で、SDGsについて体感出来るところがいいと思った。
 - ・ゼミのファミリーと話し合うことが多く、自分が探究したいことについて深く知れたから。
 - ・活動をどう進めていくかなどの話し合いを沢山し、楽しさを見つける努力をしたこと。人に賛同してもらう難しさを知った。
 - ・色々な人と交流して色々な体験ができた。学校外での店舗インタビューなど皆と様々な場所に回ったのしかった。実際にお話を伺うことで学びを深められた。
 - ・知らなかったことを自分たちで調べ正しい情報判断などをすることができ、課題解決をしていくには沢山の人の協力が必要であることを改めて実感した。
 - ・ゼミのメンバーで街へ直接行き、考える時間や探究する機会があったこと。
 - ・世界遺産や自然遺産に実際に触れてその偉さや重要さを再確認することができたから。
 - ・ファミリーで話し合いながらプレゼンもしたし、高校ではなかなか無い論文作成を経験することができた。
 - ・自分たちで探究について大きく行動に起こしたのは初めてだったから。
- その探究結果に対して、学びがあったから。
- ・フードロス削減のためにいろんなところで解決策が生み出されていること。フードバンクやドギーバッグ、フードロス削減のための企画等を探究する中で知れたから。
 - ・自分の興味がある分野でファミリーで同じ話題を話し合いを沢山したことで、自分の中で定着し知識が増えたこと。
 - ・ボルネオ島は高校に入って初めて本格的な探究活動だったので自分も皆も好奇心が高かったこととクイズなどもあり楽しかったこと。
 - ・ボルネオ島などの地球の問題についての話は、最初ものすごくインパクトがあり、身近に様々な問題が潜んでいることを思い知らされた。
 - ・高校生国際会議では新たな学びが沢山あって、学年別・学校別の意見を聞けるのでとても良く、しかも協働の大切さを学んだ。実践的な取組ができ、色々な意味で衝撃的であった。
 - ・高校生国際会議です。私は国際会議でポスターセッションとして参加したので、自身が探究をしていた内容を様々な方に伝えることができ、とても嬉しかった。
 - ・高校生国際会議の中で提言作成委員のファシリテーターとして参加した。何かハプニングが起きても臨機応変に対応する力が身に付いたと感じる。また、自分の得意なことを新たに発見することができた活動だった。

- ・今まで探究してきた内容を振り返ってどんなことをしてきたのかを再認識できた。
- ・他の学校との交流、意見交換などの話し合いができた。自分の理想に最も近かった探究活動だった。
- ・スタディーツアーで様々な人に出会えた。色々な考え方を知れた。普段では行けないような場所にも行くことができ、日頃体験できないような問題に実際に触れて解決するためにどうすれば良いか学ぶことができるよい経験になった。
- ・スタディーツアーで実際に現地に行くことで様々な学びを見つけることが出来た。探究という目的を持ちながら旅行できた。
- ・少し普通の修学旅行と比べてしまったけど、普通に過ごしてたらなかなか得られない経験が出来たので良かった。
- ・スタディーツアーの中で、私の所属する「人権に関するゼミ」では他のゼミに比べて直接つながることが少なかったのは残念だった。
- ・普段あまり触れ合うことがない職種の人のお話を聞いたことでスタディーツアーが印象に残っている。

【グローバル探究】あなたの進路に具体的にどのように役に立ちましたか。

- ・大学の学部での学びに繋がり、未来を見据えることができ、可能性が広がった。
 - ・面接の時のアピールポイントや志望理由に強みとして使うことができ、自分の進路はグローバル探究で学んだことを深く学べる学部を決めるきっかけになった。
 - ・日本以外の国に意識を傾ける契機になり、そこから自分の進路を決めることもできた。
 - ・全国高校生プレゼン甲子園の経験が入試に役立った。
 - ・自分の進路と高校時代の探究活動を交えて考えることができ、自分の興味のあることを見つけることができ、将来の選択に繋がった。
- (海外の文化に触れる学科、グローバルに学べる学科等々。)
- ・外国語学部へ進学するので海外との交流は欠かせない。グローバル探究で得た寛容性や視野を広く持って世界や諸問題に目を向ける力は役に立ったと思う。
 - ・大学で卒論やレポートを書くにあたり、良い経験になったと感じられる。
 - ・論文を英語に訳したりするのが大学に行ってから経験してるのとしてないのでは絶対に経験しての方が良い考えるので役に立ったと思う。
 - ・グループディスカッションで周りの人の意見を聞き、それをまとめる力が身についたことは必ず将来役に立つ。
 - ・世界のいろいろな問題を知ることができ、日常生活で気を配ることができた。
 - ・大切な人を失った時の人々の機微や、臓器移植に対しての国や集団としての考えが心理学にリンクしていたため、移入しやすかった。
 - ・ボルネオや他の問題について深く知り、生活に役立て意識しようという意識が芽生えた。
 - ・様々な視点から物事を見ることの大切さ、今後の社会問題をどう解決するかに気付くことができた。

【世界の言語】（3年生で世界の言語以外を選択した生徒対象）

世界の言語を2年間学んだ感想を自由に記述してください。

・他の言語を知るだけでなく多様な文化に触れることができ、日本との比較も考えることができ、視野が広がり楽しかった。日本のそれらの言語に関係する地域に足を運ぶようになった。

・多言語に触れられる機会があり、本校の良さだと思う。学習した言語がスラスラと読めるようになった。

・いろんな言語に触れられて楽しかったが、難しい点も沢山あった。新たな言語に興味をもつことができた。

・2年間を通して思っていたよりも身についたので、やって良かったと感じます。これからも続けたいです。

・ネイティブの先生方の発音をはじめ、言語の使い方、多言語どうしの繋がりなどを学べたのが良かった。とても親切で分かりやすく実践的な授業であったのでとても身についた。

・将来の進路を決めるキッカケになった。様々な言語と関わることができて良かった、楽しかった。

・日本語、英語以外にも他国の言語はもちろん、文化やその土地の有名なもの(食べ物や建物)をたくさん知れてもっと海外に行ってみたくなった。

・今学んだ言語をさらに深めてみたいと思った。個人的には、イタリア語があっても損はない気がした。

・入学前に学びたいと思った言語とは違うものを選んだけど、おかげさまで学ぶことが楽しくなって、今後も継続していきたいと思った。

・学びたい言語を学べたし、それを使う機会が少なかったけどあって、楽しかった。

・少し学ぶことで日常生活で見かけた言語に興味を持つようになり、簡単な文章なら読むことができ、学んでよかった。資格を取れるようにサポートしてくれたから頑張ることができた。

・言語能力だけでなくその国の文化も知ることができ、世界の言語を学べてよかったと思った。交流会も開いていただき、実際ネイティブスピーカーと本格的に話したり、ゲームや交流、文化的背景を知りながら学ぶことができて楽しかった。

・交流を何回もすることができたのでとても楽しかったし、他の国の文化も触れることができていい思い出になった。世界の言語は、とても新しい試みだと感じた。

・学校で第3言語に触れられるのは私にとって良い機会になったし、普段から役に立てられる知識としてもっておけるのでとても良かった。

【世界の言語】世界の言語を3年間学んだ感想を自由に記述してください。

・ネイティブの先生による言語活動を学ぶことができて、楽しかった。

・学ぶ機会があって良かった。新しい言語の基礎を学ぶことができて、これからの人生の一つの糧になったと思う。

・楽しかったが、楽しかった。言語の面白さに気付き言語を学ぶことに対する意欲が高まった。この授業をきっかけに大学の方向性を考えた。英語以外の言語にも興味をもつことができた。

・言語の幅が広がり、授業は楽しかったが、その内容は難しく、思うようには習得はできなかった。

・いろいろな言語や文化に触れることができ、自分の知らなかった国の行事など知ることができて楽しかった。

・英語とはまた違う言語と思っていたが、案外そうではなく似ているところもあったので意外と話すことができた。

・その国の文化を知れたし、言語の基礎知識も身につけることができ、全般的に視野が広がった。

・学んだ言語を生かしたの交流が多くて楽しかった。歌うことも多く楽しかった。これからも学んでいきたい。

・スピーチコンテストも沢山受けることができたし、他国との交流も沢山できたので楽しく、様々な面が身についた。

・ネイティブスピーカーと本格的に話したり、ゲームや交流、文化的背景を知りながら学ぶことができて楽しかった。

・楽しく学べたと思う。軽く知識をつけてるだけだと感じるところはあったが、小さな興味をもって入っている人もいるので、そういうレベルの授業になるのかなと思った。何より楽しく学べることができるからこそ、独学しようと思ったのかなと思う。

・1年生の時から様々な言語に触れ、話す機会が多かったことが、海外に行つて外国の方とコミュニケーションを取る上でも役に立つと思う。

・言語を学ぶことでその言語が使われている国について知るきっかけになったし、なにより言語を学ぶ楽しさを知れたので良かった。

・学んだ言語のコンテストに参加し、自分の学校以外で同じくその言語を学んでいる高校生と出会える機会を経験することができた。今後その語を学び、深めていく上でとても良い刺激になったと思う。

・3年間学習を続けたことは自分にとって、自分の進路や将来に繋がる大きい学びだったと感じている。英語以外の外国語を学ぶことについて、初めは難しい事だと考えていたが実際に勉強して自分が英語の勉強を始めた時とはまた違う、成長した感覚？で学ぶことが楽しくこれからも、学んだ言語を続けたいと強く思えた。また、海外の生徒と実際に交流したり、コミュニケーションをする機会が多くあったのでそこで得た力もすごく大きいものになった。

「グローバル探究」の評価分析について

学校法人 河合塾
 学校事業推進部
 山口大輔

1. これまでの経緯と今年度の分析概要

過去2年間では教育理念に基づいた「育てたい6つの力」の育成のために、グローバル探究の時間に使用する「セルフチェックシート」の作成と実践により、生徒への意識づけと生徒自身が成長実感を得られる仕組みを構築した。加えて効果測定のために、生徒による自己評価結果の収集と、客観評価指標としての「学びみらいPASS（以下MMP）」を導入し、ジェネリックスキル（図1参照）と育てたい6つの力の関係性を整理（図2参照）したことで、グローバル探究の効果を多面的に評価する仕組みを構築した。その結果、1期生（20年度→22年度）においてはリテラシーの「情報分析力」、コンピテンシーの「課題発見力」「計画立案力」の成長が確認でき、育てたい力で見つかる場合には、「探究力」「創造力」「キャリアデザイン力」における成長が確認できた。

図1_MMPで測定するジェネリックスキル

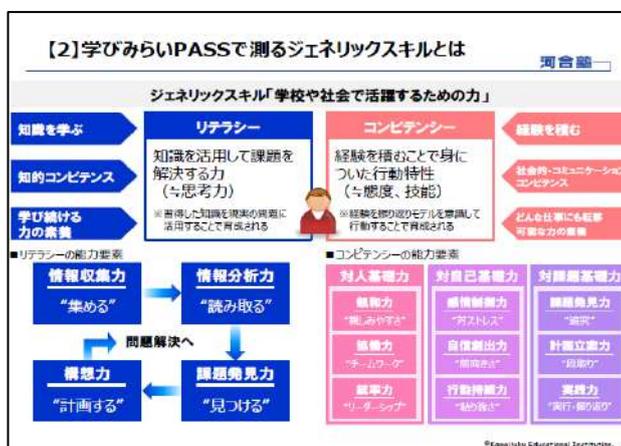


図2_「育てたい力6つの力」とジェネリックスキルの紐づけ

	リテラシー 総合	コンピテンシー								
		対人			対自己			対課題		
		親和力	協働力	統率力	感情制御力	自身創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
探究力	●							●	●	
創造力	●									●
協働力		●	●	●						
寛容さ		●				●				
挑戦力						●	●			
キャリアデザイン力	●				●	●	●	●	●	●

今年度はMMPの結果分析を中心に、2・3期生のジェネリックスキルおよび育てたい力の伸長がどうであったのか、また昨年の自己評価の変化に対して客観評価の変化は一致するのか？ズレが生じるのか？などを見ていくことにした。

以下に今年度行った代表的な2つの分析結果について報告をする。

2. 【分析①】2,3期生の過回分析

(1) 分析概要

21年度～23年度のMMP結果より、2期生は高1から高3にかけて、3期生は高1から高2にかけてのジェネリックスキルの成長、および育てたい力の成長について分析を行った。データ件数は2期生175名、3期生173名である。

(2) ジェネリックスキルの成長について

2期生の高1～高3の平均点をみると、特に伸びている力は昨年(1期生)と同様にリテラシーの「情報分析力」になっており、「集めた情報を客観的かつ多角的に分析する力」が身についた生徒が多かったようだ。コンピテンシーでは「感情制御力」「自信創出力」が伸びており、「自分の気持ちをコントロールする力」「前向きな考え方ややる気を維持する力」といった対自己に関わる力の成長が見てとれる。いざ勝負と言う時に自分の持てる力が発揮できる生徒が多いとも言える(図3参照)。

ただし「実践力」が高1から高2にかけて下がったままであることにも触れておきたい。実践力とは「課題解決に向けて自ら行動し、検証・改善をする力」であるが、ここが下がったことと上述の対自己が上がったことを合わせて読み解くと、過剰なポジティブ思考からいざという時も何とかするという気持ちが強くなりすぎ、自ら進んで行動することを妨げたり振りかえりをせずやりっ放しとなっているというケースが散見されるかもしれない。

次に3期生の高1～高2の平均点をみると、リテラシーの伸びについてはやや苦戦している姿が見てとれる。コンピテンシーにおいては2期生と同じように「感情制御力」が上がり、「実践力」が下がっている(図4参照)。一般的に「実践力」が低い学校に見られる特徴として、カリキュラムの枠組みがしっかりと固まりすぎている結果、やることが明確すぎる(生徒が深く考える必要がない)ために生徒が「教師に言われたことに応えればよい」という行動特性になっているケースがあるので注意したい。

なお両学年ともに「親和力」「協働力」が下がる傾向があるが、昨年も報告したとおりこれは全国的な傾向であり、特に問題視するほどの下がり具合ではない。

図 3_2 期生のジェネリックスキル平均

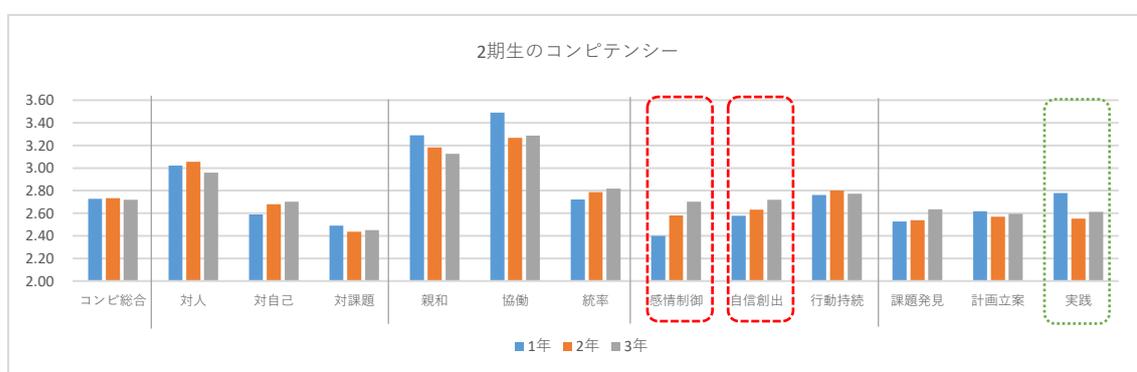
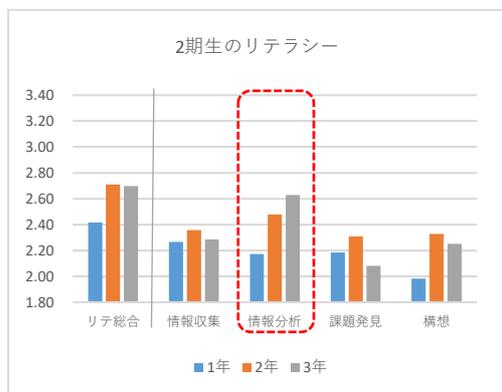
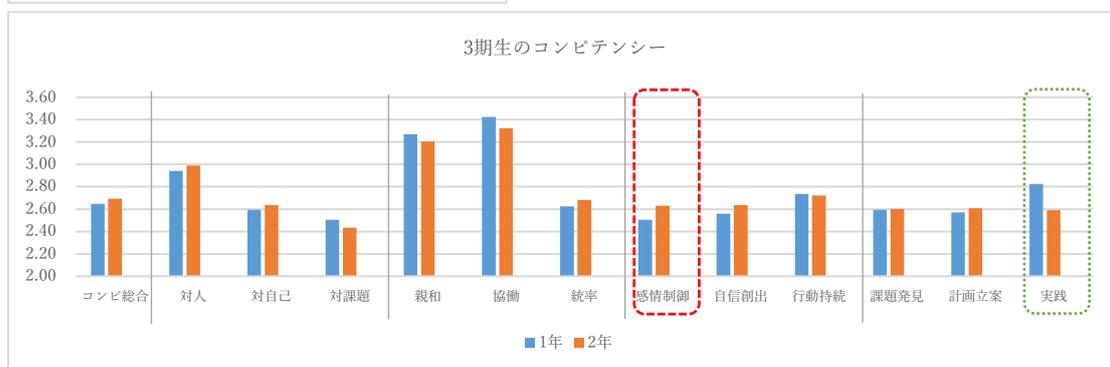
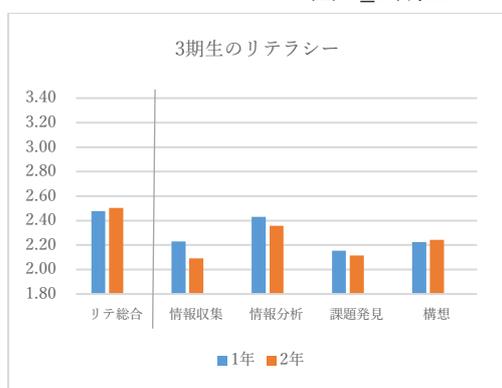


図 4_3 期生のジェネリックスキル平均



(3) 育てたい6つの力の成長について

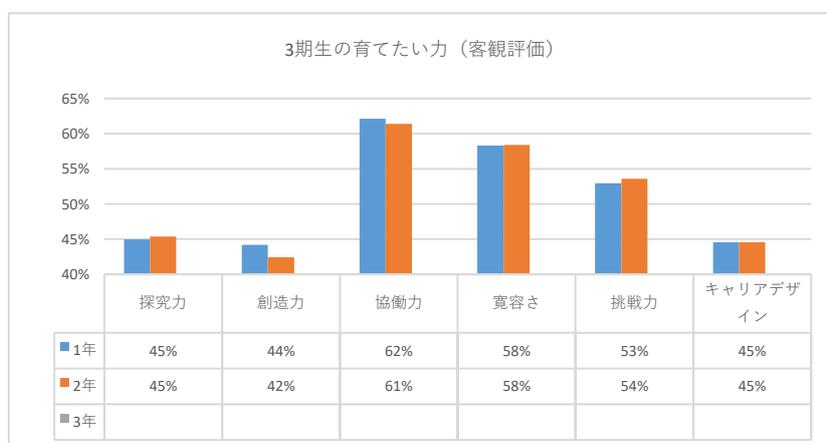
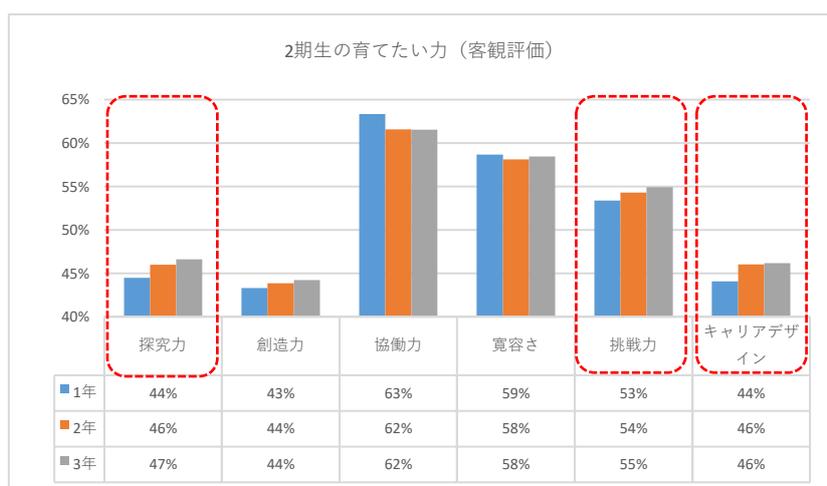
ジェネリックスキルと育てたい6つの力の紐づけに従って各スキルの合成変数から6つの力の到達度を算出し、2期生の変化を見たところ「探究力」「挑戦力」「キャリアデザイン力」において成長が見られた。「協働力」「寛容さ」が少し下がるのは、ジェネリックスキルの対人系（親和力や協働力）の力が関係しているためであり、これらの力は高校生全体的に高く学年上昇とともにやや落ち着くという傾向がそのまま反映されている（図5参照）。

3期生の「創造力」が下がっているのも、関係しているジェネリックスキルを見れば3期生が苦戦したりテラシーとコンピテンシーの実践力であるため納得のいく結果と言える。

数値が上がることは重要であるが、まずは学校の育てたい力を客観的に見ていくことが重要であり、この結果から教育改善に取り組むことがまさにカリキュラム・マネジメントであると言える。

なおグローバル探究の時間に実施している生徒の成長セルフチェックシート（生徒による自己評価）では、育てたい力全てにおいて成長実感を得ることができていることを申し添えておく（詳細は次ページ以降を参照）。

図5_育てたい6つ力（MMPを使った客観評価）



3. 【分析②】自己評価と客観評価を組み合わせた多面的な評価の検証

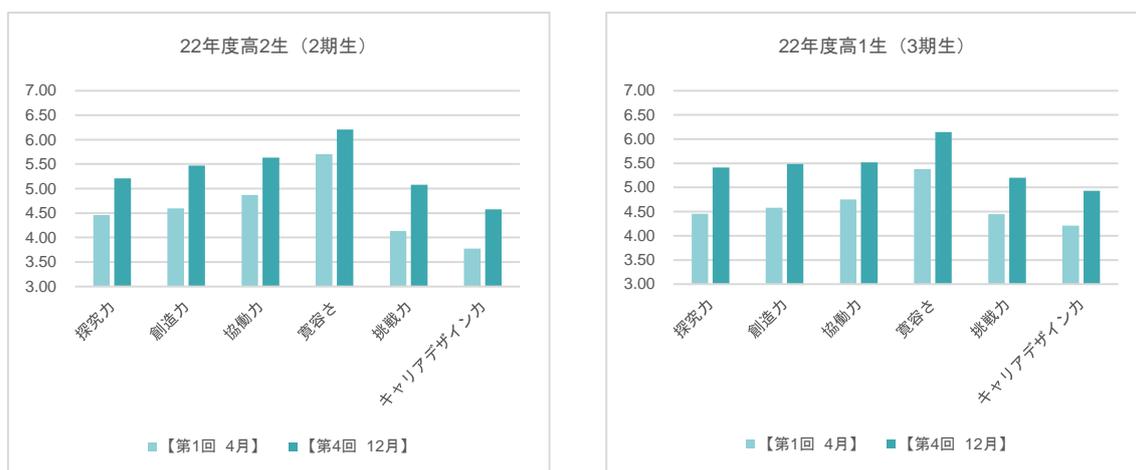
(1) 分析概要

成長セルフチェックシートの昨年の伸長結果（22年4月から22年12月にかけて）と、MMPの22年度から23年度にかけての伸長結果を紐づけ、自己評価と客観評価にどのような違いが見られるのか分析した。なおMMPの結果が紐づいた件数は2期生128名、3期生149名であった。

(2) 自己評価結果の振りかえり

昨年の報告書で報告した通り、4月から12月にかけてのセルフチェック平均は軒並み上がっていたことが確認できている。MMPの結果と紐づいた生徒で再集計してもその傾向は変わりなかった（図6参照）。

図6_成長セルフチェックの平均値（4月、12月）

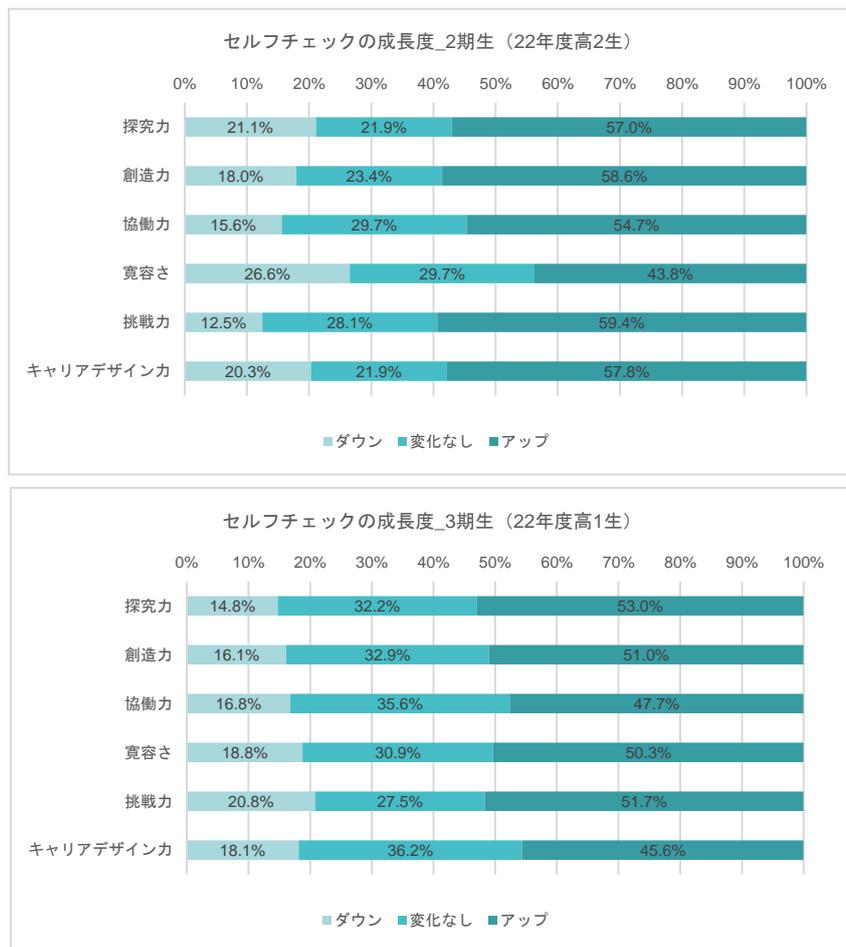


更に成長実感を得られた生徒がどの程度いたのかを把握するために、セルフチェックの数がアップもしくはダウンした生徒の割合を算出したところ、両学年とも全ての力において半数近い生徒がアップしており、多くの生徒がグローバル探究の時間において成長実感を得られたことが分かる（図7参照）。

図7だけ見ると、2期生（22年度高2生）の「寛容さ」はアップの割合が少なく、ダウンの割合が多いため一瞬成長しにくい力と言えそうだが、図6を見ると「寛容さ」はもとの値（4月時点）が高く、そもそも既に成長していると感じている生徒が多い力だということが分かる。逆に「キャリアデザイン力」などはもとの値（4月時点）が低めなので、もう少しアップ割合が高く（もしくはダウン割合が低く）であると望ましいのではないかと感じる。

いずれにしてもこのように平均値と度数分布をあわせて見ることで、間違った解釈を防いんだり、新たな指針を見出すことができる。

図7_成長セルフチェックのアップダウン割合



(3) 客観評価を組み合わせた多面的評価

自己評価の成長感と MMP を使った客観評価の変化を集計したのが図 8 である。散布図を見るとより分かり易いが、2 期生 (22 年度高 2 生) だと「寛容さ」「協働力」が自己評価も客観評価も噛み合っているのが確実に身につけている力と言ってよいだろう。「挑戦力」「探究力」は身につけているが意識して使っていないとすぐに失うかもしれない力、そして「創造力」「キャリアデザイン力」は身についたと思っているかもしれないが、より意識して使っていく必要がある力と見ることができる。

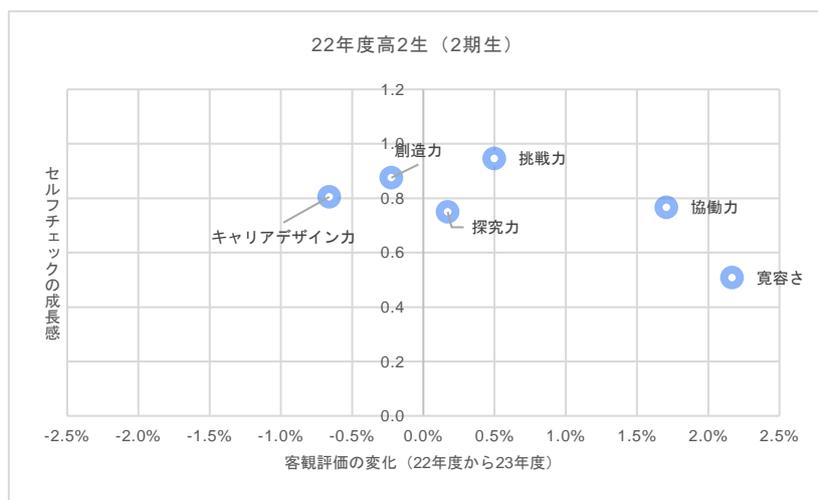
同じように 3 期生 (22 年度高 1 生) を見ていくと「寛容さ」「挑戦力」が確実に身につけている力、「探究力」がすぐに失うかもしれない力、「協働力」「キャリアデザイン力」「創造力」がより意識して使っていく必要がある力と見ることができる。

このように客観評価を紐づけることで、確実に身につけている力や油断すると失うかもしれない力などをおさえ、それを意識させる取り組みや環境を教育活動の中に取り入れていけると更にグローバル探究の価値が上がっていくであろう。

図 8_自己評価の成長感と客観評価の変化

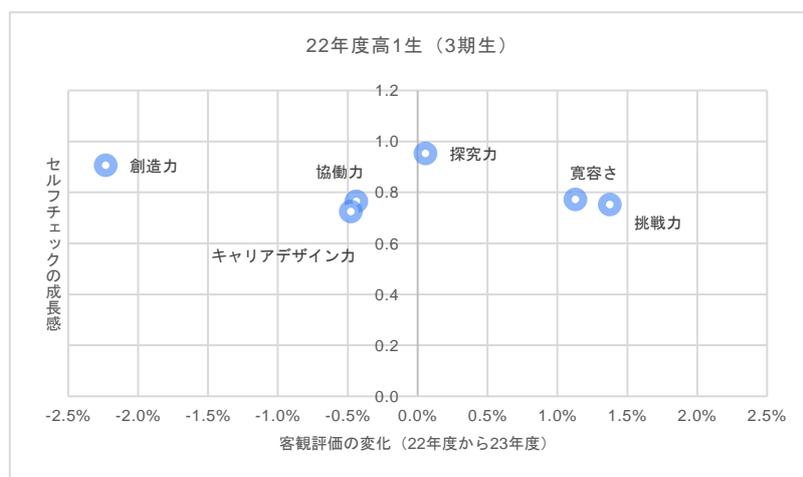
2年

	セルフチェックの成長感 (4月→12月)	MMP客観評価 (22年度高2)	MMP客観評価 (23年度高3)	客観評価の 変化
探究力	0.75	46.3%	46.5%	0.2%
創造力	0.88	44.3%	44.1%	-0.2%
協働力	0.77	60.1%	61.8%	1.7%
寛容さ	0.51	56.9%	59.1%	2.2%
挑戦力	0.95	55.0%	55.5%	0.5%
キャリアデザイン力	0.80	46.5%	45.8%	-0.7%



1年

	セルフチェックの成長感 (4月→12月)	MMP客観評価 (22年度高1)	MMP客観評価 (23年度高2)	客観評価 の変化
探究力	0.95	44.9%	44.9%	0.1%
創造力	0.91	44.1%	41.9%	-2.2%
協働力	0.77	62.6%	62.1%	-0.4%
寛容さ	0.77	58.6%	59.7%	1.1%
挑戦力	0.75	53.5%	54.8%	1.4%
キャリアデザイン力	0.72	44.8%	44.3%	-0.5%



4. まとめ

2期生の結果を中心にまとめると下記のとおりである。

- ① ジェネリックスキルでは、リテラシーの「情報分析力」、コンピテンシーの「感情制御力」「自信創出力」において成長が見られた。
- ② グランドデザインとして掲げている『育てたい力』にジェネリックスキルを紐づけたところ、「探究力」「挑戦力」「キャリアデザイン力」において成長が見られた。
- ③ グローバル探究の時間では、『育てたい力』の全てにおいて生徒は高い成長実感を得ることができている。
- ④ 上記の自己評価に客観評価も加味すると、「協働力」「寛容さ」が確実に身につけている力と言える。

以上

4.4 「世界の言語」の取り組みの成果と課題

4.4.1 「世界の言語」の意義

学校設定科目の一つである「世界の言語」は、全国的に、あるいは国際的に見ても、二つの点で他に例のない言語教育カリキュラムといえる。第一の点は、生徒全員が必修で学ぶ言語の数である。韓国語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語の5言語に加え、1年次末にはわずか1時間ではあるが日本手話も体験する。日本語（国語）と英語も加えると生徒たちは8言語に接することになる。第二に、「世界の言語Ⅰ」において8時間ずつその基礎を学ぶ5言語の学習内容が有機的につながっている点も重要である。各言語の教員が別々に自分の担当言語の授業を組み立てるというよりも、担当者全員が打合せをしながらほぼ共通の内容を元に各言語独自の要素を盛り込むよう工夫がなされている。また、5言語の学習の開始前と終了後には、複数の言語や言語学習を結びつける意識を高める内容の講義が大学の研究者によって行われる。これらを総合すると、「世界の言語Ⅰ」は、元々欧州で提唱され、最近日本でも知られるようになった複言語主義に基づく教育活動（以下、複言語教育）だといえよう。

ただ単に学習する言語を増やし言語ごとに別々のカリキュラムで行われる多言語教育と比較すると、複言語教育はいくつかの特徴的な効果をもたらすと考えられている。例えば、言語そのものへの理解、言語間の共通点や相違点への気づき、言語能力や言語学習における相互転移の促進、学習言語だけでなく多様な言語への開かれた態度などの涵養である。このような資質能力を育むことにより、2年次以降の「世界の言語Ⅱ」や「世界の言語Ⅲ」あるいは日本語や英語そして将来必要となる言語を学びやすくなる可能性が高い。その意味において、この「世界の言語」は、言語教育学的に見て、先進的、実験的な取り組みでもある。

4.4.2 取り組みの成果

本校開設からこれまで様々な学術的な場において、中尾校長をはじめ、「世界の言語」担当教員および研究者（筆者）とで、この取り組みの成果を発表してきた。以下は、国際学会における口頭発表である。

- (1) YOSHIMURA, M., NAKAO, Y. and MIZUMOTO, H. (2021). «Organisation d'une expérience d'enseignement plurilingue dans une école secondaire japonaise (Organization of Multilingual Teaching Experience in a Japanese Secondary School)». (9th International Congress of Association Éducation et Diversité Linguistique et Culturelle, l'Université Aristote de Thessalonique, du 6 au 9 juillet, 2021)
- (2) YOSHIMURA, M. and TAKATANI, F. (2022). « Multilingual Lessons Conducted by High School Students for Primary School Students: A Collaborative Practice and its Effects on Students' Language Awareness and Use». (International Association for Languages and Intercultural Communication Conference, University of Lisbon, 9 September, 2022)
- (3) YOSHIMURA, M. and OTTOSON, K. (2023). "Developing Intercultural Competence of Secondary School Students in Plurilingual Education". (10th International Conference of the Education and Linguistic and Cultural Diversity Association, June 28, 2023)

これらの内 (1)および (2) については、以下 (4) (5) の日本の全国学会誌において、それぞれ論考、報告として掲載されている。

- (4) 吉村雅仁、中尾雪路、水本祐之 (2021) . 「日本の高等学校における複言語教育実践の試み—5言語必修の多言語授業と言語意識活動—」 『複言語・多言語教育研究』第9号, pp.82-98.

この論文においては、「世界の言語Ⅰ」の概要を説明した上で、このカリキュラムを1年間経験した生徒たちの、言語ポートレート、言語能力の自己評価、言語そのものや言語学習についての意識を分析し、この取り組みが複言語主義に基づく言語教育活動として機能しうることを実証した。複言語主義を「能力」と「価値」の側面に分けて見ると、結果として生徒たちは、まず「能力」の側面として、「自分自身の言語レパートリーの（部分的能力を含め）多様性を意識できるように」なり、「言語間の比較を行い、基礎的ではあるが、メタ認知がある程度できるように」なること、また「価値」の側面として、「言語

そのものや言語学習に関する意識が変化し、「学校外の言語・文化体験にかかわる意識や行動が変容する」ことが明らかになっている。

(5) 吉村雅仁、高谷文也 (2022) . 「高校性による小学生のための多言語授業—協働的实践による言語意識への効果—」『複言語・多言語教育研究』第10号, pp.227-236.

上記 (4) の開校初年度の「世界の言語Ⅰ」についての報告に続き、翌年度の同活動に関する報告がこの論文の内容である。開校2年目の「世界の言語Ⅰ」においては、1年次生徒たちは、5言語を学び終えた後に、年度末の課題として5言語の中から自分たちが選択した一つの言語について、グループ単位で小学生向けの短いレッスンを計画し、オンラインで小学校とつないで授業を実施した。この活動の成果として、小学生たちは、高校生のレッスンにより多様な言語への興味や学習意欲を高めること、高校生たちは、選択した言語やその背景文化をさらに調べる同期が与えられただけでなく、当該言語を知らない人々に対する効果的なコミュニケーションについて考えるようになることがわかった。

上記 (3) は、(5) に続き翌年度の「世界の言語Ⅰ」の年度末課題として、外語大学と教育大学の研究者による異文化間能力に関する授業を受けて成果物を作成し、それによって彼らの異文化間能力がどのように変化するかを調べたものである。この内容の詳細については、フランスで出版される書籍 (タイトル未定) の章として掲載される予定である。

加えて、「世界の奈良」の3年間全体の取り組みおよびその成果についても、来年7月にカールスルーヘ (ドイツ) で開催される Association for Language Awareness 30周年記念大会において、フランスやノルウェーの研究者・実践者とともにシンポジウム形式で発表する予定である。我々日本チームの発表タイトルは、“Plurilingual Education in Japan Through Collaboration between a High School Teachers and a Researcher: A Five-Language Compulsory Course with Language Awareness Activities” (発表者: 吉村雅仁、高野正之) となっている。

以上見てきたように、「世界の言語」は、カリキュラム自体が学術的に注目される取り組みであり、生徒の言語能力・意識および言語学習への意欲や態度に大きな影響を与えることがわかってきている。これらの成果は、今後の外国語教育のみならず言語教育そのものを考え直す際に、貴重な情報を提供できると思われる。

4.4.3 今後の課題

これまでの言語教育のあり方とは異なる、いわば先駆的なカリキュラムである「世界の言語」は、生徒たちの言語学習に少なからず効果が期待できるが、これを維持するあるいはさらに発展させるための課題がいくつか存在する。

まず、言語教育政策に関する管理職および教育委員会の価値観、考え方である。全国の「国際」の名が付く多くの高等学校において、ただ英語教育を改善、強化することを主眼とする例が圧倒的に多い中で、現在の中尾雪路校長は、本校開設計画時から「国際+英語」を標語に掲げ、「世界の言語」を研究者とともに構想してきた。教育長をはじめとする当時の教育委員会も彼女を支え、この取り組みが実現したのである。これまでの学術的な実証研究から見てもその成果は明らかであり、国際高校において「世界の言語」同様に力を入れている英語教育の効果にも資すると考えれば、今後も、本カリキュラムを持続発展させる政策を維持することが重要であろう。

次の課題としては、担当教員の確保を挙げることができる。現在の「世界の言語」カリキュラムにおいては、スペイン語、フランス語、ドイツ語の担当については、各言語と英語の教員免許を有する専任教員が存在する。彼らを中心に「世界の言語」担当チームが形成され、定期的に打合せ等を行いながら、学習効果を高めている。しかしながら、中国語と韓国語については非常勤講師が担当しており、彼らの継続的な勤務は不安定なことも多く、可能なかぎり専任教員をそろえることが望まれる。

また、研究者をはじめとする学校外専門家との連携も課題の一つとなる。様々な研究成果の蓄積は国の教育政策に影響を与えることがしばしばあり、「世界の言語」のような先駆的な取り組みの成果は学術的な場で広めることが重要である。そのためにも、カリキュラムマネージメントの一環として、校内チームだけでなく校外の研究者・学生などとも協働の基盤を構築しておくのが良いであろう。

探究の深い学びを支える4つの視点 —カリキュラムアドバイザーからの報告—

奈良県立国際高校 カリキュラムアドバイザー 吉田敦彦
(大阪公立大学現代システム科学域教育福祉学類 教授)

創設4年目となる奈良県立国際高校のカリキュラムアドバイザーとしての活動を振り返り、そこで得た知見を報告する。報告者は、交流協定を結んだ大阪公立大学の教育学を担う教授として、開校初年度から本校のヴィジョンに共鳴し、グローバル探究の授業参観、大学の講義への生徒招待、担当教員と意見交換等を行ってきた。ここでは、探究学習を「主体的・対話的で深い学び」にしていくために、実践のなかで浮かびあがり、共有されてきた4つの視点を報告する。

視点1 ジブンゴト（自分事）にする

国際高校でのグローバル探究は、「2010年代の探究学習の弱点」を超えていく先進的なチャレンジとなっている。従来の探究学習においては、「データ処理やプレゼン方法などのスキル能力はアップするが、それをを用いて解決する課題への『当事者意識』『本気で何とかしなくちゃ』が育っていない」（WWL評価会議F高校）、あるいは「（全国の先行事例では、）課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現」のサイクルを実践することに重きがおかれすぎており、そもそも何のために行うのかという目的が欠落しているケースが多い」（河合塾）といった課題がある。この点で本校の探究学習は、「自分事にする」という当事者意識や、「そもそも何のために」という目的意識を明確にして、問題発見・解決を念頭においた深い学びの過程を正面から追求しているのが特色となっており、強みとなっている。

視点2 「答え」ではなく「問い」

とはいえ、この「自分の課題を見つける」というのが、これまで課題を与えられて学んできた生徒にとって、難しいことでもある。A) 解決スキル（答え）を身に付けるのが先か、B) 解決したい課題（問い）を発見するのが先か。「外から与えられた課題」でなく「自分の内から湧き出た課題」が見つかったら、その解決のための方法スキルは、適切なものを探して結果的に習得できる。スキル（How to）は、それだけを切り出して教えると、空疎な「やらせ」になりがち。それを使って「何を」を解決するか、やりがいのある目的意識と結びつけながら教えるのが、探究学習では特に大事である。

視点3 「もやもや感」はチャンス

自分自身の課題（目的・テーマ）発見は、ワークシートで直線的段階的に教えられるものではない。生徒が「もやもや」し始めるのは、避けるべき困った事態ではない。むしろ、チャンスである。きちんと探究のプロセスを歩み始めているからこそだと、ポジティブに受けとめて、そのプロセスに寄り添う。すぐにテーマが見つからなくて当たり前。立ち止まったり、回り道をするのは、探究の学びでは織り込み済み。もやもや感を大事にしてこそ、「すぐに答えが出ない問いに向き合う力」が育つ。創造的なものは、マニュアルからは生まれない。

「もやもや感」は、何かが生まれ出ようとしているけれど、いまだその姿が明確でない過渡期のカオス——青虫が蝶にメタモルフォーゼする前に必要な蛹（さなぎ）の時期だ。何かが生まれようとする力があるからこそ、「もやもや感」が生まれる。

視点4 「ロールモデルと出会う」という方法

「もやもや感」を経て新しいステージが生まれるために、では、どんな方法があるだろう。探究プロセスは、全ての生徒が同じルートで歩むのではないから、定型的なカリキュラムにするのは難しい。仕組める一つは、「ロールモデル」との出会い。背中をみて憧れて学び（真似び）たくなるような、魅力的な大人、先輩の姿。教員自身の探究の姿も含めて。逆に言えば、自分の頭の中でググルググル考えても、同輩同士で話し合っても、なかなかテーマ・課題と出会えないことが多い。慣れ親しんだ世界から外に出て、これまで会ったことのない他者に出会って、新しい気づきが生まれ、新しい世界が開ける。定期テストに代わる探究週間などは、そんな新しい出会いを求めて人に会いに行ける貴重な機会としたい。

1期、2期の卒業生が出て、進学先への関心も高い。しかし、国際高校での学びは、進学準備教育ではないだろう。高校時代の学びそれ自体が充実していれば、それが結果として人生を切り拓いていく進路に繋がっていく。探究の学びが総合型選抜で大学での研究に接続していった事例はモデルケースだろう。

「将来役に立つから」「いつか使えるから」「入試に出るから」という未来中心の学びでは、何のために今学んでいるか実感を持ってないことが多い。目的が、現在の学びの中に内在していないと、テストのため、入試や進学のため、といった外にある目的のために学ぶ姿勢を育ててしまう。そして、今ここで学んでいること自体の喜び、今自分がもっている関心・課題に取り組む「現在中心の学び」が、先送りされてしまう。そのような学び方から脱却するのが、探究する学びの真骨頂である。この意味で次年度に向けて、「**未来中心の学び**」と「**現在中心の学び**」という視点を意識してみるのもよいかもしれない。

教育課程表

令和5年度における中学校第1学年 及び 高等学校第1・2・3学年の教育課程表

国際中学校			国際高等学校													
学年	I	区分	教科	科目	標準単位数	国際科(理系型)			国際科(文系型)			国際科(海外進学型)				
						1	2	3	1	2	3	1	2	3		
教科	国語	教科	普通教科	国語	現代の国語	2	2			2			2			
					言語文化	2	2			2		2				
					論理国語	4				2						
					文学国語	4				2						
					古典探究	4				2						
					国語探究Ⅰ	3		4						3		
					国語探究Ⅱ	3			4							
					現代文B	4						3			2	
	古典B			4						3			3			
	社会			社会	地理歴史	地理総合	2		2			2			2	
						歴史総合	2	2			2			2		
						日本史探究	3					2※イ				
						世界史探究	3					2※イ			3	
						日本史A	2								3※ウ	
						世界史B	4						3		2	
						地理B	4			2						
						世界史探究	2							2※キ		
	公民			公民	公共	2		2			2			2		
					政治・経済	2						2※イ		2※イ		
					倫理	2						2※キ		2※イ		
数学	数学	数学Ⅰ	3	3			3			3						
		数学Ⅱ	4		4			4			4					
		数学Ⅲ	3													
		数学A	2	2			2			2						
		数学B	2		2			2			2					
		数学Ⅱβ	4						2							
		数学Ⅲ	5			5										
		数学探究	2			2			2		2					
理科	理科	物理基礎	2	2			2			2						
		化学基礎	2		2			2			2					
		生物基礎	2	2			2			2						
		物理	4		2※ウ	4※カ										
		化学	4		2	3										
		生物	4		2※ウ	4※カ										
保健体育	保健体育	体育	7~8	2	2	3	2	2	3	2	2	3				
		保健	2	1	1		1	1		1	1					
音楽	音楽	音楽Ⅰ	2	2※7			2※7			2※7						
		書道Ⅰ	2	2※7			2※7			2※7						
美術	美術	家庭基礎	2	2			2			2						
		情報Ⅰ	2													
技術	家庭	社会と情報	2													
		普通教科・科目 小計		22	23	23	22	23	18 20	22	21	12・14 15・16 17・19				
英語	英語	専門教科	総合英語Ⅰ	3~6	4			4			4					
			総合英語Ⅱ	4~8	2	3			2	3		2	3			
			総合英語	8~14			3				3		3			
			異文化理解	2												
			ディベート・ディスカッションⅠ	2~6		2			2			2				
			ディベート・ディスカッションⅡ	2~6			2			2			2			
			エッセイライティング	2			2			2			2			
			EAPⅠ (English for Academic Purposes)	2								2				
			EAPⅡ (English for Academic Purposes)	4									4			
			道徳	道徳	世界の言語Ⅰ	2	2			2			2			
世界の言語Ⅱ (中韓西仏独よりⅠ)	2				2			2			2					
世界の言語Ⅲ (中韓西仏独よりⅠ)	2								2※イ		2※イ					
グローバル探究Ⅰ	3	3					3			3						
グローバル探究Ⅱ	3				3			3			3					
グローバル探究Ⅲ	3					3			3		3					
ワールドヒストリー探究	2										2※イ					
サイエンス探究	3								3							
イマージョン理数	3									3※ウ						
専門教科・科目 小計		11	10	10	11	10	13 15	11	12	14・16 17・18 19・21						
各教科・科目 計						33	33	33	33	33	33	33				
総合的な学習の時間	2	総合的な探究の時間														
各教科・科目等 計						33	33	33	33	33	33	33				
特別活動	1	特別活動	ホームルーム活動			1	1	1	1	1	1	1				
合計	34	合計				34	34	34	34	34	34	34				
(注)		(注)				*「情報Ⅰ(第1、2学年)」はグローバル探究Ⅰで代替 *「社会と情報(第3学年)」はグローバル探究Ⅰで代替 *「異文化理解(第3学年)」はグローバル探究Ⅱで代替 *「総合的な探究の時間」は「グローバル探究Ⅰ~Ⅲ」で代替 *奈良TIMEは「グローバル探究Ⅰ」で実施										